石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要24

●

－昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点－

2016年3月

島根県大田市教育委員会

巻頭図版 1

昆布山谷地区第５地点　ＳＸ 02 全景（南東より）

巻頭図版２

布山谷地区第６地点　ＳＸ 20 全景（北東より）

昆布山谷地区第７地点　ＳＸ 21・22 全景（南東より）

巻頭図版 3

豊栄神社地点　３Ｔ　ＳＤ 01（北東より）

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要24

●

－昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点－

2016年3月

島根県大田市教育委員会

序

石見銀山遺跡は16世紀から20世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡を中心として、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ２本の街道、銀鉱石・銀の積み出しや諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡であり、前近代鉱山の総体を示す遺産として、2007年にユネスコ世界遺産に登録されました。

遺跡の発掘調査は31年目となり、銀山地区内の昆布山谷地区と豊栄神社地点、伝建地区内の宗岡家地点の発掘調査などを実施したところです。

今年度に実施した昆布山谷地区の発掘調査は6年目となり、昨年度に引き続き岩盤加工遺構の詳細な調査を進め、周囲との関連性も確認を行いました。

宗岡家地点においては、修理整備事業に先立ち平成26年度から発掘調査を実施しており、本年度は江戸時代初期とみられる積石遺構や宗岡家住宅以前の建物に関連するとみられる礎石や石列を確認したところです。

豊栄神社地点では、環境整備事業に先立ち、昭和18（1943）年に発生した土石流の影響や地下遺構の確認調査を実施し、境内を区画する玉垣の基礎部分や埋没していた石組の溝を検出し、土石流で埋まった石造物の石材がそのまま残存していることも判明しました。

こうした基礎資料を基に調査研究が着実に進むことを期待し、併せて調査にご協力いただきました関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成28年3月

島根県大田市教育委員会

教育長　**大　國　晴　雄**

例　言

1．本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。

2．調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。

3．本書は、平成27年度の昆布山谷地区、宗岡家地点、豊栄神社地点及び、伝統的建造物群保存地区、世界遺産指定範囲内で実施した調査の概要をまとめたものである。

4．調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

勝部　昭（元島根県教育委員会教育次長）　黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
高安克己（島根大学名誉教授）　田邉征夫（(公財)大阪府文化財センター理事長）
田中哲雄（元東北芸術工科大学芸術学部教授）　中塩　弘（ＤＯＷＡホールディングス㈱取締役）
仲野義文（石見銀山資料館館長）　中村俊郎（中村ブレイス㈱代表取締役社長）
村田信夫（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）
和上豊子（石見銀山ガイドの会前会長）

〔石見銀山遺跡調査専門委員会〕

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長代理）　大橋泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部　昭（元島根県教育委員会教育次長）　黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
田邉征夫（(公財)大阪府文化財センター理事長）　中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野義文（石見銀山資料館館長）　原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上　隆（京都美術工芸大学教授）

〔事 務 局〕大田市教育委員会石見銀山課

〔調 査 員〕山手貴生・新川　隆・尾村　勝（大田市教育委員会石見銀山課）

〔遺物整理〕高村玲子・井上伸子・浅野美貴

〔調査指導〕文化庁記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所、島根県教育委員会

5．挿図の縮尺は、図中に示した。

6．挿図中の座標は、昆布山谷地区は世界測地系を、宗岡家地点と豊栄神社は旧日本測地系の座標を使用した。また、レベル高は標高を示す。

7．Fig.１・Fig.２は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。

8．本文中に使用した略号は下記のとおりである。

ＳＤ－溝跡　ＳＫ－土坑　ＳＷ－石垣・石積み　ＳＸ－炉跡、特殊遺構

9．挿図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。

10. 発掘調査に当たっては大橋泰夫氏より、現地指導を賜った。

11. 本書の執筆は第４章、第６章第３節、第６章第４節の一部を新川が、それ以外を山手が行なった。本文中の挿図は遺構図については尾村が、遺物実測図については新川が中心になって作成した。写真については、遺構写真は各担当者が、遺物写真については山手が撮影した。編集は筆者協議の上、新川が行った。

12. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

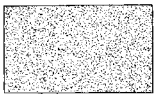
凡　例

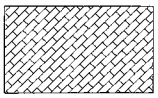
１．図版の表現

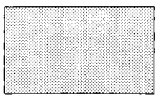
遺構・遺物図版中における表記は下記による。

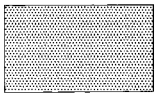
これ以外のものについては個別に図中に示した。

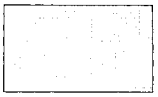
〔遺 構〕


被熱土壌

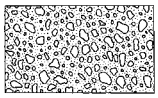

岩盤

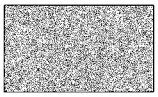

炉壁


黄色粘土

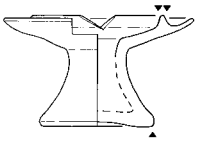

灰白色粘土

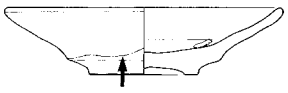
灰色土

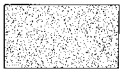

カラミ（精錬滓）


黒色土（炭層）

〔遺 物〕

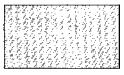





煤

膜状付着物

炭化物


被熱部分

図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。

２．本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズ　　リ・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外鉱物をいう

ユリカス・・・比重選鉱により除去された砂粒

カ ラ ミ・・・広義の製錬工程にて排出された鉱滓

本文目次

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と概要 …… 1
第２節　平成27 (2015) 年度の調査 …… 2

第２章　昆布山谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境 …… 5
第２節　調査の概要 …… 5
第３節　第５地点 …… 5
第４節　第６・７地点 …… 14
第５節　小結 …… 21

第３章　宗岡家地点の調査

第１節　調査の概要 …… 22
第２節　調査の成果 …… 22
第３節　小結 …… 32

第４章　豊栄神社地点の調査

第１節　調査の概要 …… 33
第２節　調査の成果 …… 33
第３節　小結 …… 47

第５章　本年度の試掘・立会調査

第１節　平成27年度の調査地点 …… 50
第２節　上市恵比須社地点の試掘調査 …… 50

第６章　総括

第１節　昆布山谷地区 …… 53
第２節　宗岡家地点 …… 53
第３節　豊栄神社地点 …… 54
第４節　まとめ …… 57

挿図目次

Fig. 1　石見銀山遺跡位置図（S＝1／100,000）…… 1
Fig. 2　石見銀山遺跡調査地点位置図（S＝1／25,000）…… 4
Fig. 3　昆布山谷地区調査地点位置図（S＝1／1,500）…… 6
Fig. 4　昆布山谷地区第5地点検出遺構配置図（S＝1／70）…… 7
Fig. 5　昆布山谷地区第5地点Ⅰ区平面図・立面図・断面図（S＝1／70）…… 9
Fig. 6　昆布山谷地区第5地点SX17・18・19平面図・断面図（S＝1／20）…… 10
Fig. 7　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅰ（S＝1／1、1／2、1／3）…… 12
Fig. 8　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／6）…… 14
Fig. 9　昆布山谷地区第6・7地点平面図（S＝1／140）…… 15
Fig.10　昆布山谷地区第6地点平面図（S＝1／80）…… 16
Fig.11　昆布山谷地区第6地点立面図（S＝1／60）…… 17
Fig.12　昆布山谷地区第7地点平面図（S＝1／80）…… 18
Fig.13　昆布山谷地区第7地点立面図（S＝1／60）…… 19
Fig.14　昆布山谷地区第6・7地点採集遺物実測図（S＝1／3）…… 21
Fig.15　大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点（S＝1／10,000）…… 23
Fig.16　宗岡家地点調査区配置図（S＝1／1,000）…… 24
Fig.17　宗岡家地点検出遺構配置図（S＝1／120）…… 25
Fig.18　宗岡家地点第Ⅴ区検出遺構配置図（S＝1／50）…… 26
Fig.19　宗岡家地点下層確認トレンチ平面図・断面図（S＝1／30）…… 27
Fig.20　宗岡家地点サブトレンチ断面図（S＝1／50）…… 28
Fig.21　宗岡家地点SW01立面図（S＝1／50）…… 28
Fig.22　宗岡家地点SW02平面図・立面図（S＝1／25）…… 28
Fig.23　宗岡家地点出土遺物実測図（S＝1／3）…… 30
Fig.24　豊栄神社地点周辺地形図（S＝1／1,000）…… 34
Fig.25　豊栄神社地点トレンチ配置図（S＝1／200）…… 35
Fig.26　豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅰ（S＝1／50）…… 37
Fig.27　豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅱ（S＝1／50）…… 39
Fig.28　豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅲ（S＝1／50）…… 41
Fig.29　豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅳ（S＝1／50）…… 43
Fig.30　豊栄神社地点出土遺物実測図Ⅰ（S＝1／3）…… 44
Fig.31　豊栄神社地点出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／6）…… 46
Fig.32　豊栄神社地点出土遺物実測図Ⅲ（S＝1／6）…… 47
Fig.33　豊栄神社地点採集遺物実測図（S＝1／6）…… 48
Fig.34　上市恵比須社地点位置図（S＝1／25,000）…… 50
Fig.35　上市恵比須社地点周辺地形図（S＝1／2,500）…… 51
Fig.36　上市恵比須社地点平面図・断面図（S＝1／40）…… 52

表目次

Tab.1　石見銀山遺跡調査一覧表 …… 3
Tab.2　昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表 …… 13
Tab.3　昆布山谷地区第6・7地点採集遺物一覧表 …… 21
Tab.4　宗岡家地点出土遺物一覧表 …… 31
Tab.5　豊栄神社地点出土遺物一覧表 …… 49

図版目次

巻頭図版１　昆布山谷地区第５地点ＳＸ02全景（南東より）
巻頭図版２　昆布山谷地区第６地点ＳＸ20全景（北東より）
　　昆布山谷地区第７地点ＳＸ21・22全景（南東より）
巻頭図版３　豊栄神社地点３ＴＳＤ01（北東より）
PL．１　昆布山谷地区第５地点調査前全景（東より）
　　同　　ＳＸ02全景（東より）
PL．２　昆布山谷地区第５地点第２面検出状況（南西より）
　　同　　第３面検出状況（南西より）
　　同　　第２・３面検出状況（西より）
　　同　　第３面検出状況（西より）
　　同　　第３面検出状況（南西より）
　　同　　第３遺構面下面検出状況（南西より）
PL．３　昆布山谷地区第５地点ＳＤ02-②検出状況（北西より）
　　同　　ＳＤ02-②蓋石検出状況（北西より）
　　同　　ＳＤ02-②ベルト上面（北東より）
　　同　　ＳＤ02-②ベルト断面（北西より）
PL．４　昆布山谷地区第５地点ＳＸ18・19検出状況（北東より）
　　同　　ＳＸ17半截断面（南西より）
　　同　　ＳＸ18半截断面（南西より）
　　同　　ＳＸ19検出状況（南西より）
　　同　　ＳＸ19半截断面（南西より）
PL．５　昆布山谷地区第５地点東壁断面（南より）
　　同　　東壁断面北半（南より）
　　同　　北壁断面（南東より）
　　同　　東壁断面硬化面（南より）
　　同　　東壁断面ユリカス堆積部分（北西より）
PL．６　昆布山谷地区第６地点ＳＸ20全景（北東より）
　　同　　ＳＸ20階段状遺構（南東より）
PL．７　昆布山谷地区第７地点ＳＸ21・22全景（南東より）
　　同　　ＳＸ22・23全景（北東より）
　　同　　ＳＸ22全景（北東より）
　　同　　ＳＸ23外観（南東より）
　　同　　ＳＸ23内部（東より）
PL．８　宗岡家地点第Ⅴ区調査区設定状況（南東より）
　　同　　完掘状況（南東より）
PL．９　宗岡家地点第Ⅴ区ＳＷ01全景（北東より）
　　同　　ＳＷ01東部（北より）
　　同　　ＳＷ01中央部（北より）
　　同　　ＳＷ01西部（北より）
　　同　　東西断面（南東より）
　　同　　東西断面東半（南東より）
　　同　　南北断面南半（東より）
　　同　　南北断面北半（東より）
PL.10　宗岡家地点第Ⅴ区下層確認トレンチ完掘状況（北東より）
　　同　　ＳＷ02完掘状況（東より）
　　同　　下層確認トレンチ北壁断面（南より）
　　同　　下層確認トレンチ西壁断面（東より）
　　同　　下層確認トレンチ東壁断面（西より）
PL.11　宗岡家地点第Ⅴ区ＳＷ02構築面検出状況（西より）
　　同　　ＳＷ02上面砂層検出状況（北西より）
　　同　　ＳＷ02上面砂層検出状況（大写し、北より）
　　同　　サブトレンチ①完掘状況（南東より）
　　同　　サブトレンチ①北壁断面（南東より）
　　同　　サブトレンチ①北部西壁断面（東より）
　　同　　サブトレンチ①北部東壁断面（南西より）
PL.12　豊栄神社地点本殿・拝殿（東より）
　　同　　境内地内調査前状況（北より）
PL.13　豊栄神社地点１トレンチＳＤ01完掘状況（北より）
　　同　　ＳＤ01南半完掘状況（南より）
　　同　　ＳＤ01中央部完掘状況（南東より）
　　同　　北部西壁断面（東より）
　　同　　中央部南壁断面（北東より）
PL.14　豊栄神社地点２トレンチＳＤ01完掘状況（北西より）
　　同　　ＳＤ01西壁（南東より）
　　同　　ＳＤ01東壁（北西より）
　　同　　北壁断面（南西より）
　　同　　南壁断面（北東より）
PL.15　豊栄神社地点３トレンチ完掘状況（南西より）
　　同　　ＳＤ01完掘状況（北西より）
PL.16　豊栄神社地点３トレンチＳＤ01完掘状況（南西より）
　　同　　ＳＤ01丸太材検出状況（南西より）
　　同　　ＳＤ01胴木②北端部（東より）
　　同　　南壁断面（北東より）
　　同　　ＳＤ01東壁（北西より）
　　同　　ＳＤ01西壁（南東より）
　　同　　ＳＤ01西壁胴木①（南東より）
　　同　　ＳＤ01東壁胴木②（北西より）
PL.17　豊栄神社地点３トレンチ完掘状況（北東より）
　　同　　東半部完掘状況（東より）
　　同　　硬化面検出状況（東より）
　　同　　石列検出状況（南より）
　　同　　硬化面検出状況（北西より）
PL.18　豊栄神社地点４トレンチ完掘状況（北西より）
　　同　　西壁断面（東より）
　　豊栄神社地点５トレンチ西壁断面（南東より）
　　同　　完掘状況（南西より）
　　同　　玉垣基礎検出状況（南東より）
　　同　　灯篭基礎（北西より）
PL.19　豊栄神社地点６トレンチ完掘状況（北西より）
　　豊栄神社地点７トレンチ完掘状況（南西より）
　　同　　完掘状況（北東より）
　　同　　西壁断面（南東より）
　　同　　北端部完掘状況（東より）
PL.20　豊栄神社地点８トレンチ完掘状況（南西より）
　　同　　完掘状況（北東より）
　　同　　北半部西壁断面（東より）
　　同　　玉垣出土状況（北西より）
　　同　　南半部西壁断面（南より）
　　同　　石造物出土状況（南東より）
PL.21　豊栄神社地点８トレンチ作業風景（北より）
　　豊栄神社地点９トレンチ西壁断面（南より）
　　豊栄神社地点９トレンチ完掘状況（南西より）
　　豊栄神社地点10トレンチ完掘状況（北東より）
　　同　　北半西壁断面（北東より）
　　同　　南半西壁断面（北西より）
PL.22　豊栄神社地点11トレンチ完掘状況（南西より）
　　同　　東壁断面（北西より）
　　同　　東壁断面（西より）
　　豊栄神社地点12トレンチ完掘状況（南西より）
　　同　　西壁断面（南東より）
　　同　　南端部完掘状況（北東より）
PL.23　豊栄神社地点13トレンチ完掘状況（南西より）
　　同　　西壁断面（南東より）
　　同　　西壁断面（北東より）
　　豊栄神社地点14トレンチ完掘状況（南西より）
　　同　　西壁断面（南東より）
　　同　　北端部完掘状況（南西より）
PL.24　上市恵比須社地点全景（東より）
　　同　　完掘状況（南より）
　　同　　土層断面（南東より）
　　同　　南部石列（北東より）
　　同　　作業風景（南より）
PL.25　昆布山谷地区出土遺物Ⅰ
PL.26　昆布山谷地区出土遺物Ⅱ
　　宗岡家地点出土遺物Ⅰ
PL.27　宗岡家地点出土遺物Ⅱ
　　豊栄神社地点出土遺物Ⅰ
PL.28　豊栄神社地点出土遺物Ⅱ
　　同　　出土瓦
PL.29　豊栄神社地点出土・採集瓦

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と概要

第１項　石見銀山遺跡の位置と概要（Fig. 1）

石見銀山遺跡は島根県中央部の大田市に位置する鉱山遺跡である。遺跡の中心部は日本海から直線距離で約６㎞の内陸部に位置する。遺跡の周辺には大江高山火山群の一角である仙ノ山や要害山などの海抜 400 ～ 500 ｍの山々が連なり、山間には深い谷と水系が発達している。山地から海岸に至るまでに平地は極めて少なく、銀を運んだ街道は中小の丘陵や台地、谷間の水系の間を縫って設けられている。港と港町が位置する沿岸部にはリアス式海岸が展開し、港の奥部には狭い谷が発達している。

本遺跡は 16 世紀から 20 世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡と鉱山町を中心に、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ２本の街道、銀鉱石・銀の積出しや銀山で必要な諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から搬出に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の総体を示すこれ

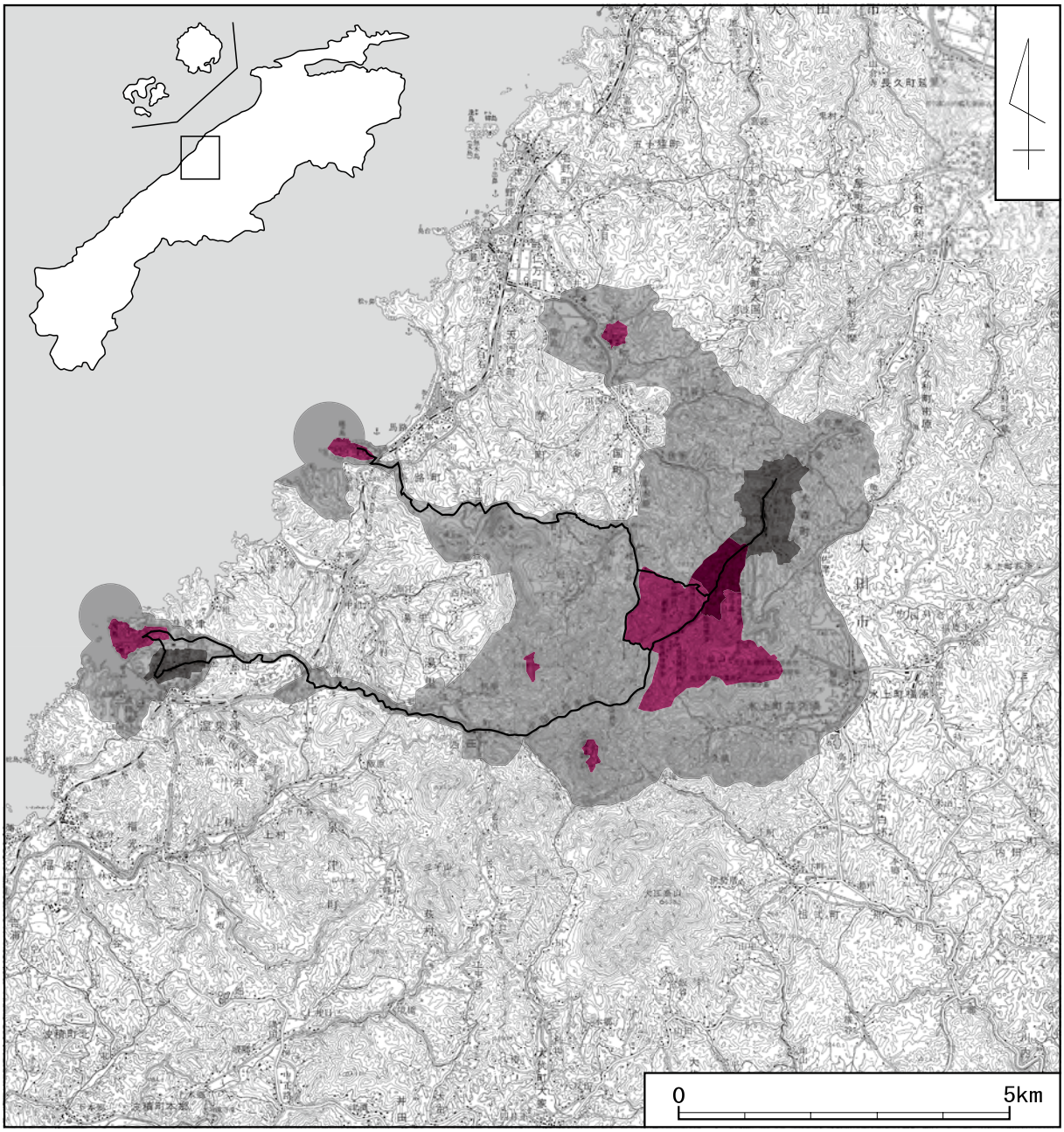


Fig.1　石見銀山遺跡位置図（S ＝ 1 ／ 100,000）

らの良好な遺跡群は、鉱山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在の土地利用の在り方にも伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成 19（2007）年にユネスコ世界遺産に登録された。

第２項　調査の経過（Tab. 1）

石見銀山遺跡の発掘調査は、昭和 58（1983）年度から昭和 60（1985）年度にかけて島根県教育委員会（以下「県教委」）と大田市教育委員会（以下「市教委」）が策定した「石見銀山遺跡総合整備計画」と同時に開始された。昭和 63（1988）年からは県教委と市教委が共同で、平成 18（2006）年からは市教委が主体となって毎年継続して発掘調査を実施している。

平成８（1996）年度からは石見銀山遺跡総合調査が開始し、平成 14（2002）年にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的した史跡範囲の追加指定が行なわれた。その後、調査の進展と共にさらに史跡範囲の拡大と保護措置が図られ、平成 20（2008）年には、史跡指定総面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過は Tab. 1 のとおりである。

第２節　平成 27（2015）年度の調査

石見銀山遺跡の調査研究は平成 27 年度で 31 年目となった。平成 27 年度は、昆布山谷地区と伝統的建造物群保存地区内の豊栄神社地点・宗岡家地点の発掘調査を実施した。また、伝建地区内及び世界遺産指定範囲内において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には試掘･立会調査を随時実施し、遺構･遺物の確認及び記録を行なった。

昆布山谷地区は、石見銀山の開発初期から利用が始まったとされる地域である。石見銀山の開発と居住の様相を明らかとすることを目的として、平成 22（2010）年から発掘調査を継続して実施しており、本年度で６年目となる。本年度の発掘調査は、昨年度に引き続き第５地点と、本年度から新たに設定した第６・７地点を対象として実施した。第５地点においては、昨年度の発掘調査によって岩盤加工遺構（ＳＸ 02）が、江戸時代前半期には利用されていたことが明らかとなっていた。本年度はＳＸ 02 東側にトレンチを設定して発掘調査を実施した。発掘調査によって、硬化面が複数検出され、江戸時代前半期において何度か地表面を貼り替えていたことや、造成などによる地形の改変が行われていたことが明らかとなった。また、造成に際してはズリが利用されていたことが明らかとなった。ＳＸ 02 の最下部付近では、昨年度の調査で検出されていた溝状遺構ＳＤ 02-②が平面的に検出された。第６・７地点は以前より地表面上に岩盤加工遺構が確認されていた地点で、本年度は遺構の内容と周辺地形の確認を目的として測量調査を実施した。

宗岡家地点においては、修理保存事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的とする発掘調査を平成 26（2014）年度から実施している。本年度は敷地内の南部で、主屋と離れに面した庭部分を第Ⅴ区として発掘調査を実施した。第Ⅴ区では現存の宗岡家住宅の構築面からは、昨年度に裏庭で検出されていた内露地や石列などの庭に関連する施設の遺構は検出されなかったが、調査区内西部に設定した下層確認トレンチでは江戸時代初期頃の石積遺構（ＳＷ 02）が検出された。主屋床下では、修理整備の過程において床下が露出した段階で地表面での遺構の確認を行なった。調査の結果、床下部には宗岡家住宅が建つ以前の建物に関連するとみられる礎石や石列が確認された。宗岡家住宅が建つ以前の史料には福本家と記載されたものもあり、福本家に関連する遺構の可能性がある。ただし、本年度は遺構の確認までに止め、本格的な調査は平成 28（2015）年度に実施することとした。

豊栄神社地点では、環境整備事業に先立ち、事業に必要な情報の収集と地下遺構の確認を目的とする調査を実施した。調査により、玉垣の基礎が検出されて境内の範囲が明らかとなったほか、本殿と拝殿の間からは幅約１ｍの石組の溝が検出され、完全に埋没して不明となっていた溝の存在も明らかとなった。また、境内内には昭和 18（1943）年に発生した土石流による土砂が多く残っており、土石流により流失した石材も撤去されず、災害時の状況で残っていることも判明した。

立会・試掘調査は、本年度は石見銀山街道温泉津沖泊道沿いで、温泉津町西田に位置する上市恵比須社地点で実施した。上市恵比須社は岩盤の上に建つ社とされてきたが、今回の調査により岩盤ではなく巨大な転石であることが判明した。

Tab.1　石見銀山遺跡調査一覧表

年　度	西　暦	調　査	調　査　地　点	備　考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④蔵泉寺口番所跡	石見銀山遺跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、温泉津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑨龍源寺間歩	
平成 元 年	1989	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑧上市場	
2 年	1990	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原吹屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下屋敷	
5 年	1993	発掘調査	⑫石銀千畳敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千畳敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千畳敷	
8 年	1996	発掘調査	⑬石銀藤田	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑰宮ノ前、⑪出土谷、石銀藤田	
10 年	1998	発掘調査	⑩栃畑谷、石銀藤田、⑭於紅ヶ谷、⑮竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田、	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
		分布調査	柑子谷地区	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑯本谷、町並み保存地区（阿部家、熊谷家）	
14 年	2002	分布調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区（阿部家、熊谷家）	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、下河原下組、出土谷、本谷	
16 年	2004	分布調査	宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区（岡家）	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区（宗岡家）	
19 年	2007	発掘調査	⑱安原谷、下河原、町並み保存地区（渡辺家）	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区（柳原家、渡辺家）、⑲清水谷製錬所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区（杉谷家、渡辺家）、清水谷製錬所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、昆布山谷	
23 年	2011	発掘調査	⑳昆布山谷、石銀、町並み保存地区（旧大住家）	
24 年	2012	発掘調査	昆布山谷	
25 年	2013	発掘調査	昆布山谷	
26 年	2014	発掘調査	昆布山谷、宗岡家	
27 年	2015	発掘調査	昆布山谷、宗岡家、㉑豊栄神社	

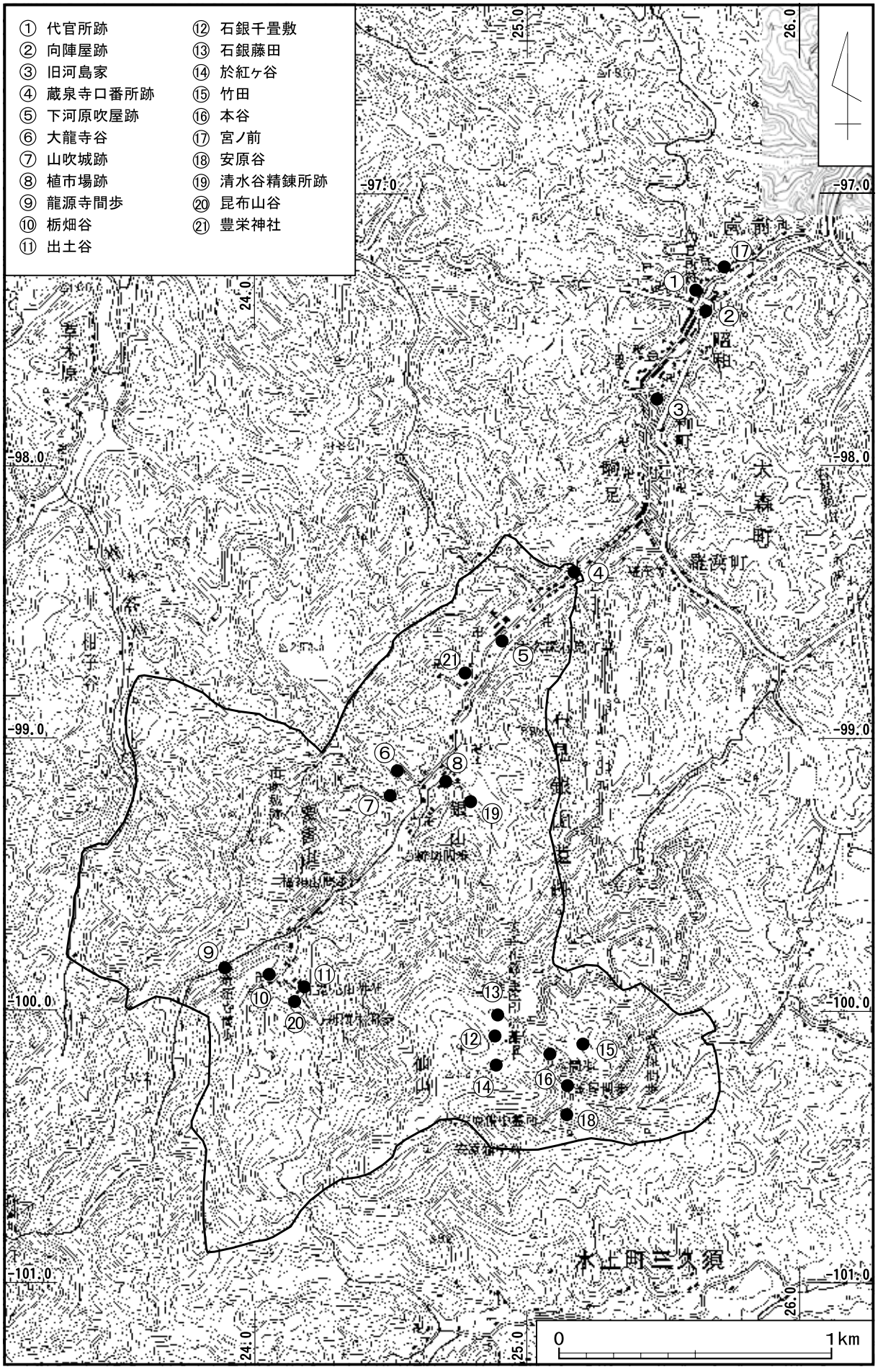


Fig.2　石見銀山遺跡調査地点位置図（S＝1／25,000）

第２章　昆布山谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境

昆布山谷は仙ノ山の西側を南北方向に延びる谷である。「銀山柵内」の範囲の中では南西部に位置し、栃畑谷地区に接している。谷の入口には佐毘売山神社が所在し、谷筋や周辺の尾根上には長楽寺跡や虎岸寺跡などの寺跡や墓地が点在している。墓石には、紀年銘が天正年間（1573 ～ 1593 年）まで遡るものも含まれている。

昆布山谷は石見銀山の開発当初から居住が始まっていたことが文献史料から窺え、近代においても藤田組によって開発されるなど、石見銀山開発初期から大正期の休山に至るまで継続して利用されていた谷である。これまでの発掘調査によっても江戸時代の前半期から近代に至るまでに、断続的に利用された様相が確認できている。以上のように、昆布山谷は石見銀山の開発から隆盛、近代における再開発のいずれにも深く関わっており、石見銀山における鉱業活動や生活を知る上で重要な谷といえる。

第２節　調査の概要

第１項　調査の経緯と成果

昆布山谷地区の近辺ではこれまでに佐毘売山神社を挟んで東側の出土谷地区や、隣接する栃畑谷地区で発掘調査を実施しており、16 世紀後半に遡る遺構・遺物や、18 世紀後半の銅製錬にも関わる遺構が検出されている。昆布山谷地区の発掘調査は、平成 22（2010）年度から開始し、平成 27（2015）年度で 6 年目である。これまでに 5 地点の調査を実施し、谷の広い範囲で 18 世紀後半から近代にかけての遺構・遺物が見つかっている。平成 26（2014）年度からは谷の中ほどに設定した第 5 地点の調査に着手し、江戸時代後半から近代にかけて利用された 3 棟の礎石建物が検出されたほか、調査区内の一部を深く掘り下げたところ、調査地点の西部に位置する岩盤加工遺構（ＳＸ 02）が 17 世紀前半頃には利用されていたことなどが明らかとなった。本年度は昨年度の調査で一部が検出されていたＳＸ 02 の東側にトレンチを設定して発掘調査を行なった。また、第 4 地点と第 5 地点の中ほどに第 6・7 地点を新たに設定し、測量調査を実施した。

第２項　調査区の設定

平成 27 年度は第 5 地点（大森町ニ 270 番地 1）と第 6 ・ 7 地点（大森町ホ 359 番地、ホ 363 番地 2、ホ 365 番地）を対象として調査を実施した。第 5 地点においてはＳＸ 02 の東側で、昨年度設定したⅠ－ａ・ｃ区に相当する範囲を対象とした。第 6 ・ 7 地点は地表面における遺構の残存状況を確認するために測量調査を実施した。

第３節　第５地点

第１項　調査の概要

昆布山谷地区第 5 地点は昆布山谷の中ほどである。調査地点の南側には新横相上坑が、山道を挟んで東側には新横相間歩と呼ばれる坑口が所在する。第 5 地点は平成 24（2012）年度から平成 25（2013）年度にかけて断続的に実施した昆布山谷地区内の分布調査の際に、近代の遺物がほとんど確認できなかった地点である。加えて、現地表面上に岩盤加工遺構や石垣・礎石等の遺構が確認されていたことから、開発初期の様相までを明らかとできる可能性が考慮されたため、平成 26 年度から発掘調査を開始した。本年度の調査では、平成 26 年度の発掘調査で検出されたＳＸ 02 と、造成によって形成された平坦面の様相を明らかとすることを目的として調査を行なった。

第２項　層序（Fig. 5）

トレンチ調査により確認できた堆積状態について報告する。調査によって、地表面として機能していた面は 3 面確認されたが、第 2 面では明確な遺構は検出されなかったため、遺構面は第 1 面と第 3 面の 2 面である。各整地面の様相は Fig. 5 のとおりである。第 1 遺構面は 4 層上面である。昨年度の発掘調査で出土した遺物から、幕末まで利用されていた面とみられる。遺構としてはＳＢ 01 が検出されている。第 1 遺構面から第 2 面までにはズリなどを利用した造成土が約 1 m堆積しており、第 1 遺構面が形成された時期には土

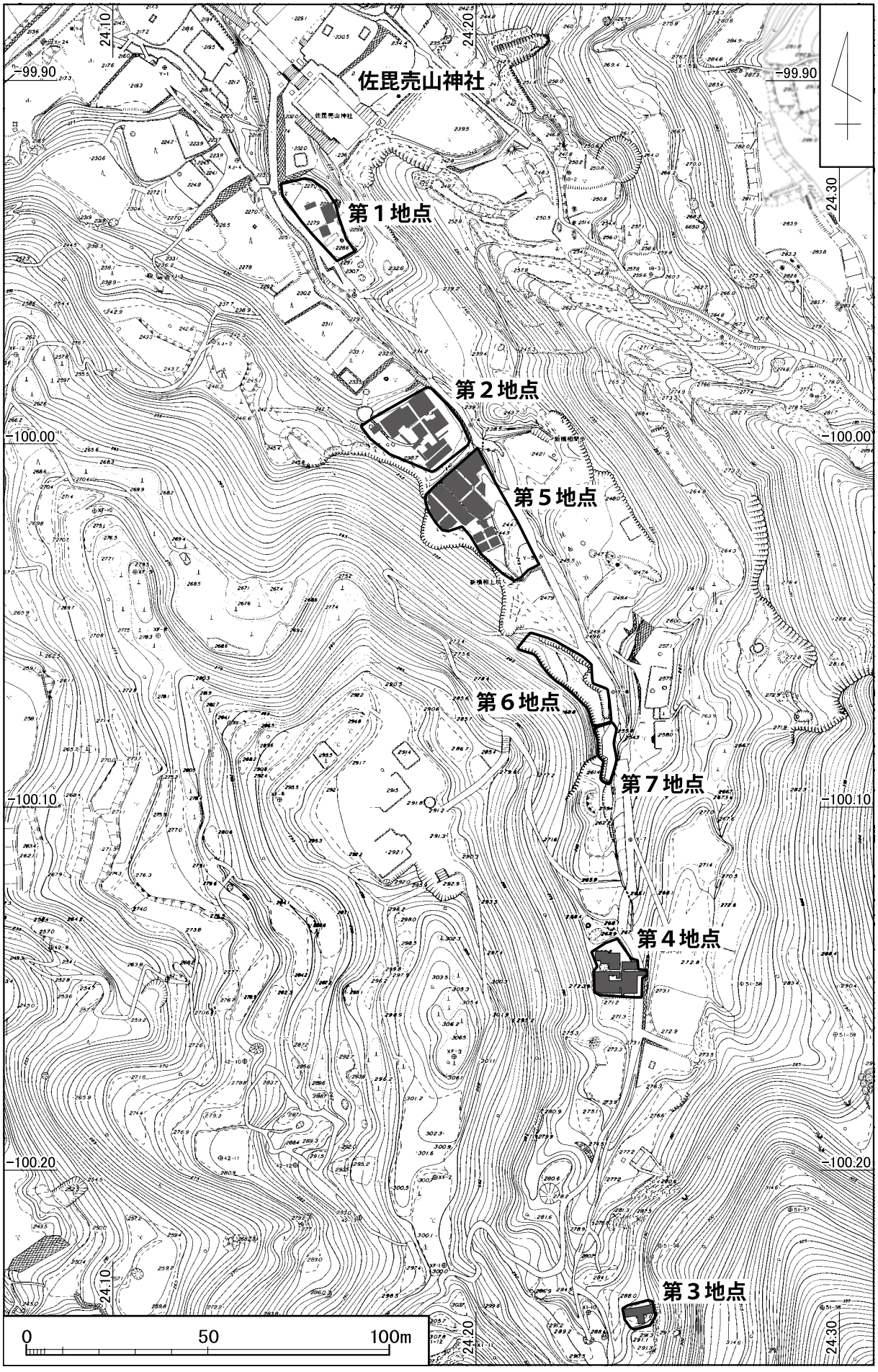


Fig.3　昆布山谷地区調査地点位置図（S＝1／1,500）

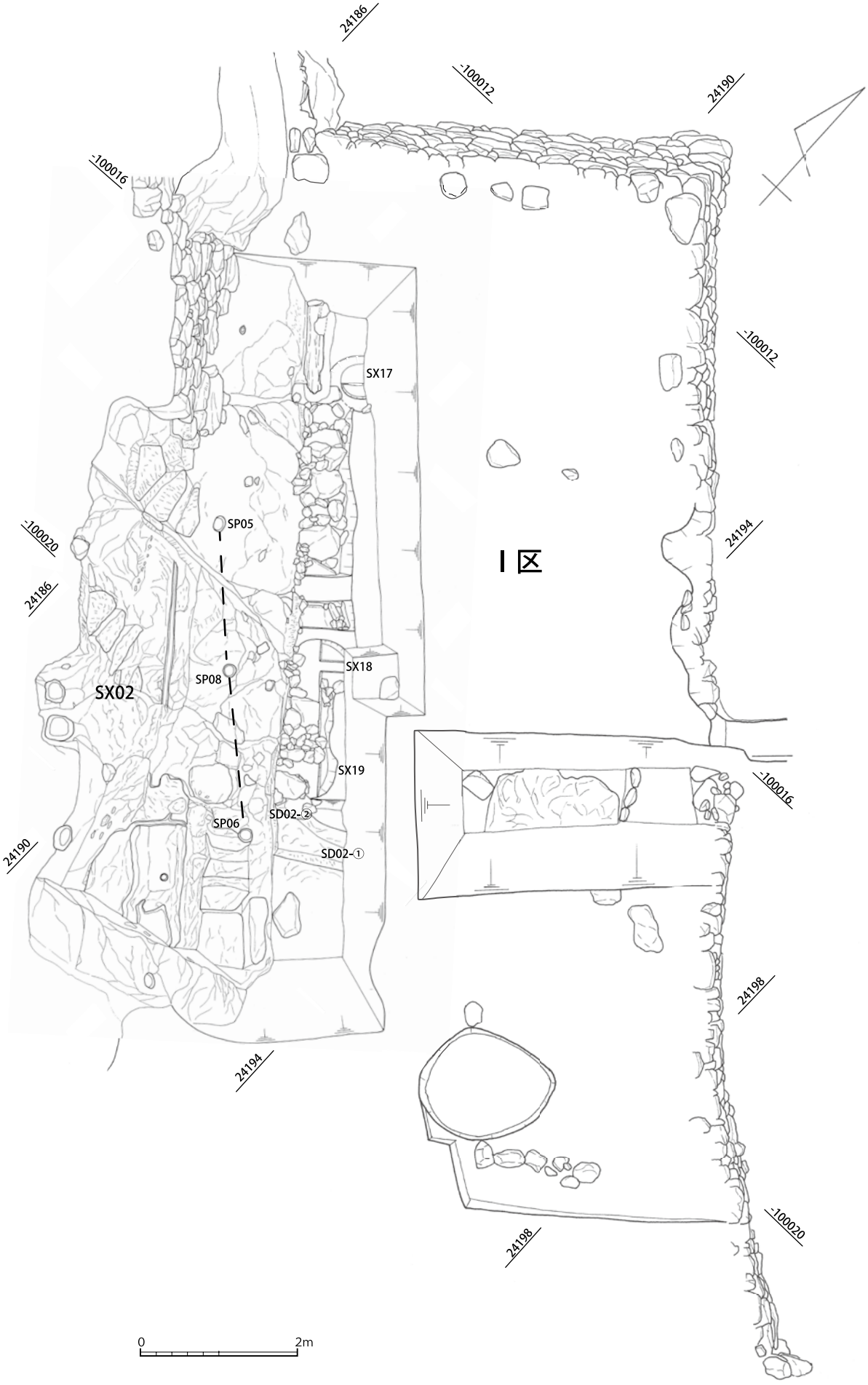


Fig.4　昆布山谷地区第５地点検出遺構配置図（Ｓ＝１／70）

地の大幅な改変があったものと想定される。昨年度の調査では造成土内から18世紀後半の外青磁が出土し、造成の時期を示す資料としていた。本年度の出土遺物にもそれよりも新しいものは含まれていなかったため、18世紀後半以降に造成がなされたとみられる。

第2面は第9層上面である。第9層がトレンチの広い範囲で面的に検出されたことから、その上面が一時は地表面であったことが想定される。ただし、上面は硬化しておらず､明確な遺構も検出されなかったため､積極的な利用はされていなかったようである。

第3遺構面は第17層上面で、第2面から20～30cm下位である。遺構面上の一部には42～44層のようにユリカスとみられる堆積層があるが、第3遺構面が機能していた時期に廃棄されて集積したものと想定される。また、45層や46層などの硬化面が一部にあることから、部分的な張替が何度か行われていたようである。堆積層内からはコンニャク印判による文様が施された磁器碗（Fig. 7 - 14）が出土しており、18世紀前半頃まで利用されていたものと見られる。

第3項　検出遺構（Fig. 4）

第5地点では、昨年度検出されていたＳＸ02の中で調査の及んでいなかった北半部について、加工の内容や範囲が明らかとなったほか、ＳＸ02の最下部で確認されていたＳＤ02-②は全面に礫を蓋石として暗渠状になっていることが確認できた。第3遺構面では、粘土を円形に敷いてその中に炭化物を詰めた炉跡状の遺構が3基検出された（ＳＸ17～19)。また、明確に遺構と判断できる状態ではないが､第2面（Fig. 5、第9層）から建物の礎石の可能性がある礫が1点検出された。

以下では､検出された遺構について個別に記載する。

【ＳＸ02】

ＳＸ02は平成26年度の発掘調査によって検出された、調査区の西側にそびえる岩盤に階段や水溜め状遺構、溝などが掘り込まれた岩盤加工遺構である。平成26年度の調査の際に遺構の南端部に下層確認トレンチを設定して一部を掘り下げた結果、江戸時代の前半期には利用が始まったことが確認されていた。本年度は下層確認トレンチを拡張して調査を実施したことにより、平成26年度には確認できなかった北半部下部の様相が明らかとなった。また、昨年度検出されていたＳＰ05・06の間にＳＰ08があることが確認できた。

ＳＸ02の北半部の下位では、梁を架けるなどの機能が想定される凹み（以下、梁穴とする）がいくつか確認できたが、上位ほど積極的には加工されていなかった。ただし、標高242.5ｍ付近と標高243.0ｍ付近ではそれぞれ4つと3つ以上の梁穴がほぼ等間隔で並んでおり、岩盤に沿って建物が建っていたか屋根が架けられていたことが想定される。標高242.1ｍ付近では梁穴が等間隔で北へ続いていることが昨年度の調査によって確認されていたが、本年度の調査によりＳＸ02の北端部まで続くことが推定できるようになった。この梁穴は、ＳＤ02-②の蓋によって塞がれていることから、ＳＤ02-②が暗渠となる前に機能していたものと想定される。また、平成26年度の調査で加工された時期が問題となっていた階段状遺構①は、243.7ｍ付近以下には続いていなかったことから、第1遺構面に伴うことがほぼ確実となった。ＳＰ08はＳＸ02の標高243.5ｍ付近で検出された柱穴とみられる円形の遺構である。昨年度検出されていたＳＰ05･06のほぼ中間で､ＳＰ05との距離は1.85ｍ､ＳＰ06との距離は2.05ｍである。ＳＰ05・06・08は間隔や標高がそろっていることから、一連の遺構である可能性が高い。

【ＳＤ02-②】

ＳＤ02は平成26年度の調査により、ＳＸ02の最下部で検出された溝状遺構で、岩盤に対して直行する東西方向のものをＳＤ02-①、岩盤に沿って南北方向のものをＳＤ02-②としていた。平成26年度の調査では、ＳＤ02-①は開渠で、ＳＤ02-②は溝の上に礫が蓋石として置かれ、暗渠状となっていることが確認されていた。本年度の調査によって、蓋石はＳＤ02-②の全体に及ぶことが確認された。本年度の調査では蓋石が全体に及ぶことを確認する程度でとどめ、溝内部の様相については来年度調査区を拡張した際に整地層との関連を確認しながら調査することとした。

【ＳＸ17～19】

ＳＸ17～19はＳＤ02が整地などによって埋設されたのちに形成された土坑状の遺構である。ＳＸ

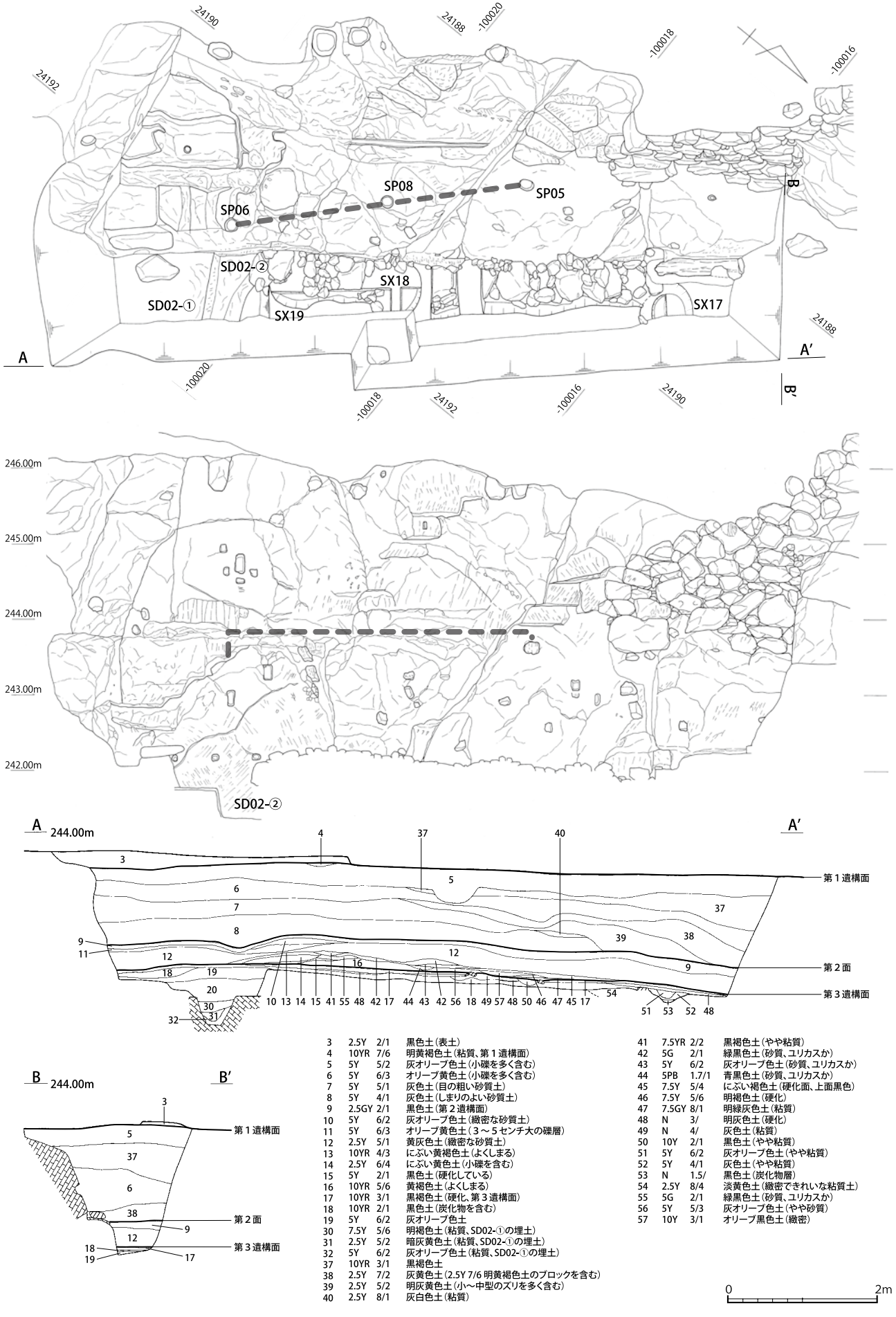
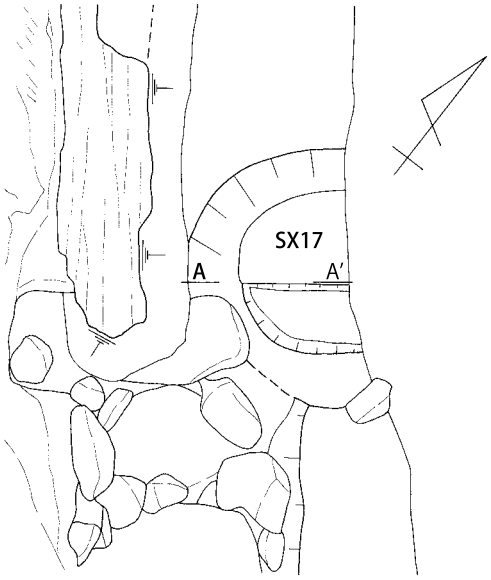
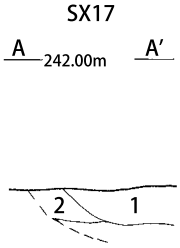


Fig.5　昆布山谷地区第５地点Ⅰ区平面図・立面図・断面図（S＝１／70）

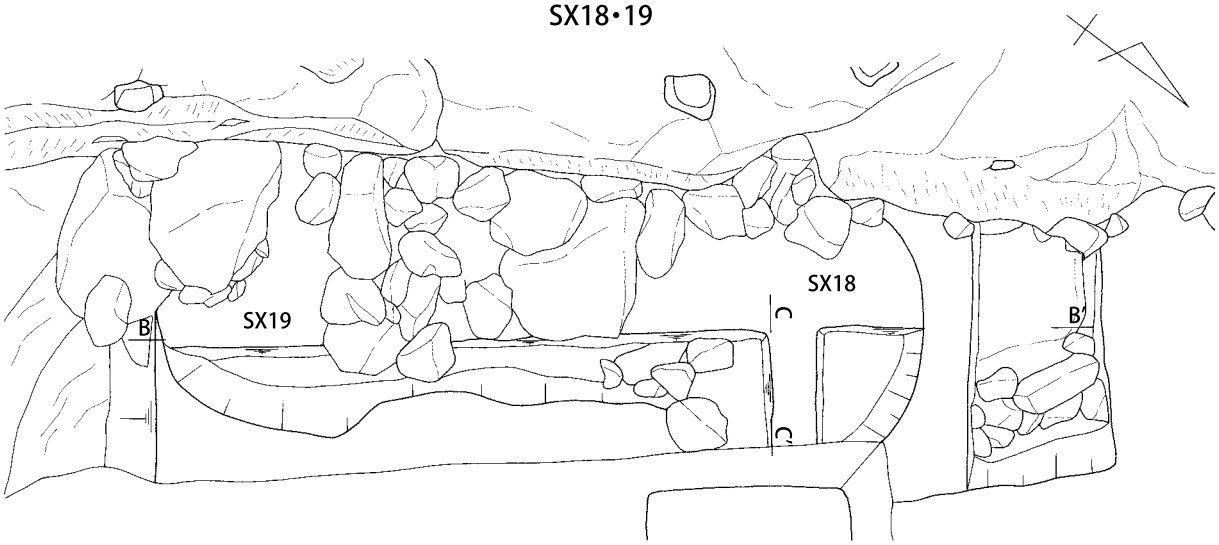


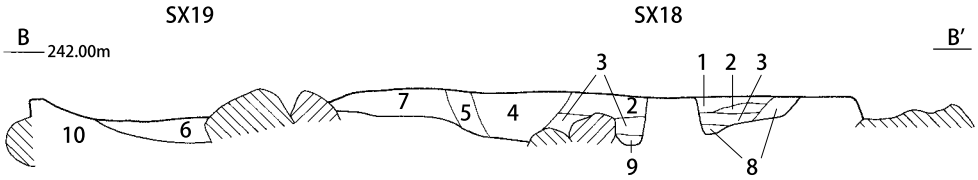
SX17

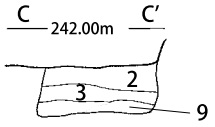


1　7.5Y　2/1　黒色土（7.5Y 4/1 灰色土が混じる、炭化物層）
2　2.5Y　7/6　明黄褐色土（粘性強）

SX18・19







1	N	1.5/	黒色土（炭化物層）
2	5PB	3/1	暗青灰色土（炭化物を多く含み、N 8/白色粒子を含む）
3	2.5Y	3/1	黒褐色土（炭化物を含む）
4	5Y	3/1	オリーブ黒色土（オリーブ黄色土を含み、炭化物を含む）
5	2.5Y	8/3	淡黄色土（粘性強）
6	N	2/	黒色土（炭化物層）
7	5Y	8/3	淡黄色土（砂質と粘質が混じる）
8	2.5Y	8/2	灰白色土（粘性強）
9	5YR	5/6	明赤褐色土（焼土）
10	5Y	7/2	灰白色土（火を受けて変質）

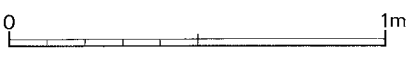


Fig.6　昆布山谷地区第５地点ＳＸ 17・18・19 平面図・断面図（Ｓ＝１／20）

17は下層確認トレンチの北端部で検出された。東半が調査範囲外のため全体は検出していないが、直径約25cm、深さ約10cmの円形の遺構である。厚さ約10cmで碗状の明黄褐色粘質土の中に炭化物を多く含む黒色土が詰まっている。また、遺構の周囲は被熱し、変色していた。

ＳＸ18は下層確認トレンチの南部で検出された。ＳＸ19との境が分かりにくいが、円形とするならば直径約60cm、深さは約10cmである。皿状の灰白色粘土の中に黒色の炭化物層と炭化物の混じる粘質土層が詰まっていた。ＳＸ18の下には被熱痕があり、火を使用した活動に伴う遺構とみられる。炭化物層内からはカラミや炉壁が出土していることは、炉跡の可能性を示している。出土したカラミには銅が酸化した緑錆を吹いているものも含まれていた。

ＳＸ19はＳＤ02-②の南端部で検出された。やはりＳＸ18との境が判然としないが、平面形及び断面形より、直径80cm程度とみられる。被熱による変色が見られる灰白色粘土を皿状に敷き、その中に粘質土と砂質土の混じった淡黄褐色土と炭化物が詰まっていた。また、周囲の炭化物層からはカラミや炉壁が出土した。検出状況や周囲で出土した遺物から、炉跡の可能性がある。

ＳＸ17～19は先述したように、ＳＤ02-②が整地によって埋設された後に形成された遺構で、ＳＤ02-②の蓋石の直上に位置する。ＳＸ17～19の機能については、粘土を敷いてその中に炭化物を詰めるといった検出状況や、埋土やその周囲からカラミや炉壁が出土したことから製錬炉の可能性が高いが、今年度は評価を保留しておき、来年度の課題としたい。ＳＸ17～19はいずれもＳＤ02-②蓋石の上に構築されていることから、火を扱う際に溝による防湿効果を狙って構築された可能性も考えられる。

第４項　出土遺物（Fig. 7・8、Tab. 2）

【陶磁器類】

１はＳＤ02上の整地層から出土した肥前陶器の呉器手碗である。外面の広い範囲が被熱し、断面にはススが付着している。器形より17世紀後半に比定できる。

２は第３遺構面の堆積層から出土した、内外に灰釉が施された肥前陶器の碗である。器形より、17世紀後半頃に比定できる。

３～13は第１遺構面と第２面に挟まれた造成土内から出土した。４・８は肥前陶器である。４は皿で、内外に灰釉が施されているが、底部は露胎し、三日月高台を持つ。８は内外に灰釉が施され、内面見込み部に砂目があり、外面底部に重ね焼きした際の砂が付着している。９は瀬戸・美濃で、内外に褐釉が施されているが、全体に被熱して色味が変わっている。底部付近は露胎している。７は小型の香炉である。外面体部と頸部に灰釉が、口縁部に銅緑釉が施されているが、内面には釉がかかっていない。肥前陶器の可能性がある。頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外側へ水平に開く。13は関西系陶器の碗である。胴部が外側にやや張る器形で、内外に透明釉が施されている。４・８は17世紀初頭に、９は17世紀から18世紀に、７・13は18世紀後半にそれぞれに比定できる。３・６は肥前磁器である。３は内外に青磁釉が施され、外面底部には蛇の目釉剥ぎがみられる。高台と体部の繋ぎ目付近が竹節状になっている。器形が筒状のため、火入れとみられる。６は碗である。残存部分のみではあるが、圏線が口縁部外面に１条、口縁部内面に２条、体部内面下部に２条ある。体部外面の中央部には算木文があり、体部下部にも文様があるが欠損により判別できない。３は17世紀後半、６は18世紀後半に比定できる。５は白磁である。口縁部が外側に反る器形で、端反碗Ｅ-１類に相当する。10は関西系陶器の碗で、内外に暗橙褐色の灰釉が施されている。12は在地系陶器の皿で、内面に橙褐色の長石釉が施され、外面は口縁部付近を除いて露胎している。11は備前の壺・甕である。

14は第２面の整地土層内（Fig. 5、９層）から出土した、肥前磁器の碗である。器形は高台から上方にほぼまっすぐ伸びている。内外に透明釉が施されているが、高台の畳付けは釉剥ぎされ、重ね焼きをした際の砂が付着している。外面には高台と体部のつなぎ目の内外に１本ずつ、体部最下部に１本圏線が引かれ、体部中央にコンニャク印版による鶴と松が交互に配されている。また、高台内にも文様が見られる。時期は18世紀前半に比定できる。

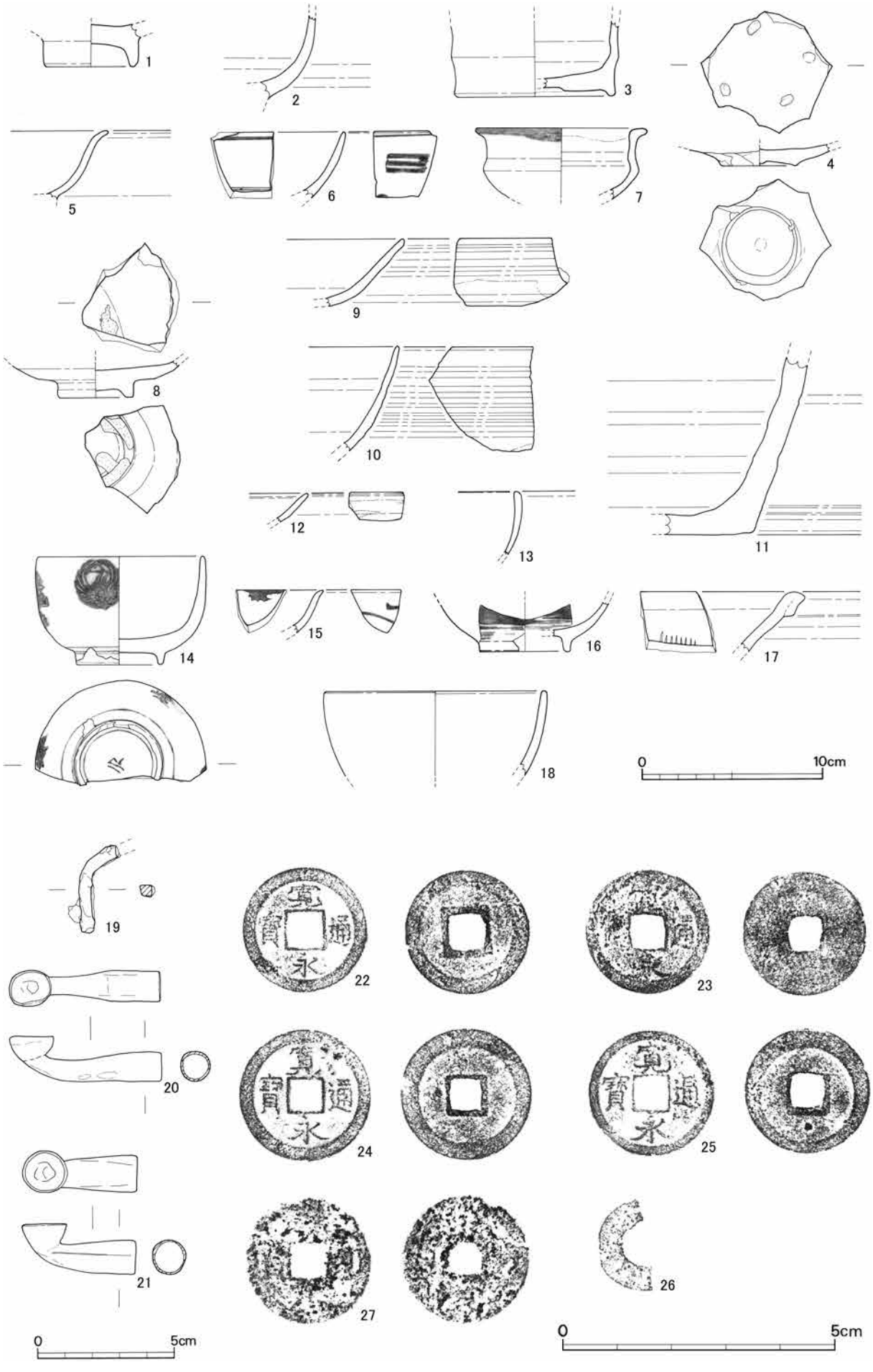


Fig.7　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅰ（Ｓ＝１／１、１／２、１／３）

Tab.2　昆布山谷地区第５地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ（cm）			色　調	成形・調整・文様	備 考
				口径	器高	底径			
1	ＳＤ 02	肥前陶器	碗		(2.4)	5.0	長石釉		
2	Ｉａ区　第３面直上 Ｉａ区　第５面直上	肥前陶器	碗		(4.6)		灰釉		
3	Ｉａ区　５層	肥前磁器	火入れ？		(4.2)	(8.5)	青磁釉	蛇の目凹形高台	有田
4	Ｉａ区　６層	肥前陶器	皿		(1.2)	4.2	灰釉	胎土目	
5	Ｉａ区　６層	白磁	碗		(3.8)		透明釉		
6	Ｉａ区　６層～ 37 層	肥前磁器	碗		(3.7)		透明釉		
7	Ｉａ区　６層～ 37 層	肥前陶器？	香炉	(9.3)	(3.9)		銅緑釉 灰釉		
8	Ｉａ区　６層～ 37 層	肥前陶器	皿		(2.0)	(4.2)	灰釉	砂目	
9	Ｉａ区　37 層～７層．８層	瀬戸・美濃	皿		(3.8)		褐釉		
10	Ｉａ区　37 層～７層．８層	関西系陶器？	碗		(5.8)		灰釉		
11	Ｉａ区　37 層	備前	壺・甕		(9.8)		赤褐色		
12	Ｉａ区　37 層～７層．８層	在地系陶器	皿		(1.6)		長石釉		
13	Ｉａ区　37 層～７層．８層	関西系陶器	碗		(3.5)		透明釉		
14	Ｉａ区Ｉｃ区間畦　９層	肥前磁器	碗	(8.5)	6.0	4.6	透明釉	コンニャク印判	
15	Ｉａ区　18 層	肥前磁器	皿		(2.4)		透明釉		有田かも
16	Ｉａ区　18 層	肥前陶器	碗		(2.7)	(5.0)	白濁釉 透明釉		
17	Ｉａ区　18 層	須佐	すり鉢		(3.4)		サビ釉		
18	Ｉａ区　19 層	肥前陶器	碗	(12.2)	(4.7)		灰釉		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ（cm）			重量（g）	色　調	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
19	９層上面	金属製品	釘	3.3	0.4	0.4	2.2		
20	Ｉａ区　６層～ 37 層	銅製品	キセル（雁首）	5.6	1.4	1.7	9.8		
21	Ｉａ区　11 層	銅製品	キセル（雁首）	4.2	1.6	1.9	9.9		
22	Ｉａ区Ｉｃ区間畦第２面直上	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.2		
23	Ｉａ区Ｉｃ区間畦第２面直上	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.0		
24	Ｉａ区　第５面直上	銭貨	寛永通寶	2.5	2.5		3.2		
25	Ｉａ区　６層	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.4		
26	Ｉａ区　６層	銭貨	無文銭	1.7	1.0		0.4		
27	Ｉａ区　37 層～７層．８層	銭貨	不明	2.4	2.4		2.7		
28	Ｉａ区　表土	石製品	かなめ石	38.2	35.9	14.3	26.6 kg	灰色	安山岩

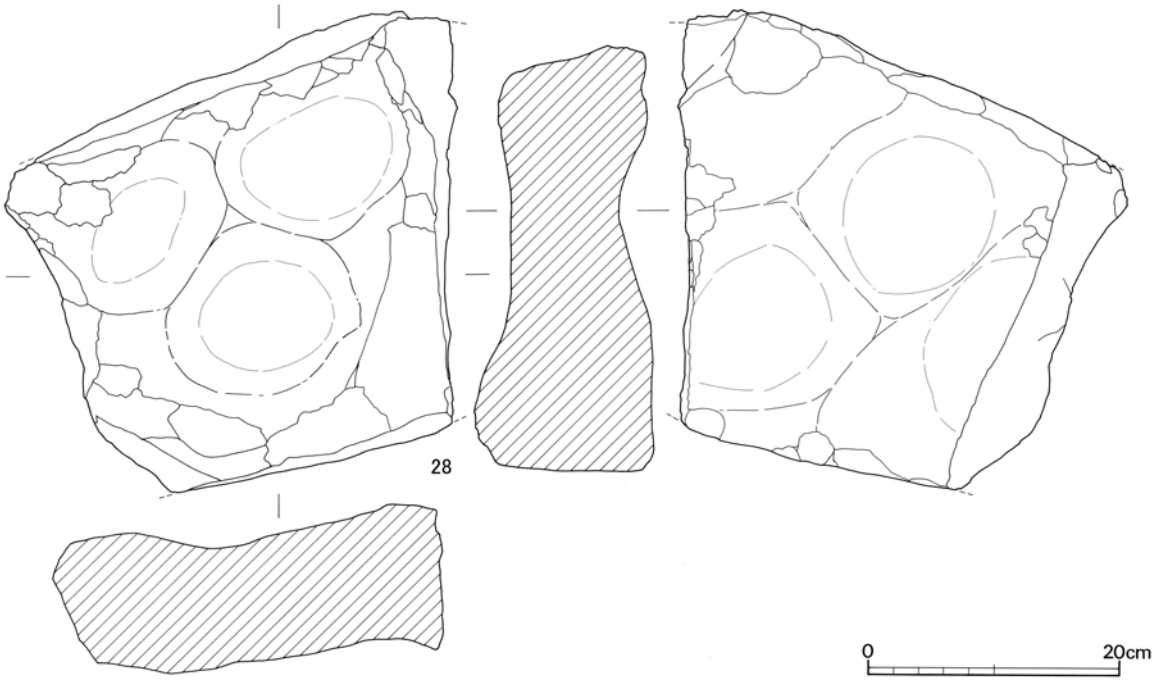


Fig.8　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅱ（Ｓ＝１／６）

15 ～ 18 は第３遺構面よりも下位で出土した。15 は肥前磁器の皿である。外面には唐草文様が施され、内面口縁部にも染付の文様がある。16・18 は肥前陶器の碗である。16 は内外に透明釉または白濁釉が施され、畳付けは釉剥ぎされている。断面に付着物がある。18 は内外に灰釉が施されている。器形は体部がほぼ垂直に立ちあがる。15・16・18 は 17 世紀後半から 18 世紀初頭に比定できる。17 は須佐の擂鉢で、口縁部は折り返されて外面中央に窪みを持つ。すり目は残存部では８本で１つの単位となっている。

【石製品】

28 は安山岩製のかなめ石である。両面にそれぞれ３つと４つの凹みがあるが、凹みの内のいくつかは途中で割られており、本来はもっと大きかったものを分割したとみられる。縁辺部に調整剥離があることから、分割後も形を整えて使用していたことが窺える。

【金属製品】

金属製品としては鉄釘と煙管の雁首、古銭が出土した。19 は鉄釘で、断面四角形の和釘である。20・21 は銅製煙管の雁首で、いずれも 19 世紀初め頃のものとみられる。22 ～ 25 は寛永通宝で、いずれも新寛永である。25 には裏面に星が１つ付けられている。26 は無文銭である。27 は強く錆びているため判断が難しいが、22 ～ 25 に比べてやや軽く、中央の穴も丸くなっていることから模鋳銭の可能性がある。表面下部に「元」の部首がわずかに確認できることから、開元通宝の可能性がある。

第４節　第６・７地点

第１項　調査の概要

第６・７地点は本年度新たに設定した調査地点で、現地表面上で岩盤加工遺構の所在が確認されていた地点である。本年度は遺構の残存状況を確認するために測量調査を行なった。その後、岩盤加工遺構に被っていた流土を一部どけて表面の様相が見える状態にしたが、本年度は地表面上における遺構の状態を確認する程度にとどめ、トレンチなどによる本格的な発掘調査は来年度に実施することとした。

第２項　検出遺構（Fig.10・11）

第６・７地点のそれぞれで岩盤加工遺構（ＳＸ 20・21・22）と平坦面が検出された。また、第６・７地点のちょうど中間のあたりで岩窟状遺構（ＳＸ 23）が検出された。

【ＳＸ 20】

ＳＸ 20 は第６地点で検出された岩盤加工遺構である。山道に沿った岩盤の南北約 10 ｍ、高さ３ｍの範囲が加工されている。現状では岩盤は道から西方へ三角形に窪んでおり、岩盤と道の間にはテラス状の広い

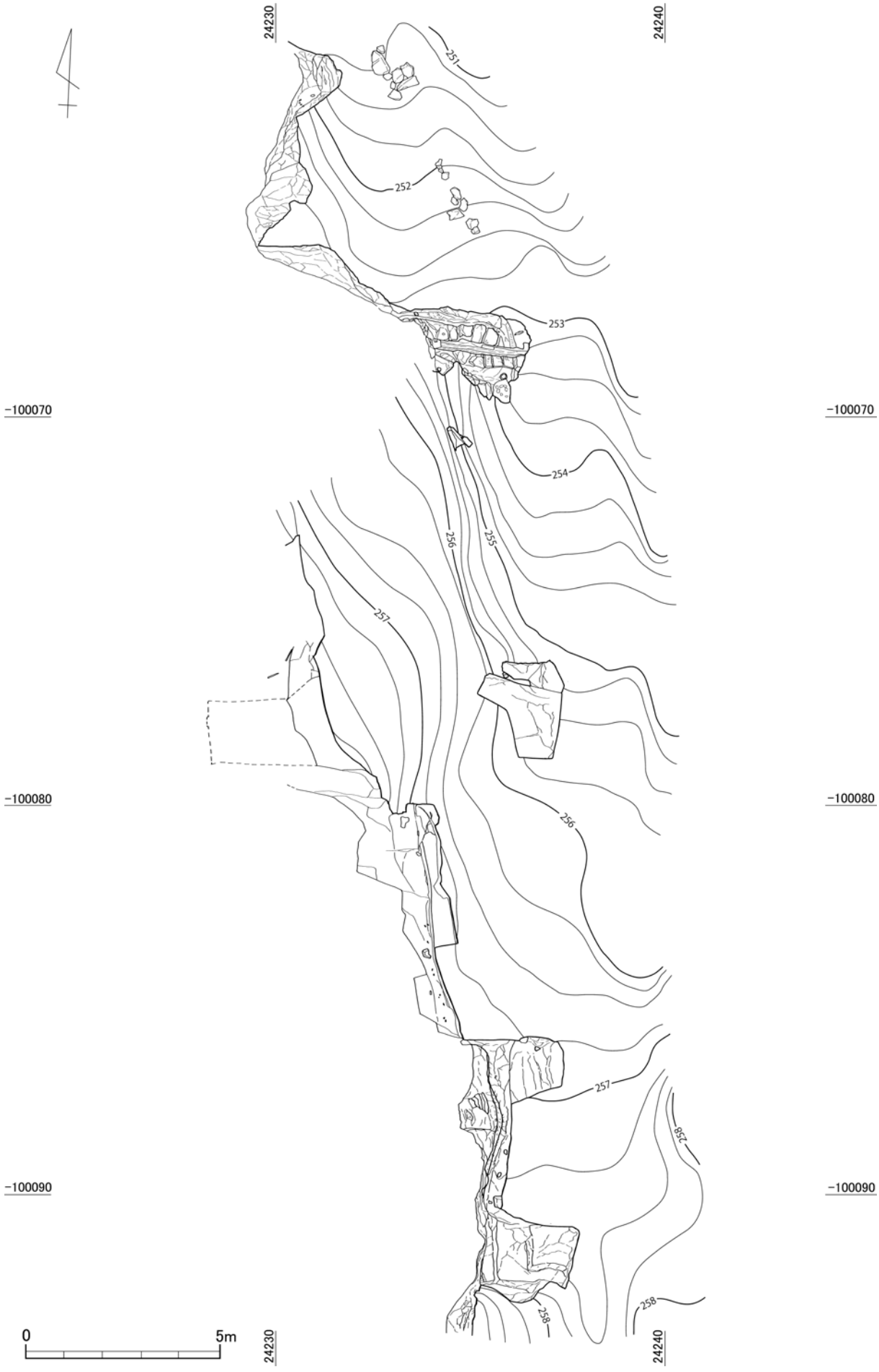


Fig.9　昆布山谷地区第６・７地点平面図（S＝１／140）

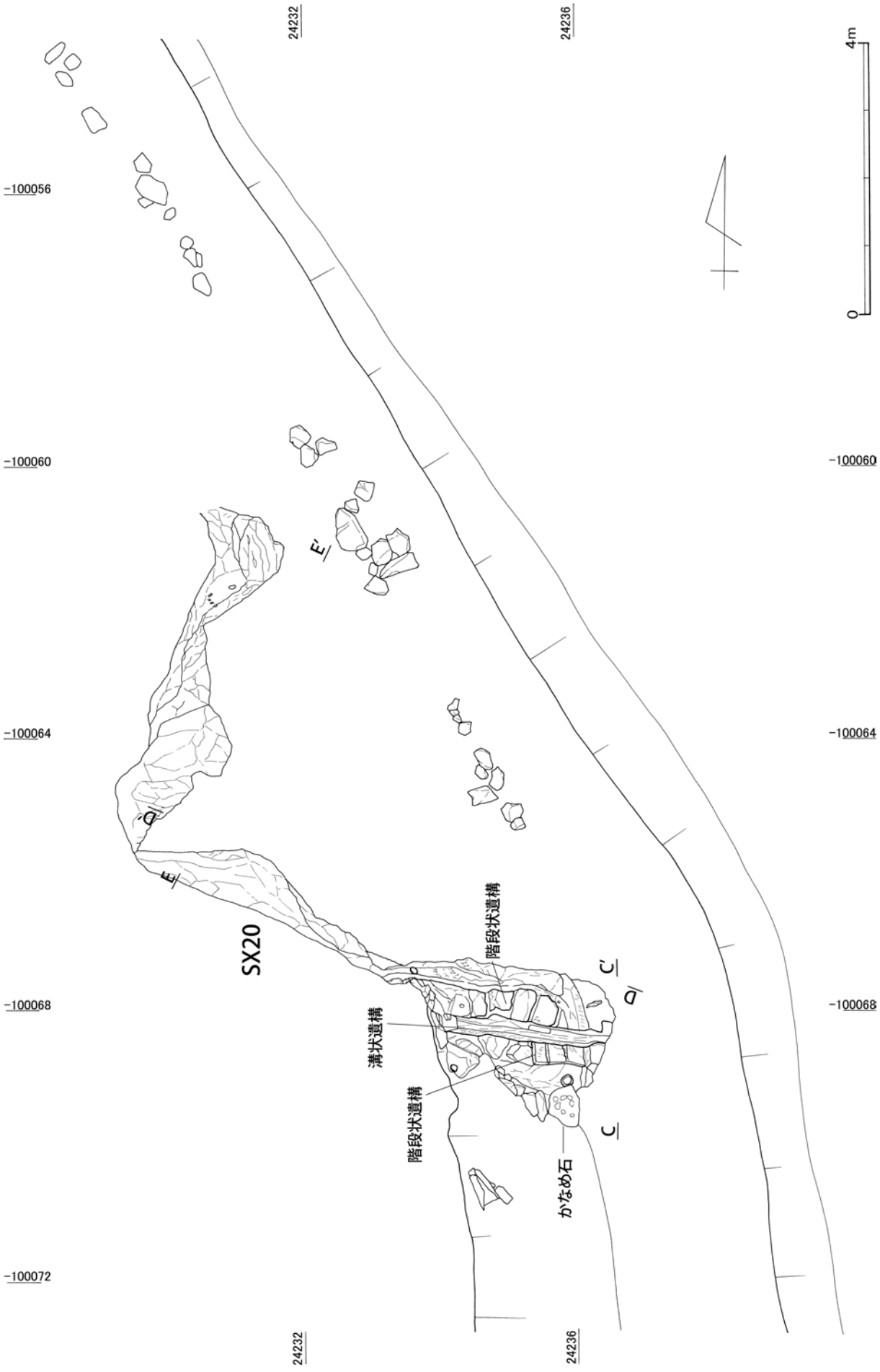


Fig.10　昆布山谷地区第６地点平面図（Ｓ＝１／80）

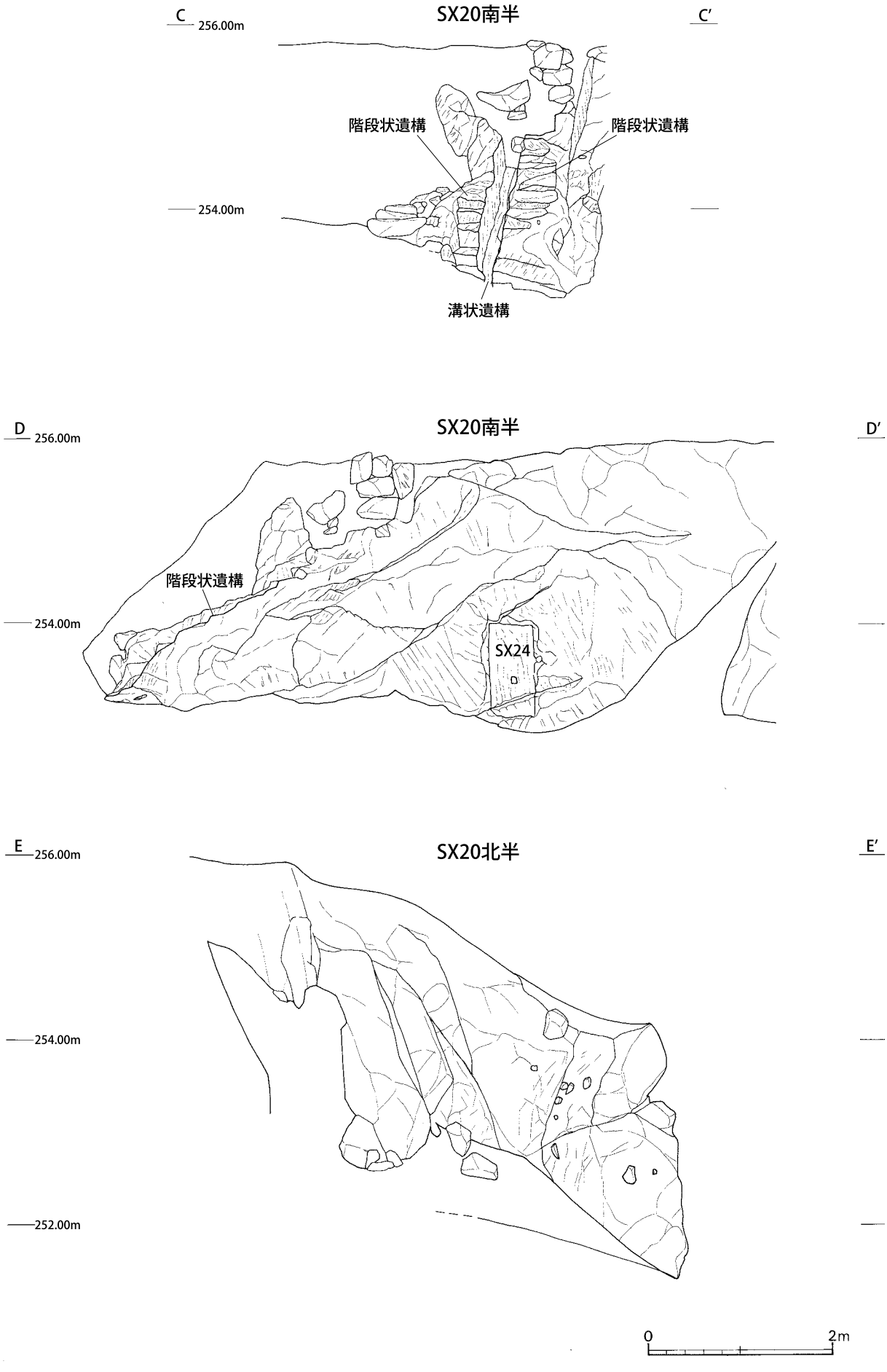


Fig.11　昆布山谷地区第６地点立面図（Ｓ＝１／60）

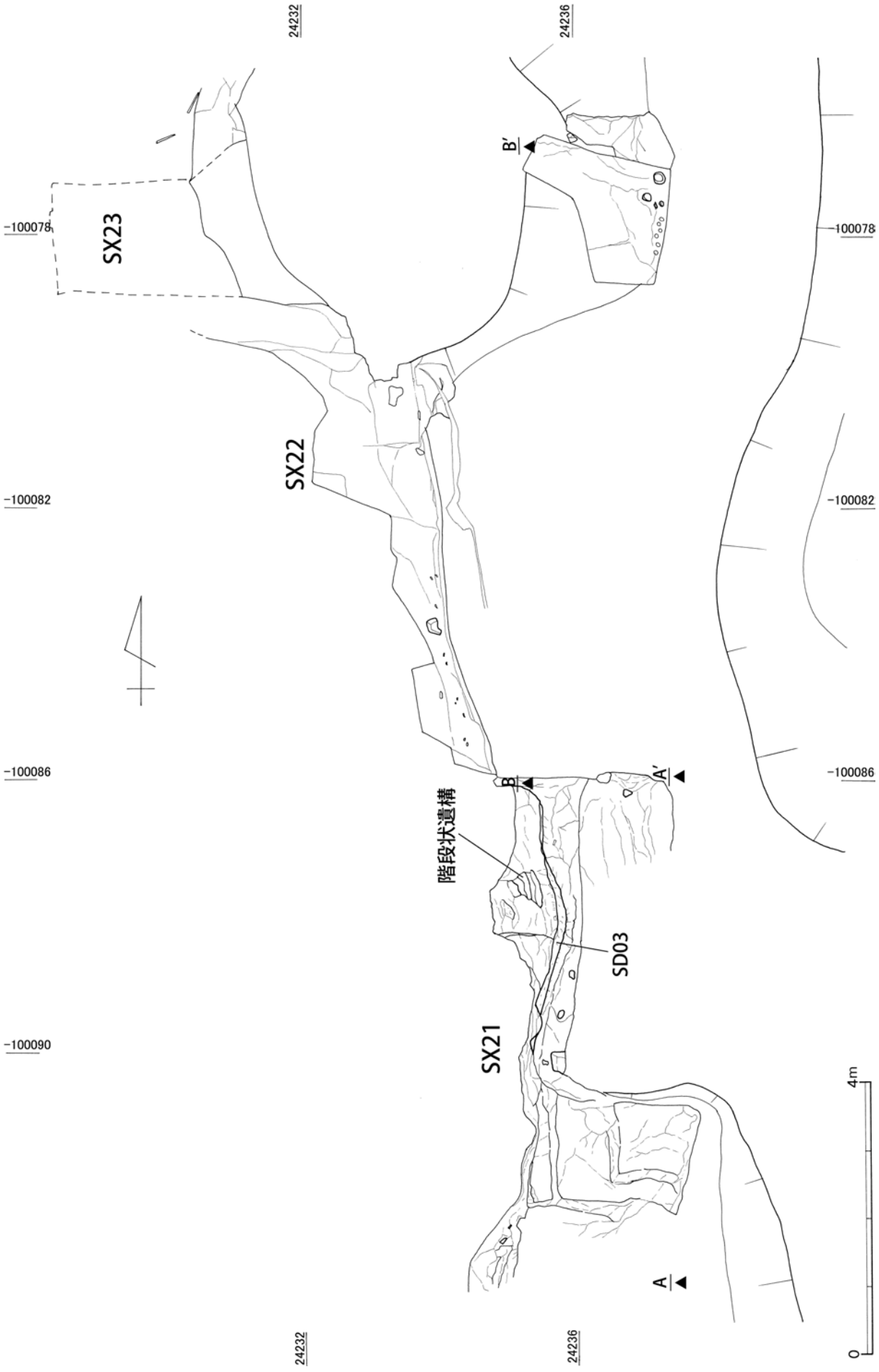


Fig.12　昆布山谷地区第７地点平面図（Ｓ＝１／80）

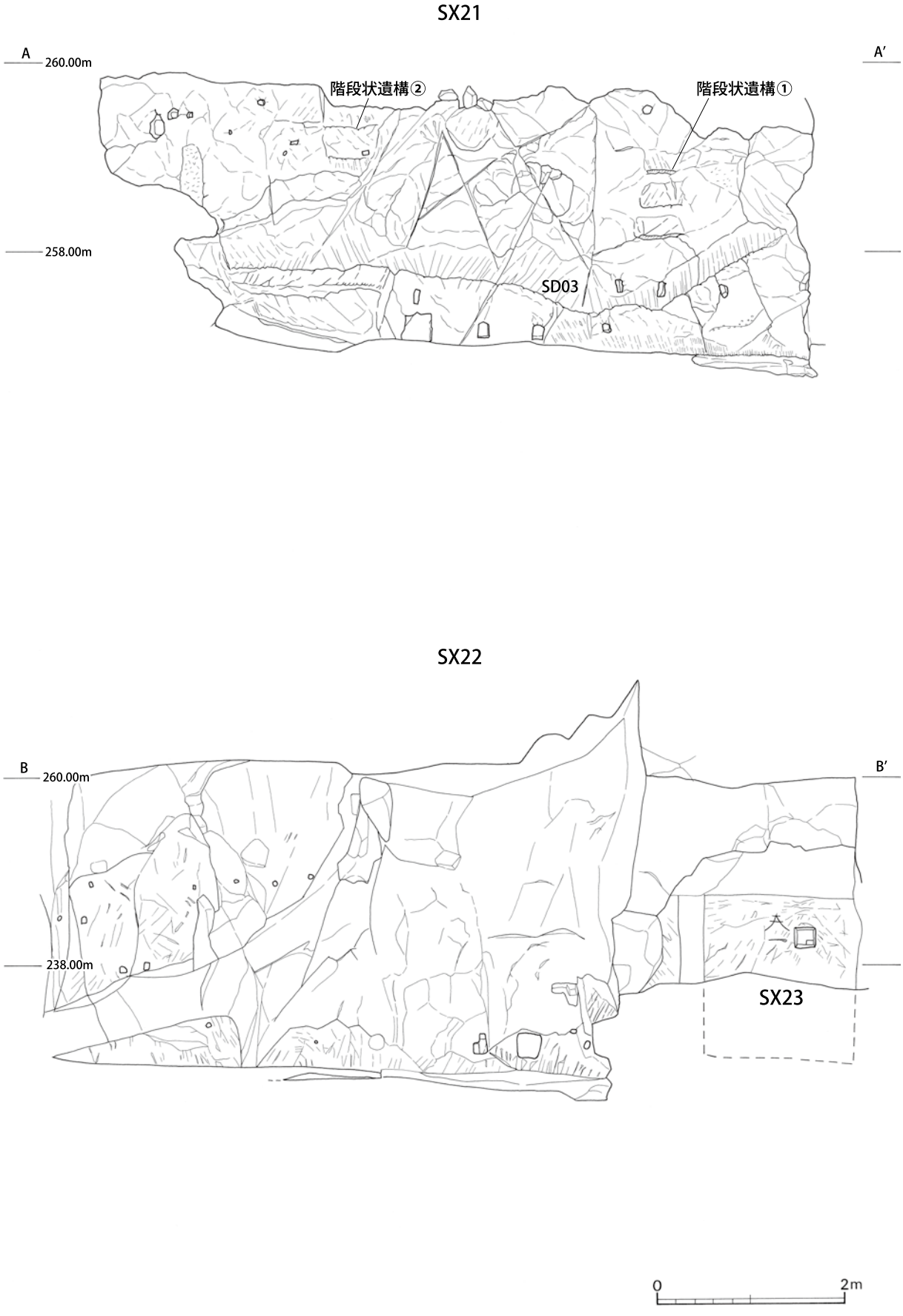


Fig.13　昆布山谷地区第７地点立面図（S＝１／60）

空間がある。掘り込まれた遺構としては南端部の階段状遺構と、南部のＳＸ 24 以外には梁穴がいくつか確認できる程度で、ＳＸ 02 や後述するＳＸ 21 に比べると少ない。

①階段状遺構

階段状遺構はＳＸ 20 の南端部で検出された。山道と岩盤の上の平坦面との連絡のための階段とみられる。階段の中央部には幅約 30cm、深さ約 30cm の溝が掘られている。溝の機能としてはＳＸ 20 上の平坦面から雨水などを下に流すためなどが考えられる。段数は溝の南側で６段、北側で８段が確認できた。ただし、東側の地表下と西側の上方斜面に未調査部を多く残すため、もう何段か延びる可能性がある。現状では１段目が標高 253.2 m、最高点が標高 254.8 mである。１段当たりの高さは 10cm 程度と低いが、南北とも１段目は約 20cm と高くなっている。１段ごとの幅は北側が 40 ～ 50cm、南側が 25 ～ 30cm で、奥行は北側が 30cm 程度で南側が 15 ～ 20cm である。北側の１段目は非常に小さく、幅 28cm、奥行き 18cm で、平面形は三角形である。最上部には石垣が積んである。本遺構の隣接地からかなめ石が出土した。

②ＳＸ 24

ＳＸ 20 の南半部の標高 253.0 m～ 254.0 mの範囲に加工された遺構である。縦 100cm、横 48cm の長方形で、奥行きは約 10cm である。中央やや下に約６cm 四方の小さい凹みをもつ。浅く岩窟状に掘り窪めたのみで装飾等はなく、機能は不明である。

【ＳＸ 21】

ＳＸ 21 は第７地点南半で検出された岩盤加工遺構である。加工の範囲は道沿いの東西約 7.5 m、高さ約３mで、本年度の調査で検出された範囲における最低点の標高は 256.7 m、最高点の標高は 259.9 mである。掘り込まれた遺構としては溝状遺構（ＳＤ 03）、梁穴、階段状遺構などがある。梁穴は標高 257.2 m付近に１辺５cm 程度のものが約 50cm 間隔で４つと、標高 257.6 m付近に１辺約５cm 程度のものが約 40 ～ 60cm 間隔で３つ並んでいる。標高 259 mより上にもいくつかあるが、上記の２か所のように列をなしておらず、不規則に設けられている。

①ＳＤ 03

ＳＤ 03 は標高 257.3 mから 258.3 mに掘り込まれた溝状遺構である。全長は南北６mで、溝の幅は約 20cm だが、北端部はＳＸ 22 を加工した際に壊されており、本来はもう少し長かったものと想定される。南端部から３～ 4.6 mの範囲がやや低くなっており、ここに水を引き込むようになっていたようである。ＳＤ 03 の下には引き込んだ水を溜めるための施設の存在が想定されるが、本年度の調査では確認できなかった。流土や埋土によって地下に埋もれていると想定されるため、来年度の調査によって所在の有無を確認したい。

②階段状遺構

階段状遺構は２つあり、北端部から 1.3 m程度南に階段状加工①が、北端部から 4.6 m程度南に階段状加工②が所在する。階段状加工①は段数が３段で、１段目が標高 258.1 m、３段目が標高 258.9 m、１段当たりの高さは約 30cm である。１段ごとの幅は 40 ～ 50cm で、奥行は 10cm 程度と非常に狭い。階段状加工②は段数が２段で、１段目が標高 259.0 m、２段目が標高 259.55 mである。一段ごとの高さは１段目が約 30cm、２段目が約 25cm である。幅は 50 ～ 60cm で、奥行は 10cm 程度と非常に狭い。階段状遺構①・②はいずれもＳＸ 21 の上に位置する平坦面との連絡のための階段とみられるが、残存状況では１段あたりの幅が非常に狭くなり、実用性は疑問である。

【ＳＸ 22】

ＳＸ 22 は第７地点北半で検出された岩盤加工遺構である。加工の範囲は東西約 9.7 m、高さ約 4.4 mで、本年度の調査で検出された範囲における最低点の標高は 256.6 m、最高点の標高は 261.0 mである。ＳＸ 21 との境が積極的に加工されており、ＳＸ 21 の一部を切り込んでいる。梁穴が標高 258.9 m付近に６つ、標高 258.5 m付近に２つ、標高 258.0 m付近に２つ掘り込まれている。左右だけでなく上下の間隔もそろっていることや、梁穴の周辺には加工による鑿痕が多く残っていることも注目される。また、ＳＸ 22 の東側には岩盤を削って平坦にし、一部に柱穴のある遺構が検出された。

【ＳＸ 23】

ＳＸ 23 は、ＳＸ 20 とＳＸ 21 の境で検出された、

幅 1.6 m、高さ 1.7 m、奥行約２mの岩窟状の遺構で、天井や側壁は鑿で丁寧に整えられてまっすぐになっている。入口付近には発破鑿の痕跡があり、爆破により崩されている。奥壁には中央やや上に文字か記号が縦に二つ刻まれており、その右側には一辺が約 20cm の正方形の掘り込みがある。

第３項　採集遺物（Fig.14、Tab. 3）

測量調査の過程で表採されたものについて報告する。

29・30 はいずれも第７地点付近で表採された。29 は肥前陶器の碗で、内外に灰釉が施されているが、底部は露胎するとみられる。器形は体部がほぼ垂直に立ちあがり、口縁部付近でやや外反する。外面体部に鉄絵による文様が描かれている。16 世紀末から 17 世紀初頭に比定できる。30 は肥前磁器の段重である。外面体部には型紙摺りによる格子と花の文様と不定型な文様が描かれている。型紙摺りを用いることやコバルトの発色から近代の資料とみられる。

第５節　小結

本年度は、第５地点と第６・７地点の発掘調査を実施した。調査成果としては、①岩盤加工遺構ＳＸ 02 の未調査範囲の大部分に調査が及び、加工の内容や時期などを明らかとするための資料が得られたこと、②ＳＸ 02 の最下部に位置する溝状遺構ＳＤ 02-②について、北端部を除く広い範囲が検出されたこと、③ＳＤ 02-②が整地などによって埋設された後、その直上から火を使用した遺構が検出されたこと、④第５地点第Ⅰ区の平坦面について、整地や造成などの土地の形成に関わる情報が得られたこと、⑤第６・７地点において新たに岩盤加工遺構（ＳＸ 20 ～ 23）が検出されたことなどが挙げられる。

ＳＸ 02 は昨年度の調査では地表面に露出していた部分と、遺構の南端部に設定した下層確認トレンチによって、加工内容の一部や利用開始時期が明らかとなっていた。今年度の調査では下層確認トレンチを拡張したことによってＳＸ 02 の大部分が検出された。昨年度調査を行なったＳＸ 02 南端部分では現地表面の下まで階段状遺構が続くなど、大きく加工されていたが、本年度調査を行なった北半部では梁穴がいくつか検出された程度で、大きな加工は見られなかった。昨年度の調査で検出されていた階段状遺構①について、本年度の調査によって第１遺構面以下には続かないことが確認できた。そのため、階段状遺構①は第５地点第Ⅰ区が完全に造成されたのちに加工された遺構であることが確実となった。これらの成果から、ＳＤ 02 や階段状遺構③などは岩盤の利用が始まった 17 世紀前半まで遡ることや、階段状遺構①は第Ⅰ区が造成されて現在の地形が形成された 18 世紀後半以降に加工されるなど、ＳＸ 02 の中でも部分によって加工された時期が異なることが明らかとなった。

ＳＸ 02 の最下部で溝状遺構ＳＤ 02-②の大部分が検出され、全体が暗渠状になっていることが明らかとなった。また、ＳＤ 02-②が整地などによって埋設された後にも、火を使用した遺構（ＳＸ 17 ～ 19）が設けられていることが明らかとなった。

第６・７地点においては測量調査の過程でＳＸ 20 ～ 23 が検出された。本格的な発掘調査は平成 28 年度に実施することとしたが、今年度の調査によって確認できた岩盤加工遺構やその周囲の平坦面の様相から、多くの調査成果が得られることが見込まれる。特に第６地点と第７地点の中間に位置するＳＸ 23 は非常に丁寧に成形された岩窟で、奥壁に何らかの彫り込みがあるなど、信仰に関わる遺構の可能性がある。

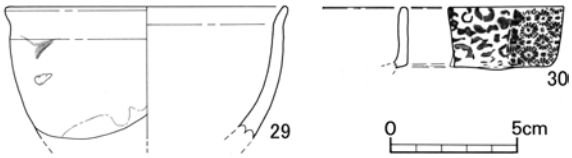


Fig.14　昆布山谷地区第6･7地点採集遺物実測図（S＝1／3）

Tab.3　昆布山谷地区第６・７地点採集遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ（cm）			色　調	成形・調整・文様	備 考
				口径	器高	底径			
29	表採	肥前陶器	碗	(11.0)	(5.2)		灰釉	鉄絵	
30	表土	肥前磁器	段重		(2.5)		透明釉		化粧用

第３章　宗岡家地点の調査

第１節　調査の概要

第１項　調査地の周辺環境

宗岡家地点は大森の町並みでも南方に当たる駒の足地区にあって、表通りに東面する。宗岡家は江戸初期の銀山役人を代表する一人である宗岡弥右衛門を初代として、代々組頭を務めた家系であるが、６代目の宗岡喜三兵衛が寛政２（1790）年に銀山附役人を罷免されて大森を離れている。現在の宗岡家住宅は、宗岡家の８代目宗岡長蔵が文政６（1823）年に同心として再雇用されて川本村（現在の邑智郡川本町）から大森に戻ってきた頃に、阿部半蔵より購入して居住していた住居である。嘉永３（1850）年頃に作成された可能性がある家相図が残っており、この頃に改修が行われて現在の姿になったと想定される。宗岡家住宅には近年まで子孫の方が居住されていたが、平成 16（2004）年に大田市に寄付されている。主屋が道路より控えた位置に建てられるという、大森の武家屋敷の典型的な構造をしており、建物自体も古相をよく残していることから、大田市の指定文化財となっている。平成 18（2006）年に道路に面した空地の発掘調査を実施し、庭の施設とみられる遺構が検出されたほか、下層では 17 世紀初頭の遺物包含層及び遺構が確認された。また、平成 26（2014）年度からは、宗岡家住宅の活用を目的とした保存修理事業にあたって、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的とした発掘調査を実施しており、平成 27（2015）年度はその２年目にあたる。平成 26 年度の発掘調査では、家相図に記載があるものの現在は残っていない建物の基礎（ＳＢ 01）や、露地や石列などの庭に関連する施設の跡、宗岡家が建てられる前に利用されていた水溜状の遺構（ＳＸ 03）が検出された。ＳＸ 03 は遺構内の土壌の科学分析によって、便槽やゴミ穴として利用されていた可能性が提示されている。また、調査区内に設定した下層確認トレンチにより、宗岡家を建てる際に造成が行われ、それ以前は川の自然堆積によって地形が形成されていたことが確認された。

第２項　平成 27 年度の発掘調査の概要（Fig.15・16）

平成 27（2015）年度は主屋と離れに面した敷地南側の庭（第Ⅴ区）を対象として発掘調査を実施した。発掘調査に当たっては第Ⅴ区をａ～ｄ区の４区画に細分した。第Ⅴ区は主屋と離れのいずれにも面した庭であるため、何らかの庭関連施設遺構の検出が期待されたが、第Ⅴａ区南西部で築山状の高まりが確認できた他は樹木痕がいくつか検出されたのみであった。また、北端部の主屋と接する部分では主屋の基礎を据える前に据え付け穴を掘り、基礎の周囲を埋めて固めていることが確認された。第Ⅴａ区北半部に下層確認トレンチを設定して調査をしたところ、複数の硬化面が検出され、江戸時代を通じて何度かの整地や造成が行われていたことが確認された。また、現在の地表面より約１ｍ下では川原石を２段積み上げた石垣状の遺構（ＳＷ 02）が検出された。ＳＷ 02 は検出された堆積層より出土した遺物から、江戸時代初期頃の遺構とみられる。機能としては敷地の区割などが想定され、現状とは多少のずれがあるものの短冊形の地割が江戸時代初期頃から踏襲されていた可能性も認められる。

第２節　調査の成果

第１項　調査の概要（Fig.17・18）

第Ⅴ区は敷地内南側の、主屋と離れに面した東西約９ｍ、南北約６ｍの庭で、広さは約 54 ㎡である。一間を主屋と同じ六尺五寸（1.97 ｍ）とすると、東西４間半、南北３間となる。宗岡家住宅に関連する遺構としては雨落ち溝とみられるＳＤ 01 が検出されたのみで、庭に関連する遺構は検出されなかった。しかし、サブトレンチ①で主屋基礎の据え付け状態が確認できたほか、下層確認トレンチでは地表面の張替や整地に伴う硬化面が複数検出された。また、江戸時代初期頃の土地区割に関わる可能性のある石積み遺構（ＳＷ 02）が検出された。

第２項　土層（Fig.19・20）

土層の堆積状態及び下層における遺構の様相を明らかとするために第Ⅴａ区北壁沿いに東西 3.5 ｍ、南

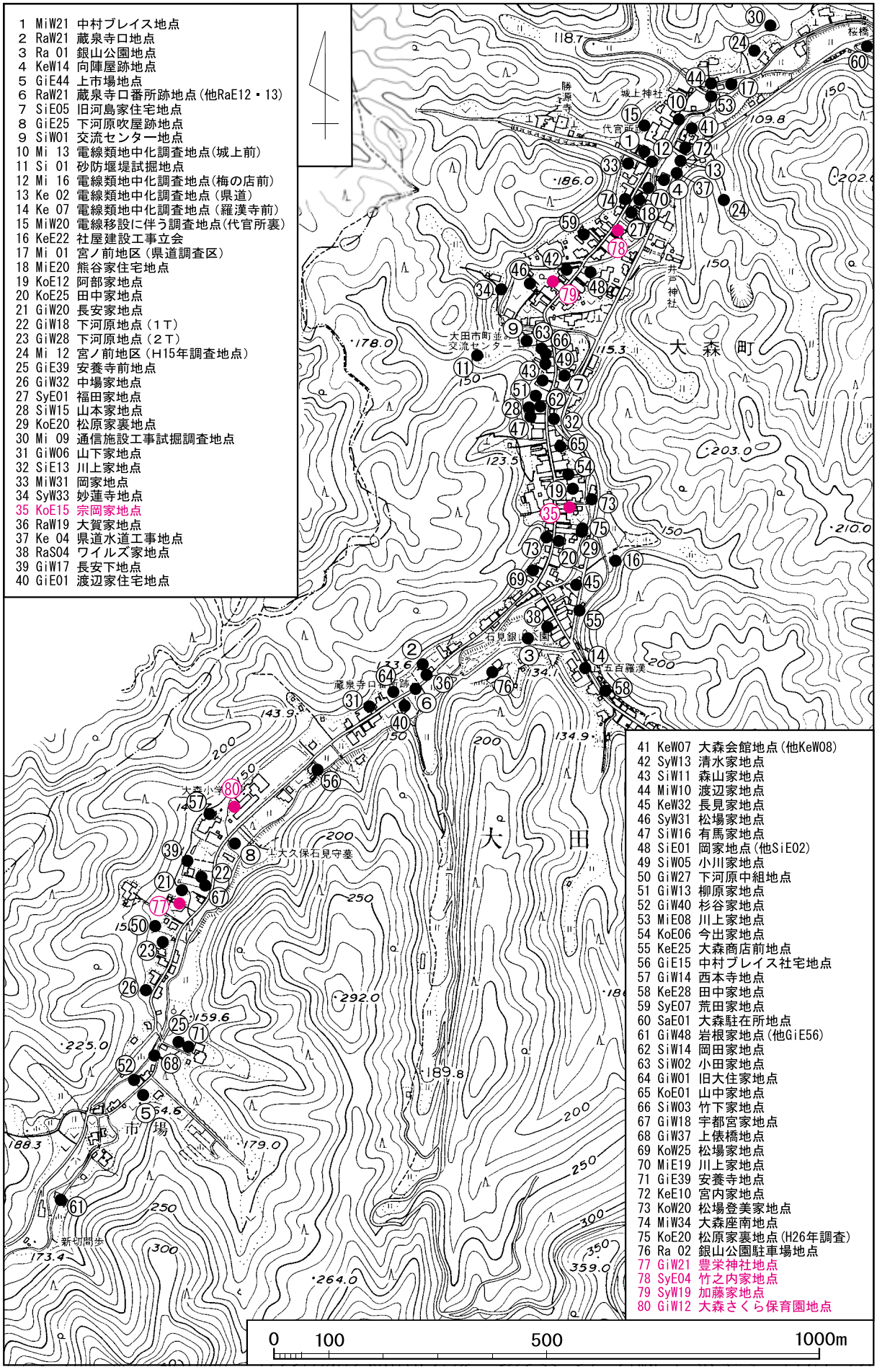


Fig.15　大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点（S＝1／10,000）

Fig.16　宗岡家地点調査区配置図（S＝1／1,000）

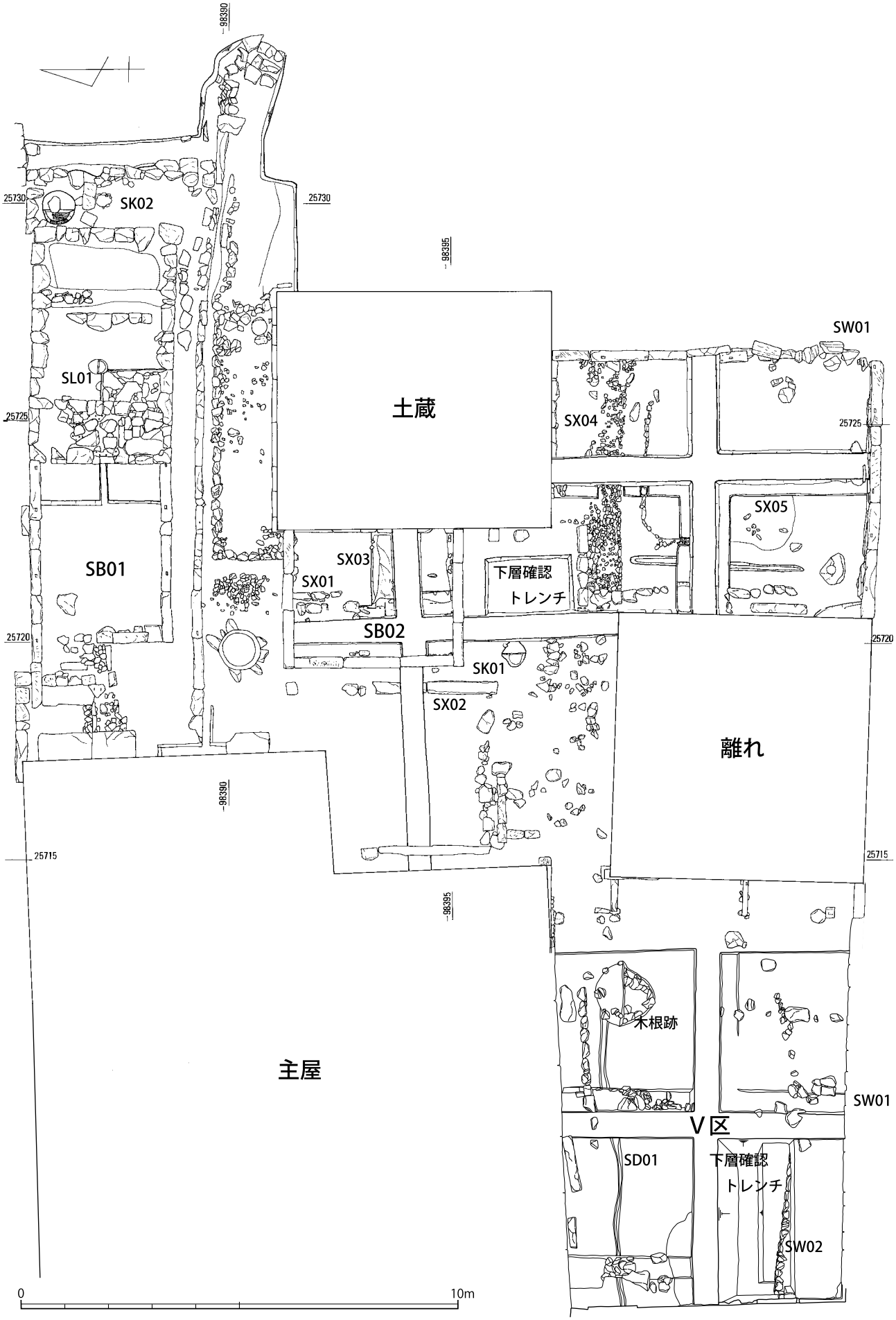


Fig.17　宗岡家地点検出遺構配置図（S＝1／120）

北 1.75 mの下層確認トレンチを設定して調査を実施した。宗岡家地点では平成 18（2006）年と平成 26（2014）年に下層確認調査を実施しており、敷地内の東部と西部では堆積状況が明らかとなっている。今回の下層確認トレンチは敷地内中央部の堆積状態の確認を目的としたものである。また、第Ⅴｂ区西部においても幅 30cm 程度のサブトレンチを設定して掘り下げを行なった。

下層確認により硬化面が 18 面検出され、敷地内において地表面の貼替や整地が頻繁に行われていたことが確認された（Fig.19）。これらの硬化面は 6 面に整理することができる。第１面は４・５層上面で、宗岡

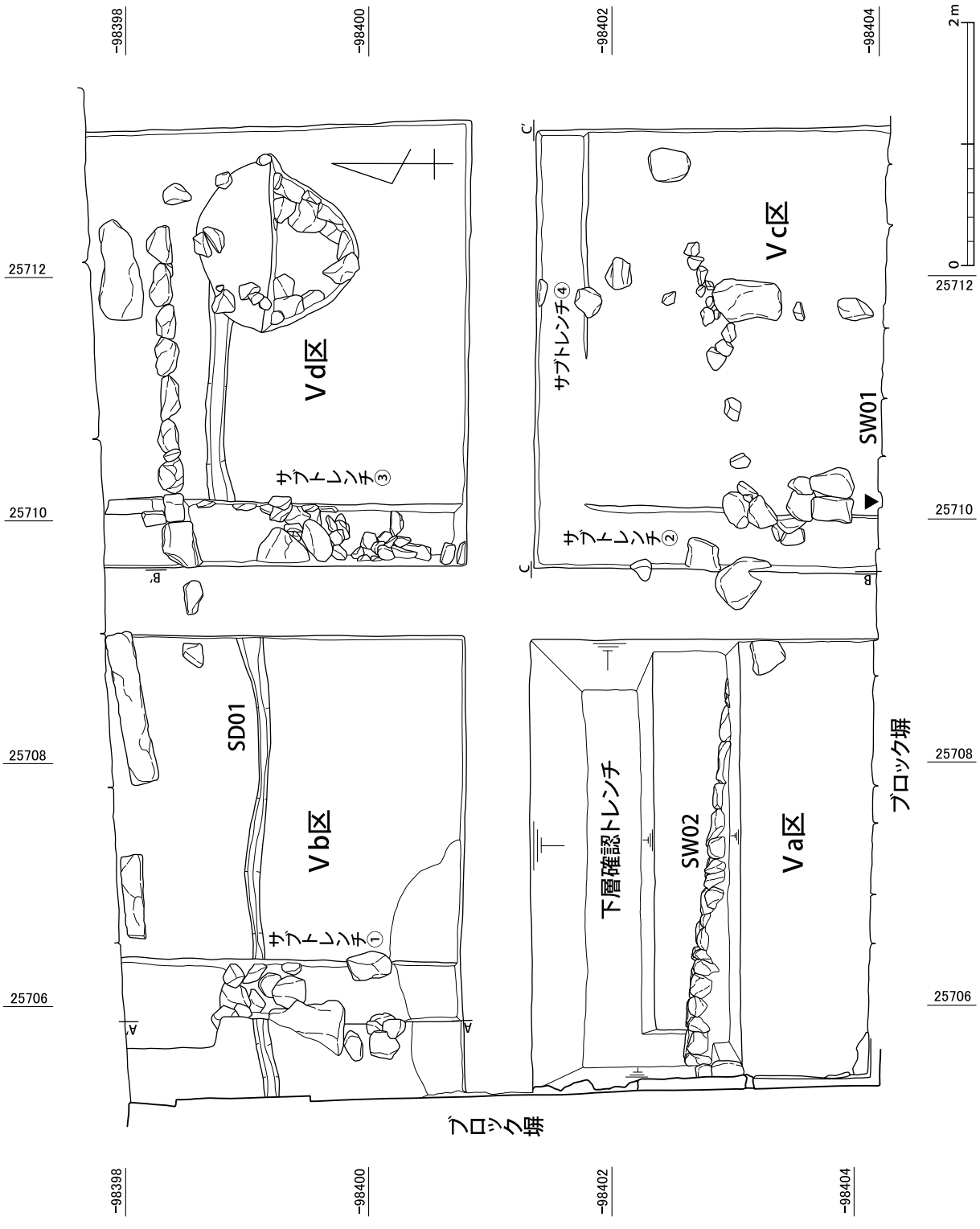
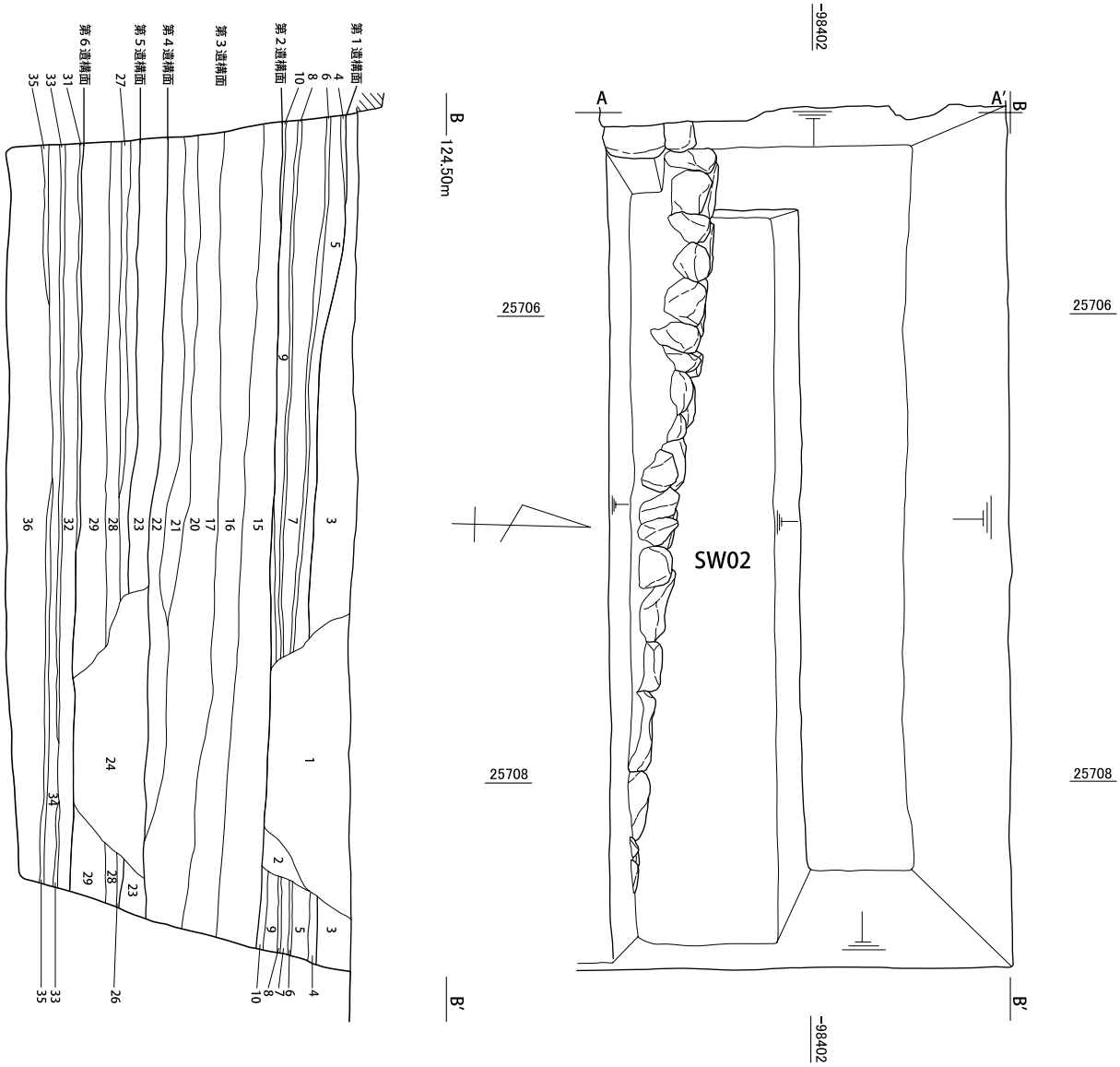
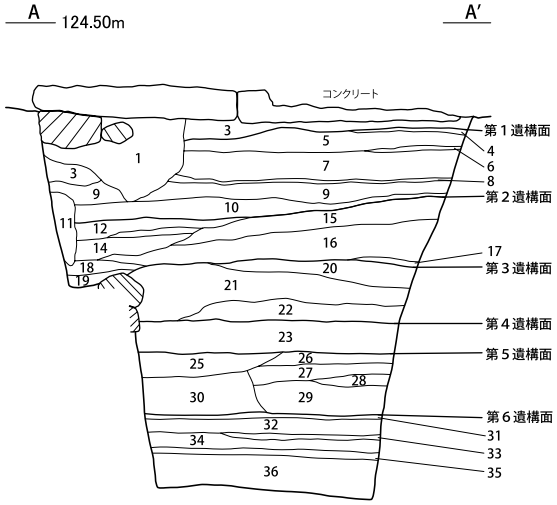


Fig.18　宗岡家地点第Ⅴ区検出遺構配置図（S＝1／50）





1	10YR	3/1	黒褐色土（極小砂粒20%含みしまりない）
2	10YR	3/2	暗褐色土（極小砂粒5%含みしまりない）
3	10YR	2/2	黒褐色土（中礫5%含む）
4	10YR	2/2	黒褐色土（中礫50%以上含む）
5	10YR	3/2	黒褐色土（5~10ミリの礫層、硬くしまる）
6	10YR	6/6	明黄褐色土（極小砂粒5%含む粘質土、粘性強）
7	10YR	3/2	黒褐色土（中礫50%以上含み硬くしまる）
8	10YR	6/6	明黄褐色土（極小砂粒5%含む粘質土、粘性強）
9	10YR	3/2	黒褐色土（5~10ミリの礫層、硬くしまる）
10	10YR	3/3	暗褐色土（しまりのない粘質土）
11	10YR	4/4	褐色土（小白色砂粒5%含みしまりない）
12	10YR	5/1	褐灰色土（極小白砂粒20%以上含む砂質土）
13	10YR	5/1	褐灰色土（2~3センチの小礫を5%含む）
14	10YR	4/1	褐灰色土（極小白砂粒5%含む砂質土）
15	10YR	4/1	褐灰色土（小礫50%以上含み硬くしまる）
16	10YR	3/2	黒褐色土（中礫50%以上含み硬くしまる）
17	10YR	3/2	黒褐色土（中礫50%含む砂質土）
18	10YR	4/1	褐灰色土（極小白砂粒10%含む砂質土）
19	10YR	4/1	褐灰色土（極小白砂粒10%含む砂質土）
20	10YR	5/4	にぶい黄褐色土（10センチ大の礫を含む粘質土、粘性弱）
21	10YR	5/4	にぶい黄褐色土（極小礫を5%含む粘質土、粘性強）
22	7.5Y	6/1	灰色土（極小砂粒10%含む粘質土、粘性強）
23	10YR	3/1	黒褐色土（10センチ大の礫を50%以上含み硬くしまる）
24	10YR	3/3	暗褐色土（2~10センチの礫を50%以上含みしまりない）
25	10YR	5/2	灰黄褐色土（極小白砂粒10%と10センチ大の礫混じる）
26	10YR	2/1	黒色土（極小白砂粒20%含み硬くしまる）
27	10YR	5/6	黄褐色土（2~3センチの礫層）
28	10YR	2/1	黒色土（極小白砂粒20%含み硬くしまる）
29	10YR	3/2	黒褐色土（2~3センチの礫層で硬くしまる）
30	10YR	5/2	灰黄褐色土（極小白砂粒20%以上含む密な砂質土）
31	7.5YR	5/6	明褐色土（2センチ以下の礫が入り硬くしまる）
32	10YR	5/1	褐灰色土（1センチ大の暗緑灰色礫が入り、木片が残るしまりの良い粘質土）
33	2.5YR	5/6	黄褐色土（1センチ以下の礫を含み硬くしまる）
34	10YR	5/1	褐灰色土（1センチ大の暗緑灰色礫が入り、木片が残るしまりの良い粘質土）
35	7.5YR	5/6	明褐色土（2センチ以下の礫が入り硬くしまる）
36	10YR	2/2	黒褐色土（5センチ以下の礫20%以上含み硬くしまる）

0 1m

Fig.19　宗岡家地点下層確認トレンチ平面図・断面図（S＝1／30）

家が建てられた時期の面である。第２面は 15 層上面である。第３面は 20・21 層上面で、ＳＷ 02 を埋めたのちの地表面である。第３面の堆積層である 20・21・22 層は土色・土質共に他の堆積層とは明らかに異なっており、この時期には造成が行われた可能性が考慮される。第４面は Fig.19 の 23 層上面で、ＳＷ 02 の構築面である。第５面は 26 層上面である。第４面と第５面の間には間層を挟んでおらず、26 層上面に 23 層が分厚く堆積していることから、造成による堆積と判断される。第６面は 31 層上面である。31

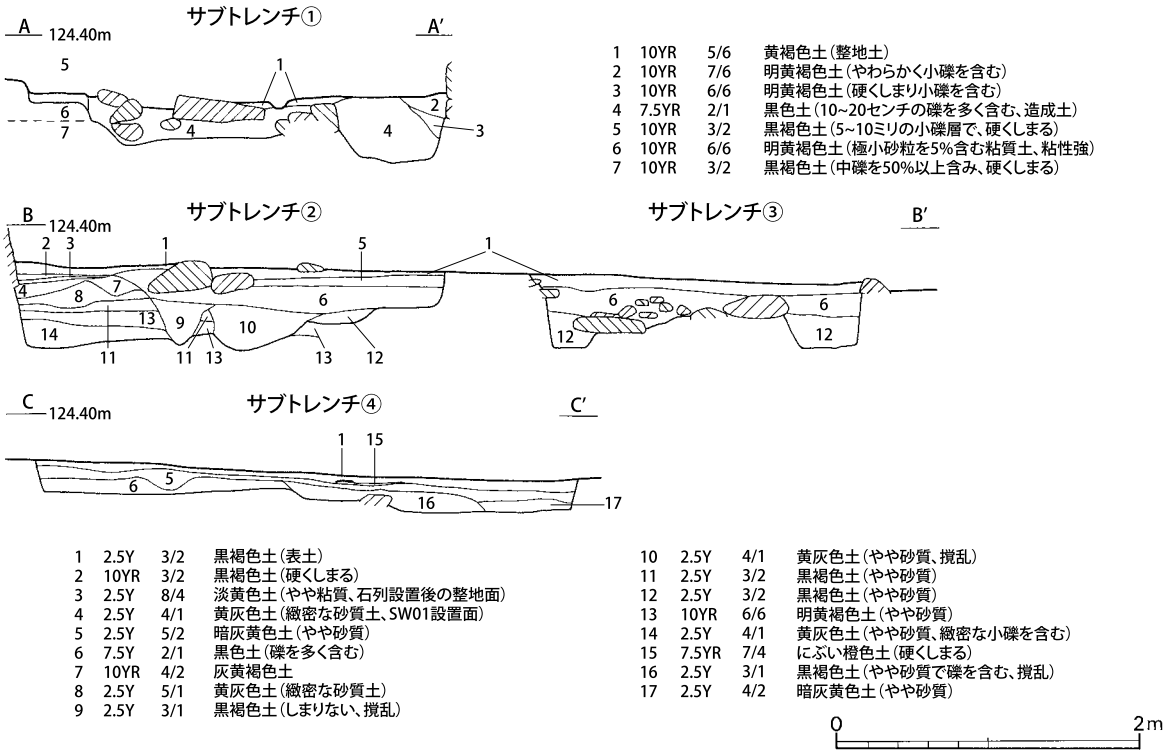


Fig.20　宗岡家地点サブトレンチ断面図（Ｓ＝１／50）

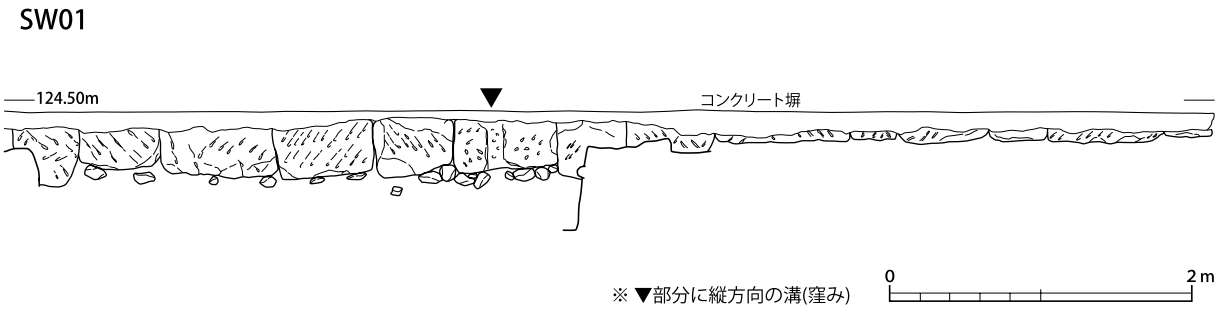


Fig.21　宗岡家地点ＳＷ 01 立面図（Ｓ＝１／50）

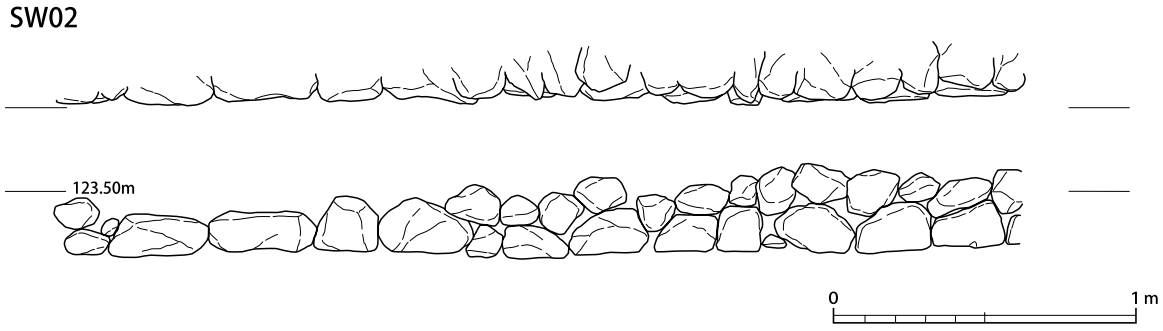


Fig.22　宗岡家地点ＳＷ 02 平面図・立面図（Ｓ＝１／25）

層から 35 層までは非常に固く締まる土層（31・33・35）と木片を含む粘質土層（32・34）が交互に堆積しており、道として利用されていた可能性もある。第２面から第６面までの堆積層中からは江戸時代初期頃の遺物が出土しており、割合短い期間の間に整地や造成が頻繁に行われたようである。第 36 層の時点でトレンチの深さが 170cm を超えたため、安全を考慮して調査を中止した。

第Ｖｂ区西端から 0.6 ｍ東に、東西約 0.5 ｍ、南北約 2.75 ｍのサブトレンチ①を設定して調査を行なった。断面の様相は主屋から南に 2.4 ｍまでとそれよりも南側では堆積状態が大きく異なっており、主屋から離れた部分では下層確認トレンチで確認されたように複数の硬化面が確認できたが、主屋に近い部分では造成土が分厚く堆積していた（Fig.20）。また、宗岡家住宅主屋の基礎である延石は、第１面から造成土を掘り込んだのちに据え付け、周囲を小礫交じりの土で固めて構築していることが明らかとなった。

第３項　検出遺構

遺構としては溝状遺構ＳＤ 01 や、石積み状遺構ＳＷ 02 が検出された。また、昨年度Ⅳ区南壁で検出されていたＳＷ 01 の続きがＶ区においても確認できた。

【ＳＤ 01】

第Ｖｂ・ｄ区で検出された幅 10cm、深さ１cm 程度の浅い溝である。主屋から１ｍ程度南に位置する。主屋屋根の真下に位置し、雨落ち溝と見られる。

【ＳＷ 01】

昨年度の発掘調査で第Ⅳ区南端から検出されていたＳＷ 01 の続きである。第Ⅳ区では凝灰岩の切石を２段積み上げ、その上に延石をのせていたが、第Ⅴ区ではグリ石の上に切石を一段置くのみであった。切石上面の標高は第Ⅴ区西端部では 124.4 ｍ、第Ⅳ区東端部では 124.5 ｍでほぼ揃っているため、第Ⅴ区側が崩れているわけではない。石の大きさは、東半では幅 45 ～ 75cm、高さ約 40cm だが、西半では幅 30 ～ 80cm、高さ約 20cm と薄くなっている。切り石の表面には鑿による加工痕が見られるほか、Ｖ区東端部から６つめの石には縦方向に幅 12cm の溝が掘り込まれている。Ⅳ区ではＳＷ 01 と庭に関連する遺構（ＳＸ 04・05）との間には 30cm 程度の比高差があり、構築時期が異なる可能性が考慮されたが、Ｖ区においてはＳＷ 01 の構築面と宗岡家の構築面は同一であった。

【ＳＷ 02】

第Ｖａ区に設定した下層確認トレンチで、現在の地表面から約 65cm 下から検出された。10 ～ 30cm 程度の川原石を東西方向に２段並べた石積み状の遺構である。遺構の範囲は調査区の西端から東へ約 3.3 ｍで、西方向に延びているが調査対象範囲外のため、全体の検出はしていない。遺構の上面と構築面の比高は 25 ～ 30cm 程度と、石垣としては低い。積み石は東半が１段で西側が２段になっているが、東側の検出時に堆積層中から川原石がいくつか出土していたことなどから、本来は全体が２段になっていたものと考えられる。表面及び崩落部の観察から裏込め石はなく、南側から一続きに構築されている。機能としては土地や屋敷地の境などが想定される。また、Fig.19 には反映されていないが、調査時にはＳＷ 02 の上に自然堆積による細かい砂層が確認されており、洪水等により崩された可能性も考慮される。検出面前後の堆積層からは江戸時代初期の陶磁器が出土しており、遺構の利用時期を示すものとみられる。

第４項　出土遺物（Fig.23、Tab. ４）

31・32 はかく乱部から出土した遺物である。31 は肥前陶器の碗で、内面に灰釉が施されているが、外面底部は露胎する。内面に胎土目がある。32 は青花皿の底部である。

33 ～ 36 は表土直下から第４層までに出土した。33 は在地系陶器の壺で、内外に長石釉が施されているが、内面の口縁部より下は露胎する。また、口唇部と内面の体部と口縁部の繋ぎ目は釉剥ぎされている。外面には嵌入が見られる。口縁部は内外にやや膨らみ、口唇部を平坦にしている。口唇部外面には面取りが施されている。34 は肥前系磁器で、端反碗の蓋とみられる。外面にはコイと水草の文様が、内面見込み部にも文様がある。35 は肥前磁器の仏飯器とみられる。外面中央に一条の圏線が引かれ、圏線から口縁部の間に唐草文と花の文様が施されている。36 は肥前陶器の皿である。底部は露胎し、三日月高台を持つ。内面に砂目がある。33 は江戸時代後期、34 は 19 世紀前半、35 は 18 世紀前半、36 は 17 世紀前半にそれぞれ比

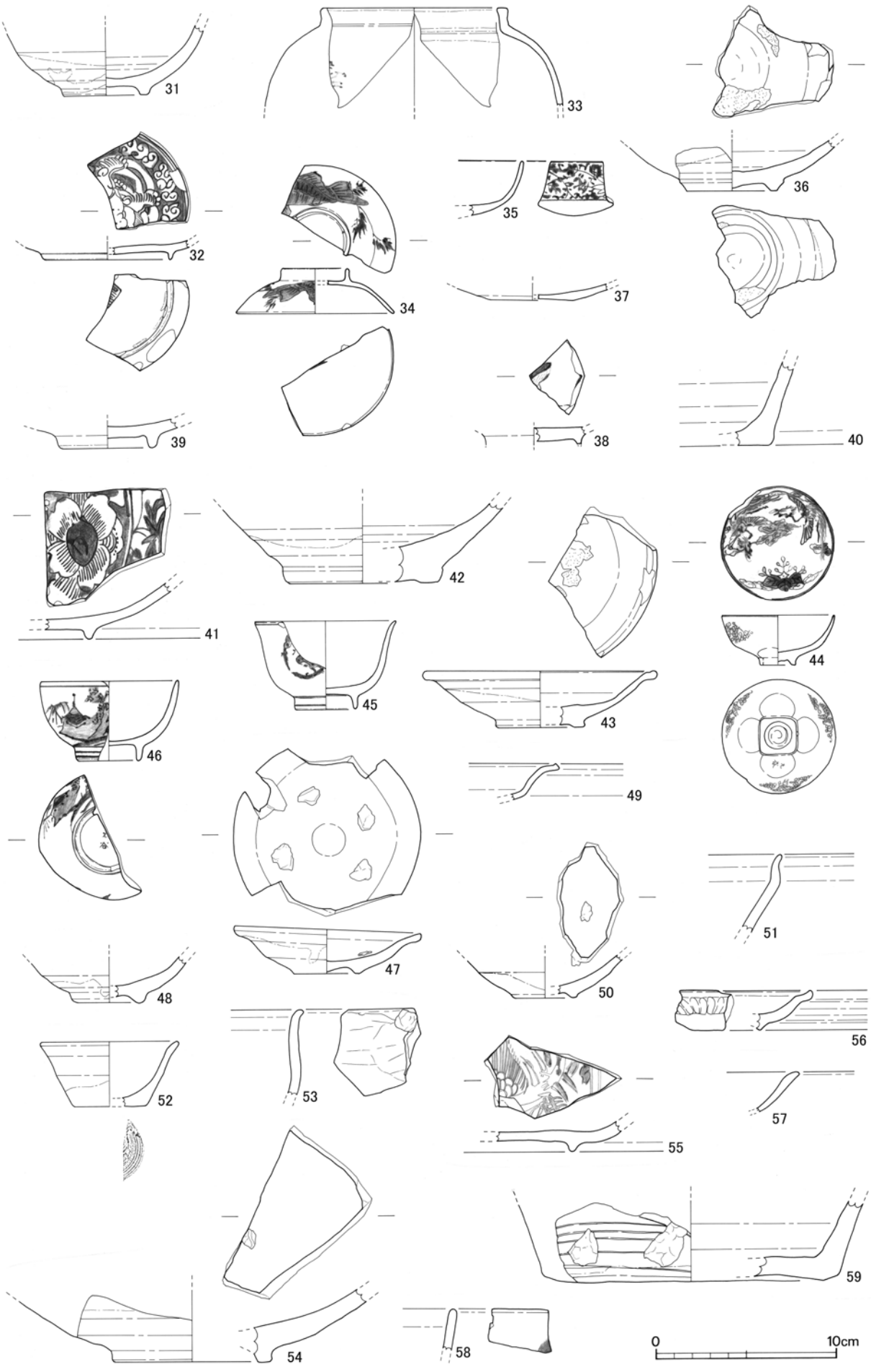


Fig.23　宗岡家地点出土遺物実測図（S＝1／3）

Tab.4　宗岡家地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ（cm）			色　調	成形・調整・文様	備 考
				口径	器高	底径			
31	Ｖｃ区　撹乱	肥前陶器	碗		(3.8)	(4.6)	灰釉		
32	Ｖａ区　撹乱	青花	皿		(1.0)	(6.8)	透明釉		
33	Ｖｄ区　表土	在地系陶器	壺	(10.2)	(5.4)		長石釉		
34	Ｖｄ区　表土	肥前系磁器	蓋	(8.6)	2.5	つまみ径(3.5)	透明釉		有田かも
35	Ｖｄ区　表土下	肥前磁器	仏飯器？		(3.0)		透明釉		有田
36	Ｖｄ区　表土直下～２面	肥前陶器	皿		(2.8)	5.0	灰釉	砂目	
37	Ｖｂ区　遺構面直上	在地系陶器	土瓶		(1.0)	(4.4)	灰釉		
38	Ｖｂ区　遺構面直上	肥前磁器	皿		(1.0)		透明釉		
39	Ｖｃ区　構築面清掃土	白磁	碗		(1.6)	(5.0)	透明釉		中国か
40	Ｖｃ区　構築面清掃土	肥前陶器？	壺・甕		(4.6)		露胎		焼成不良
41	Ｖｃ区　北半表土下礫下層	青花	大皿		(2.5)		透明釉		
42	Ｖｃ区　北半表土下礫下層	肥前陶器	鉢		(4.4)	(8.2)	灰釉		
43	Ｖｂ区　西壁サブトレ	肥前陶器	皿	(12.8)	3.2	(4.8)	灰釉	砂目	
44	Ｖｂ区　西壁サブトレ	瀬戸	小碗	6.2	2.8	2.0	透明釉	朱絵	ゴム印か
45	Ｖｄ区　西壁サブトレ	肥前系磁器	湯のみ	(7.8)	8.9	3.3	透明釉		
46	Ｖｄ区　西壁サブトレ	染付磁器	小碗	(7.5)	4.4	(3.3)	透明釉		
47	Ｖａ区　サブトレ３面整地層	肥前系陶器	皿	10.3	2.7	3.6	灰釉	胎土目	唐人窯か
48	Ｖａ区　６面整地層	肥前陶器？	碗		(2.5)	(3.5)	藁灰釉		
49	Ｖａ区　８面整地層	肥前陶器	皿		(2.0)		灰釉		
50	Ｖａ区　９面整地層	陶器	皿		(2.4)	(3.4)	灰釉	胎土目	山口・唐人窯か
51	Ｖａ区　深堀Ｔ 11 面整地層	瀬戸・美濃	天目碗		(4.3)		天目釉		
52	Ｖａ区　11 面下整地層	肥前陶器	小坏	(7.6)	3.6	(4.0)	灰釉		
53	Ｖａ区　深堀下 11 面整地層	肥前陶器	鉢		(4.7)		長石釉		
54	Ｖａ区　深堀Ｔ 11 面整地層	肥前陶器	大皿		(4.0)	(8.6)	長石釉	胎土目	
55	Ｖａ区　11 面整地層	色絵	皿		(1.7)		透明釉	上絵付	
56	Ｖａ区　11 面下整地層	瀬戸・美濃	折縁皿		(2.2)		灰釉		
57	Ｖａ区　11 面下整地層	土師質土器	皿		(2.2)		浅黄橙色		京都系
58	Ｖａ区　深堀Ｔ 15 面下整地層	肥前陶器？	碗か鉢		(2.4)		灰釉	鉄絵	
59	Ｖａ区　深堀Ｔ 15 面下整地層下	褐釉	壺		(4.4)	(16.4)	褐釉	胎土目	中国

定できる。

37 ～ 42 は第 1 面の直上で出土した。37 は 19 世紀の在地系陶器の土瓶で、内面に灰釉が施され、外面は露胎し底部にはヘラによる切り離し痕跡がある。39 は 16 世紀後半から 17 世紀前半の白磁の碗で、畳付けが釉剥ぎされている。中国製の可能性がある。38 は 18 世紀後半の肥前磁器で、畳付けが釉剥ぎされている。外面底部に青みが強い染付による文様がある。40 は壺甕類で、肥前陶器の可能性がある。42 は肥前陶器である。低い高台を持つ鉢で、内外に灰釉が施されているが底部は露胎する。41 は青花大皿の底部である。40･42 は 16 世紀末から 17 世紀世紀初頭頃、41 は 17 世紀前半に比定できる。

47 ～ 59 は下層確認トレンチから出土した。47 は第 5 層から出土した肥前系陶器の皿で、外面は無釉で低い三日月高台を持つ。48 は第 10 層から出土した碗で、肥前陶器の可能性がある。内外に藁灰釉が施されているが、底部付近は露胎する。49 は第 16 層から出土した内外に灰釉の施された皿で、口縁端部が折縁になっている。50 は皿で、山口もしくは唐人窯製の可能性がある。内外に灰釉が施されているが、外面底部は露胎する。47 ～ 50 は 17 世紀前半に比定できるが､出土層位が宗岡家の構築面付近であることから、堆積層の時期を示すものでないと判断される。

51 ～ 57 はＳＷ 02 の埋土（Fig.19、20 層）から出土した。51・56 は瀬戸美濃で、51 は天目茶碗、56 は折縁削ぎ皿である。52 ～ 54 は肥前陶器である。52 は小杯で、底部は無釉で糸切痕が残っている。53 は鉢で、内外に灰色の長石釉が施されている。外面に玉状の付着物がある。器形より片口となる可能性がある。54 は長石釉の施された大皿である。底部付近は露胎し、内面には胎土目がある。断面にススが付着している。55 は色絵の皿で、内面に花の絵が描かれている。中国産の可能性がある。56 は瀬戸・美濃で、内外に黄色味がかった灰釉が施されている。体部が外上方に延び、口縁部が屈曲してナナメ上方に開き、口縁端部は折縁となる。体部内面に削ぎを入れている。57 は京都系土師器の皿である。

58・59 は Fig.19 の 29 層から出土した。58 は内外に灰釉が施された碗もしくは鉢で、外面に鉄絵による文様の一部がみられる。肥前陶器の可能性がある。59 は中国産の褐釉の壺である。51 ～ 59 は多くが 17 世紀前半までに比定できるが、51・56 は 16 世紀代、59 は 15・16 世紀頃である。

43 ～ 46 は第Ⅴｂ・ｄ区の西壁サブトレから出土した。43 は肥前陶器の皿で、口縁部は折縁状になる。口縁の内側には細い溝がある。内外に灰釉が施されているが､外面は口縁部から体部の一部のみが施釉され、体部の大部分と底部は露胎している。内面に砂目がある。46 は染付磁器の小碗である。丸い器形で、畳付けが釉剥ぎされている。圏線が外面高台に 2 本、高台と底部の接続部に 1 本、外面口縁部に 1 本引かれている。外面体部には山水の文様が､外面底部には「九谷」の文字が描かれている。44 は瀬戸の新製焼で、内外に転写による朱絵の施された小碗である。高台は四角く成形され、四方が花弁状に丸く整えられている。外面には 3 カ所に唐草の文様と、底部付近に「九谷」の文字が、内面には鳳凰と雲、桐の花が描かれている。45 は肥前系磁器で、口縁部がやや外反した湯呑である。文様は圏線が高台の外側に 1 本と、高台と底部の接続部分の表裏に 1 本ずつ、外面口縁部に 1 本引かれている。体部外面には三か所に丸文が描かれている。43 は 17 世紀前半の古い資料であるが、44 ～ 46 は近代以降のものと見られる。

第 3 節　小結

本年度は屋敷地の中央部分の調査を行なった。第Ⅴ区の宗岡家構築面では明確な遺構が検出されなかったことから、第Ⅳ区ほど積極的に整備されていなかったと見られる。下層確認トレンチでは江戸時代初期頃の土地区割に関わる可能性のある遺構ＳＷ 02 が検出され、江戸期における地割の変遷を考える上で重要な資料が得られた。また、複数の硬化面が確認できたことから、江戸期を通じて敷地内の造成や整地が行われていたことが明らかとなった。

サブトレンチ①では、基礎を据え付けた際の構造が明らかとなったほか、主屋から 2.4 ｍを境として、堆積状態が大きく変わることが確認された。現在の宗岡家の敷地は、元々は福本乙兵衛と山本内蔵太の屋敷地からなっていることが要因の一つとも考えられる。

第４章　豊栄神社地点の調査

第１節　調査の概要

第１項　周辺環境

豊栄神社は石見銀山遺跡でも、史跡指定地と大森銀山伝統的建造物群保存地区とが重複する下河原地区に所在する。

江戸期には洞春山長安寺という曹洞宗の寺院であった。この長安寺は、毛利元就の木像を安置する寺院として長州藩とも密接な関係を持っていたが、明治２（1869）年、毛利元就に「豊栄」の神号が授与されたことにより、豊栄神社へと変遷した特異な経歴を有する。

境内は市道銀山線より西側に位置し、鳥居をくぐって参道を進むと随身門、拝殿、本殿と社殿が直線的に並ぶ。また、境内にはこれらの建物の他、灯篭、狛犬などの石造物が多数奉納されている。

現存する建造物は、慶応２（1866）年から明治３（1870）年まで当地を支配した長州藩が中心となって造営されたものである。したがって、境内地の造成から建物の建築はこの間に行われており、建築年代や、建築の経緯が判明している貴重な文化財である。

これらの建造物は、昭和 18（1943）年に当地を襲った水害により多大な被害を受けたとされ、主要建物は辛うじて倒壊を免れたものの、周囲を巡っていた塀や玉垣はほとんどが倒壊し、石造物も多くが流失している。その後、本格的な修理・復旧が行われないまま現在に至っている。

こうした経緯に加え、経年劣化により建造物は現在危機的な状態にあり、特に建物については深刻な倒壊の危険に晒されている。

さらに、境内地の現状は、水害により倒壊した石造物の残欠が境内に散乱しており、境内にも埋もれた石材が散見される状態である。また、境内は参道より周囲の面の方が高く、雨天時には雨水が境内内に流入し、水浸しとなっていた。

こうしたことから、建物修理を含めた環境整備は、緊急性の高い懸案事項となっており、これらの保護措置の一環として、平成 27（2015）年には、一時的措置として、本殿と拝殿の屋根瓦が下ろされ、軽量のトタン屋根に替えられている。

第２項　調査の経緯

社殿修理及び境内地の整備は、現在事業計画が進行中で、史跡の整備事業の一環として平成 28（2016）年度から平成 31（2019）年度にかけて整備を実施する予定である。

この整備の実施計画を策定するに当たって、境内地の排水、流末処理等の設計する必要があり、その基礎資料として境内造成時の整地面や、排水処理施設の有無及び内容を把握する必要が生じた。

本調査は、この設計資料を得ることを主目的として計画、実施したものである。

調査はトレンチ調査とし、調査深度は調査の目的に応じ、基本的には境内地造成面までとし、必要に応じて掘り下げを実施するものとした。

第３項　調査の概要

トレンチは、参道及び社殿の中心線を基軸とし、それに直交するよう南北方向に設定した。トレンチは当初、拝殿の南北、随身門西側の参道の南北、随身門東側の参道の南北の計６本の計画で調査に入ったが、調査の進展に伴い、随時増設・拡張を行い、最終的には14本（１Ｔ～14Ｔ）のトレンチになった。これらの内、２Ｔと６Ｔについては、基軸線と平行の東西方向に設定して調査を行った。

トレンチの幅は 50cm を基本としたが、深掘り等により深度が深くなった２Ｔ・３Ｔ・11 ～ 13 Ｔについては拡張を行った。特に３Ｔでは、検出した石組の大溝（ＳＤ 01）について、遺構の内容確認を行ったため、幅 2.3 m以上の大きなものとなった。

今回の調査で確認した主な遺構はＳＤ 01、玉垣の基礎などである。

次節では、各トレンチの調査成果を述べる。

第２節　調査の成果

第１項　基本層序

各トレンチとも、表土下には昭和 18（1943）年の

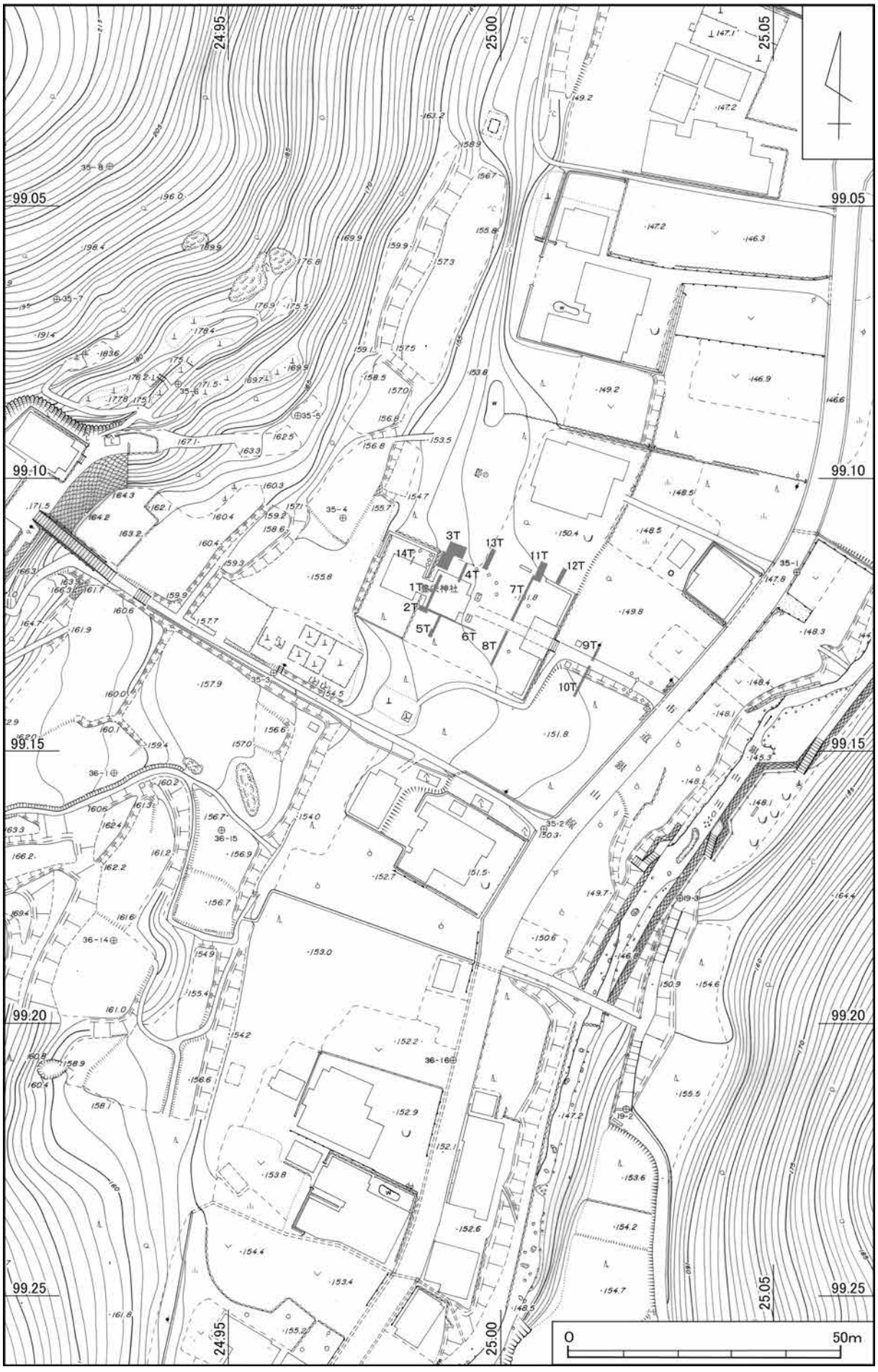


Fig.24　豊栄神社地点周辺地形図（S＝1／1,000）

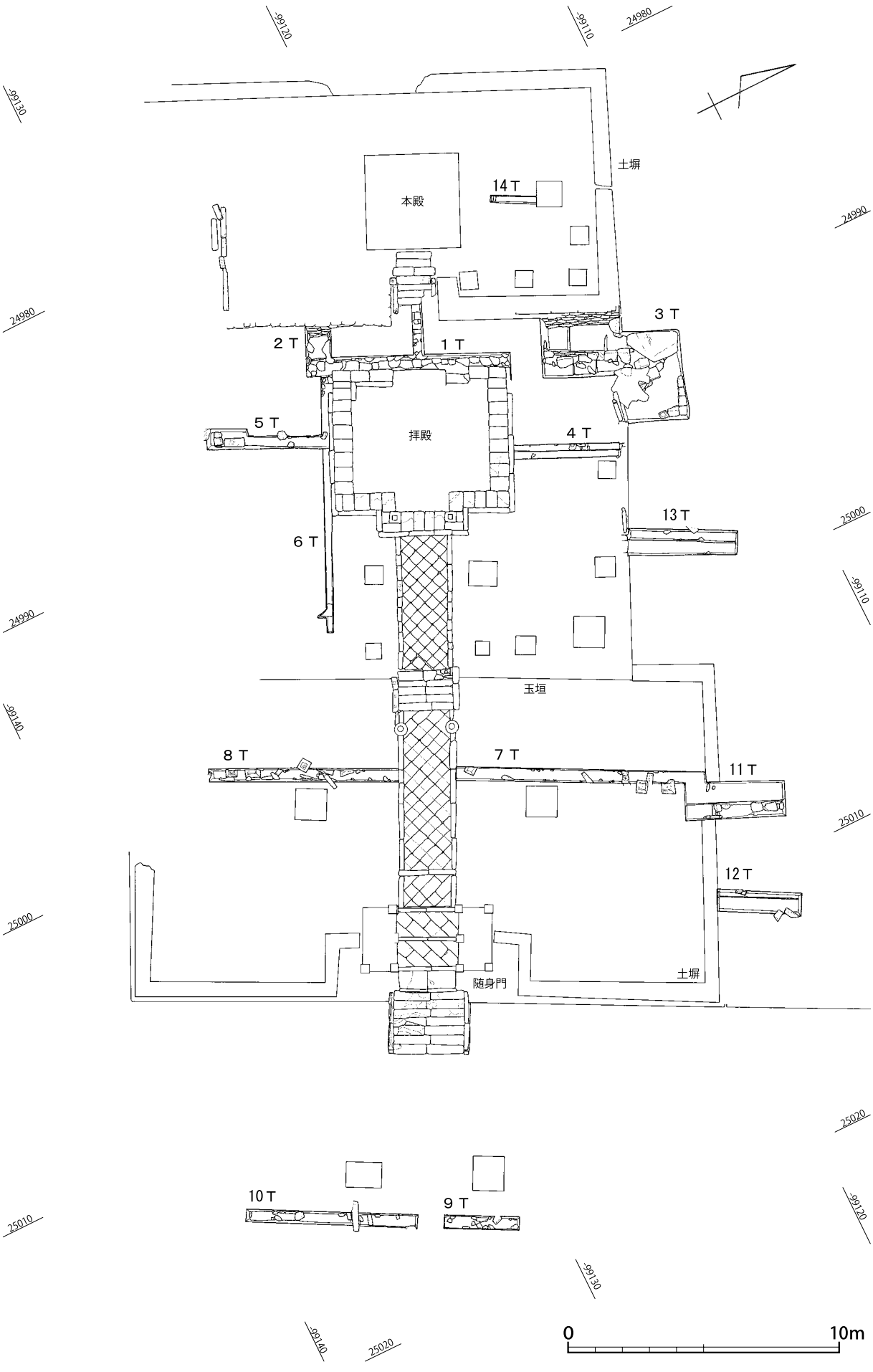


Fig.25　豊栄神社地点トレンチ配置図（Ｓ＝１／200）

水害時の洪水層と考えられるオリーブ黄色土～暗灰黄色土が一様に見られ、その直下から境内造成時の整地面が検出された。深掘りを行った 11 Ｔ～ 13 Ｔでは、境内造成時の整地面の下層にはさらに造成土と思われる黄褐色土や黒褐色土が検出されており、境内造成時の盛土と推定された。また、３Ｔでは、石積みの裏込め下層より、前代の面と考えられる黒褐色土の硬化面を確認したが、確認範囲は裏込め部の一部に留まる。

今回の調査では、豊栄神社造成面の確認が主目的であったため、下層の遺構確認までは行わなかったが、境内地の下層にはより古い時期の遺構面が存在する可能性が高いと推定される。

第２項　調査成果

１Ｔ・２Ｔ（Fig.25・26）

１Ｔは本殿と拝殿の間に南北方向に設定したトレンチで、幅 50cm、長さ 6.5 ｍである。２Ｔは１Ｔの南側で本殿と拝殿を画す石垣に向かって垂直に東西方向に設定したトレンチであるが、大溝（ＳＤ 01）が検出されたため北側に拡張した結果１Ｔと接続したので、ここではまとめて報告を行う。拡張したため２Ｔの幅は１ｍ、長さ 1.8 ｍである。

１Ｔでは、南北方向に延びる西側に面を持つ石列が検出され、石材の下にも石が積まれていることが確認できたため、石積みと判断した。石材は 30 ～ 50cm 程度の白色凝灰岩で、四角形或は５角形に成形され、上下の石材は緻密に接合されている。

２Ｔでも、石積が検出され、本殿と拝殿を画す石垣に対応しており、両者間が石組の溝であることが確認された。この石組みは１Ｔの石積みと繋がり、１Ｔの石積みも溝の一部であることが判明した。したがって、両トレンチで検出したＳＤ 01 の長さは 7.5 ｍ以上となる。２Ｔで検出した部分では、溝の幅は溝上部で約 1.3 ｍ、溝底部で約 80cm 程である。高さは東側で約 1.5 ｍ、西側で約 80cm である

また、検出位置が本殿と拝殿の中間で、本殿側の石段と、拝殿の石段の間を貫通しており、本殿側と拝殿側とは溝により完全に遮断されている。階段部分については、東西方向にサブトレンチを設定して掘り下げたが、本殿側の石段がさらに２段分検出されたものの、溝の底を確認するには至らなかった。

石積みは２Ｔ部分では西側の面で５～６段程度積まれ、東側で３段積まれている。いずれも上部が破壊されており、本来の天端は失われている。ただ、１Ｔでは石積みの天端まで確認されており、高低差から判断すると、西側の石積みはもう１石積んで４段であったと推定される。

石積みは、西側の石積みで約 75 度の傾斜で直線的に立ち上がっている。東側の石積みについては元位置を保っているのが底面から２石のみで正確には測れないが、概ね西側と同程度の傾斜で立ち上がるものと考えられる。

１Ｔで検出したＳＤ 01 の石組みは、拝殿周囲に設置された石敷きの下層で検出されており、拝殿よりＳＤ 01 の方が先行して構築されていることが明らかとなった。

また、石積みには一部の石材上面が断面でＬ字型に削られ、水平に加工している部分がみられた。これは、玉垣の基礎を設置した痕跡と考えられ、元来は玉垣が拝殿を取り囲んで背後にまで及んでいたものと推定される。

１Ｔ及び２Ｔの土層をみると、ＳＤ 01 上面まで大型の礫を含んだオリーブ黄色土（第８層）の洪水層で充填されており、洪水により一気に埋没した状況を示している。

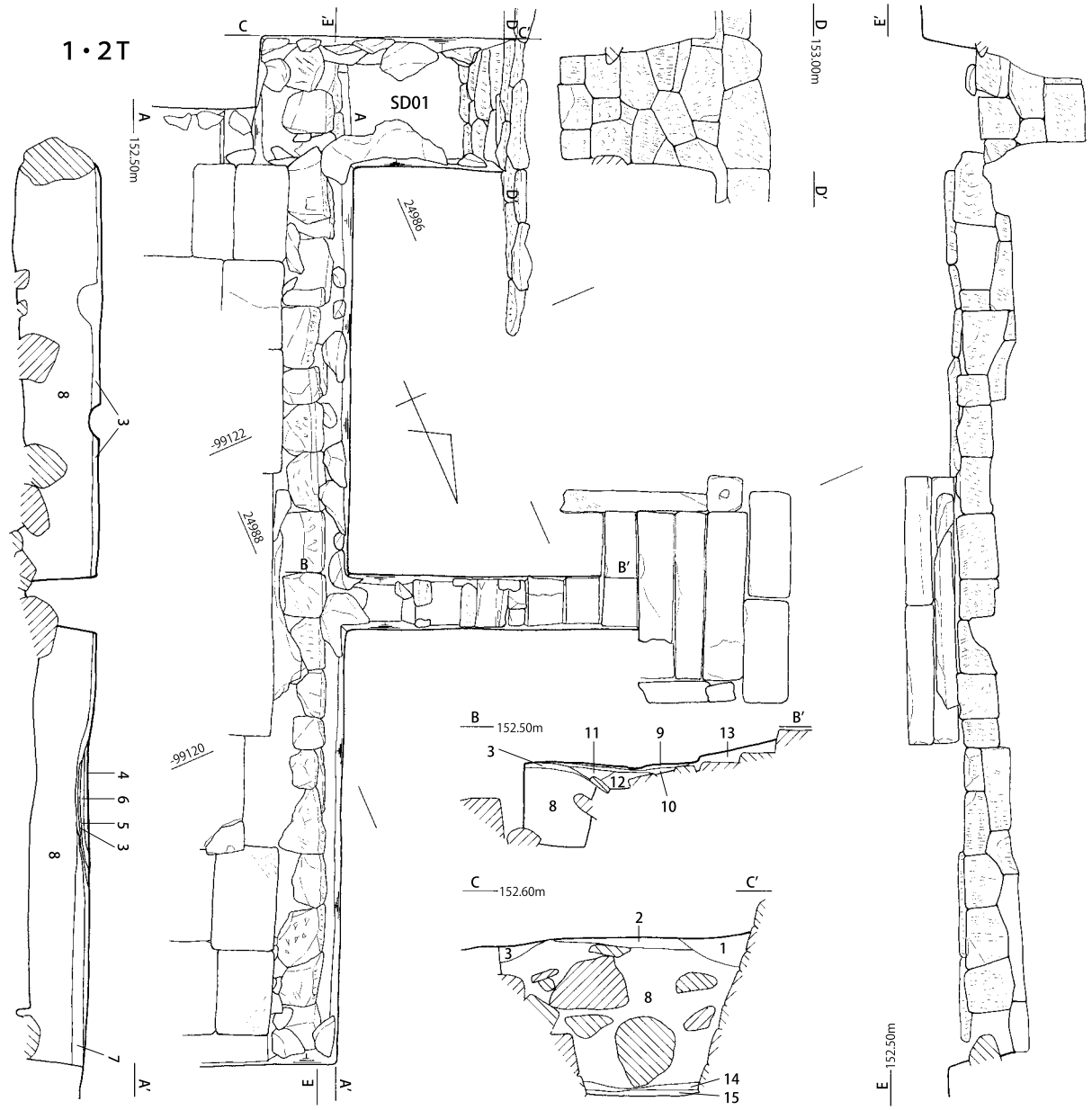
２Ｔでは、この洪水層内から石積みの石材も出土しており、洪水により石積みも破壊され、溝内に転落したものと考えられる。このことは、洪水により石積み上の土塀も同時に破壊されたことを示しており、洪水による被害が甚大であったことが窺われる。

２Ｔの底面には粘質土（第 14 層）と砂質土（第 15 層）が薄く堆積しており、溝が機能していた時期に堆積した層と考えられる。

３Ｔ（Fig.25・27）

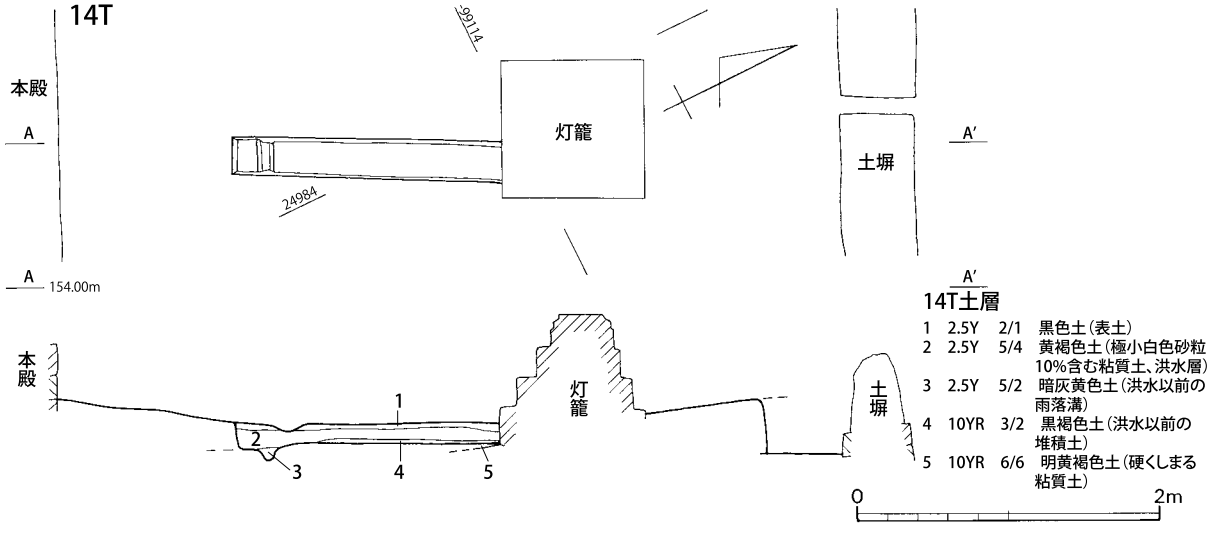
３Ｔは、１Ｔと２ＴでＳＤ 01 が検出されたことにより、確認のため１Ｔの北側 1.5 ｍの位置に設定したトレンチである。規模は、当初幅 60cm で、ＳＤ 01 の流走方向と直交するよう東西方向とした。

掘り下げを行うと、ＳＤ 01 の延長部が検出されたため、順次拡張を行い、最終的に南北５ｍ、東西４ｍの範囲で逆Ｌ字型のトレンチとなった。



1・2T土層

1	2.5Y	3/1	黒褐色土(有機物含む)	6	10YR	3/2	黒褐色土	11	5Y	5/4	オリーブ色土
2	2.5Y	5/1	黄灰色土(やや粘質)	7	5Y	6/3	オリーブ黄色土(2ミリの白色砂粒含む)	12	5Y	3/1	オリーブ黒色土(やや砂質)
3	5Y	3/1	オリーブ黒色土(表土)	8	5Y	5/3	灰オリーブ色土(明黄褐色のブロック土含む)	13	5Y	5/4	オリーブ色土(緻密)
4	5Y	4/1	灰色土	9	2.5Y	4/1	黄灰色土	14	2.5Y	4/1	黄灰色土(粘質)
5	2.5Y	7/6	明黄褐色土(やや粘質)	10	5Y	6/4	オリーブ黄色土(やや砂質)	15	7.5YR	4/2	灰褐色土(目の粗い砂質土)



14T土層

1	2.5Y	2/1	黒色土(表土)	
2	2.5Y	5/4	黄褐色土(極小白色砂粒10%含む粘質土、洪水層)	
3	2.5Y	5/2	暗灰黄色土(洪水以前の雨落溝)	
4	10YR	3/2	黒褐色土(洪水以前の堆積土)	
5	10YR	6/6	明黄褐色土(硬くしまる粘質土)	

Fig.26　豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅰ（S＝1／50）

３Ｔで検出したＳＤ 01 の石積みは、東側の面で長さ 3.2 ｍである。北端の石材はＬ字型に面取されており、角石（スミイシ）と推定される。さらに、北側へは石積みはが続かないことからも石積みはこの位置まででで、以後は石積みを持たない溝となっている。洪水により流されたと考えられる巨石が石積み北側の溝内に転落していることから、溝自体はさらに北側に続くものと推測される。溝の幅は上面で約 1.3 ｍ、底面で約 80cm である。

３Ｔで検出したＳＤ 01 の石積みは、西側の面が完存しており、良好に検出された。この面の石積みは土塀の基礎石（延石）まで６段積まれており、上部は土塀下の石垣となっている。このため、溝底面から天端までの高さは約２ｍである。

石材は１・２Ｔで検出した石積み同様の白色凝灰岩で、約 25 ～ 55cm の切石を四角形から六角形に加工して緻密に接合しており、各石材がずれないよう組み合わせて積み上げている。また、根石と天端石は他の石材よりやや大きいものが使用されている。また、所々には幅 10cm 程度の縦長の間石（アイイシ）を詰めている。石材の表面には鑿（ノミキリ）による加工痕が明瞭に残り、周辺部は幅の広い鑿で丁寧に削って仕上げている。３Ｔ南端部での石積み立ち上がりは 78 度で、直線的に積まれている。

東側の石積みは、北側部分が崩れているが、一部は天端まで残存している。この部分では４段に積まれており、天端までの高さは約１ｍである。石材加工状況は西側の面とほぼ同様であるが、下から２段目と３段目の接合部は直線ではなく、曲線に加工して組み合わせている。天端上面には１Ｔと同じ様に断面をＬ字型に削って玉垣基礎を設置した痕跡が残る。石積みの立ち上がりは約 75 度で、西側面とほぼ同じ傾斜である。

トレンチ南端の底面を下層確認のため深掘りをしたところ、両石積み下部で胴木が検出された。太さは、西側の胴木（胴木①）で約 15cm、東側の胴木（胴木②）で約 10cm であった。この太さの違いは石積みの高さの違いによるものと考えられる。樹種は表面に残る樹皮から松材と思われる。胴木②については石積み北端でも検出しており、この位置で胴木も終了している。また、胴木②北端の西側では胴木を固定するためと考えられる杭も打ち込まれた状態で検出された。

溝底部の北側では、角石から南に約 80cm の位置で溝方向と直交する丸太材が検出された。この丸太材は、残存している部分は東側のみであるが、底面からやや浮いた状態で壁面に掛けるよう設置してあった。直径は 10cm 程度で、樹種は棕櫚（シュロ）と考えられる。

ＳＤ 01 は、角石の部分で東側に屈曲する可能性が残されていたため、調査区を東側に拡張して確認を行った。木根で不明瞭な部分が有るものの、石積みは続かず、現地表下 50 ～ 60cm で硬化面が検出された。この面は洪水前の面と判断され、このことにより、ＳＤ 01 は角石部分より北側については石組みを持たない溝として、そのまま北方向に流走するものと推定される。

ＳＤ 01 内の堆積状況をみると、大部分を洪水層のオリーブ黄色土（第７層）で占められており、１Ｔ・２Ｔ同様洪水により埋没した状況を示している。第 12 層上面が構築当初の溝底面と考えられるが、第 11 層上も硬化している。上面には第８～ 10 層が薄く堆積しており、第 11 面上面が洪水時の溝底面と思われる。この面は前述の丸太の上面とも一致しており、丸太によって堰き止められた土砂の上面が底面となっていたものと推測される。

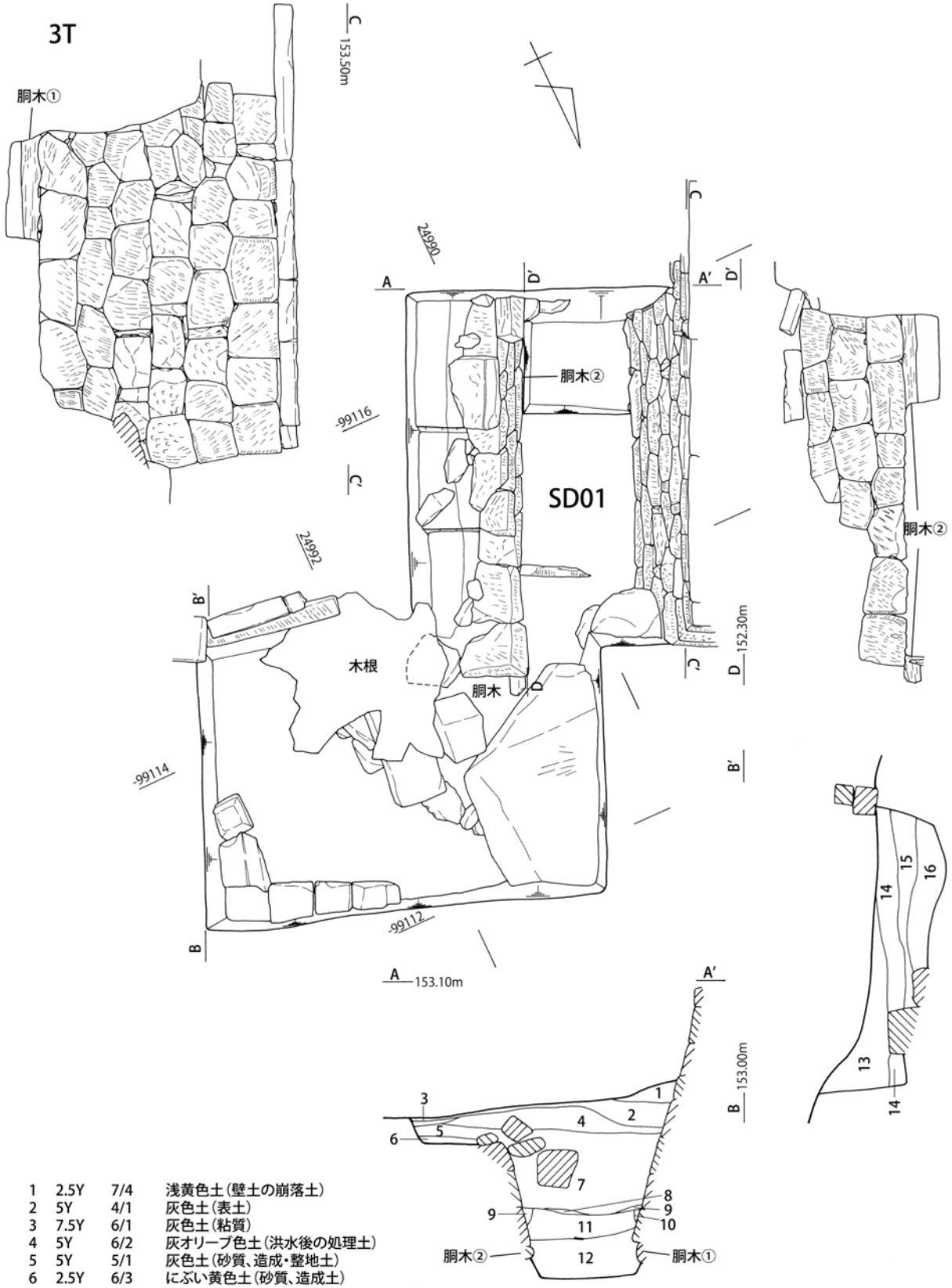
東側の石積みの背後では、石積みの裏込めは見られず、石材の奥行き部分のわずかの空間のみが灰褐色土で充填されているだけで、ほとんどが第６層の造成土であった。この造成土上には灰色砂質土（第５層）の整地層が見られ、洪水直前の地表面だと考えられる。

トレンチ東側の壁面（Ｂ－Ｂ’）では、洪水層（第 15・16 層）の下で硬化面が検出され、洪水時の地表面と推定された。この面上の洪水層内からは灯篭の石材が出土しており、洪水により流失した灯篭の石材と考えられる。

４Ｔ（Fig.25・28）

４Ｔは堆積状況を把握する目的で拝殿北側に南北に設定したトレンチで、規模は幅約 50cm、長さ約４ｍである。

表土を除去すると、水平に整地された暗灰黄色土（第３層）の面が検出された。この層には石材や瓦が含ま



1	2.5Y	7/4	浅黄色土（壁土の崩落土）
2	5Y	4/1	灰色土（表土）
3	7.5Y	6/1	灰色土（粘質）
4	5Y	6/2	灰オリーブ色土（洪水後の処理土）
5	5Y	5/1	灰色土（砂質、造成・整地土）
6	2.5Y	6/3	にぶい黄色土（砂質、造成土）
7	5Y	6/3	オリーブ黄色土（洪水層）
8	10YR	6/6	明黄褐色土（マンガンの沈着?）
9	10YR	5/4	にぶい黄褐色土（やや砂質）
10	7.5YR	3/4	暗褐色土（やや砂質）
11	5Y	4/1	灰色土（やや砂質、上面が堀底の時期あり）
12	2.5GY	5/1	オリーブ灰色土（粘質、上面が当初の堀底）
13	2.5Y	7/2	灰黄色土（排土）
14	2.5Y	3/1	黒褐色土（表土）
15	5Y	6/3	オリーブ黄色土（洪水層）
16	5Y	7/3	浅黄色土（洪水層）

Fig.27　豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅱ（S＝1／50）

れており、洪水層と考えられたため、トレンチ西半部分の掘り下げを行った。その結果、地表から約 10 ～ 15cm で硬化面が検出され、拝殿周囲の延石底部のレベルとほぼ一致したため、この面が境内造成時の面と判断した。

洪水層と考えられる暗灰黄色土については、洪水後の復旧作業で、完全には除去されないまま、石敷きが見える高さで整地されたものと推測される。

５Ｔ（Fig.25・28）

５Ｔも堆積状況を確認する目的で拝殿南側に南北に設定したトレンチである。規模は幅約 50cm、長さ約 4.5 ｍであるが、南側において遺構が検出されたため、南側の約 1.5 ｍを幅約 80cm に拡張した。この調査区は南北で高低差が大きく、調査前の比高で約 50 ～ 60cm 違っていた。

表土下に洪水層と考えられる黄褐色土（第２層）が検出され、その下層で硬化面が検出された。この面は４Ｔで検出された造成面と同一面と考えられ、標高もほぼ同じ高さで、拝殿の延石底面とも一致する。

トレンチの南端近くの境内造成面では石列が検出された。石列は南側に面を持っており、上面もほぼ平らである。石材は一辺 30cm 程度の方形の割石で東西方向に並べられている。

石列は、拝殿周囲の延石から距離が約 4.0 ｍと、拝殿北側に現存する玉垣の基礎石と拝殿からの距離、方向ともに一致することから、拝殿南側の玉垣基礎石と判断される。

この石列の北側では、方形に加工された石材が検出された、底部が造成面に一部埋まっており、石列と平行に設置されていることから、元位置を保っていると考えられる。石材は光石で、精緻に加工されており、表面は丁寧に仕上げられている。大きさは一辺約 75cm で、境内に残る灯篭の基底石に同規模のものが存在することから、灯篭の基底石と考えられる。上面の中央付近は別の石材が重ねられるためか加工がやや荒く、鑿痕が完全には消されていない。

堆積状況を見ると、造成面はほぼ水平であるが、南に向けて高くなっており、北端部は厚さが 13cm 程度なのに比べ、南端部では 60cm 以上となっている。また、北端から約 1.5 ｍ南にある転石までは上面を延石の高さに合わせて水平にしているのに比べ、南側では南側に向かって高くなっている。このことから、水害後の復旧に当たっては、転石付近までは土砂をすき取り、水平に整地したものの、南側までは整地されなかったものと考えられる。

６Ｔ（Fig.25・29）

６Ｔは、洪水層を整地した面の広がりを確認するために、拝殿南側の延石に沿って東西方向に設定したトレンチで、幅約 25cm、長さは約 9.4 ｍである。

西側は境内造成面まで掘り下げたが、東側は洪水後の整地面までで留めた。調査の結果、洪水層は拝殿東側の段差までほぼ水平にされていることが判明した。このことにより、洪水後の整地は拝殿の段では一定の範囲までは行われていることが明らかとなった。

７Ｔ（Fig.25・29）

７Ｔは、随身門西側の参道石畳の北側に南北方向に設定したトレンチで、幅約 50cm、長さ 9.2 ｍの規模である。

掘り下げの結果、地表下約 15 ～ 35cm で境内の整地面が検出され、ほぼ水平に整地されていることが判明した。表土の下はほとんどが洪水層の灰オリーブ色土（第２層）によって占められていたが、拝殿周辺のように水平に整地されていことが明らかとなった。この洪水層には灯篭や玉垣の一部と考えられる石材が含まれており、これらの石材の中には地表面に露出しているものも存在する。

トレンチ北端は随身門から延びる土塀に達しており、土塀の基礎石も検出された。この部分で東側に拡張を行った結果、土塀の基礎石はこの位置で途切れており、東側に土塀の存在しない空間が確認された。

８Ｔ（Fig.25・29）

８Ｔは７Ｔ同様随身門の西側に南北に設定したトレンチで、参道を挟んで７Ｔの南側にあたる。規模は幅約 50cm、長さ約７ｍで、現状で南側に向かって地表面が高くなっている。

掘り下げると約 10 ～ 70cm で境内造成面がほぼ水平に検出され、７Ｔで検出した造成面とほぼ同じ高さであった。

表土下には洪水層の灰オリーブ色土（第２層）が堆積しており、南側に行くにしたがって厚く堆積してい

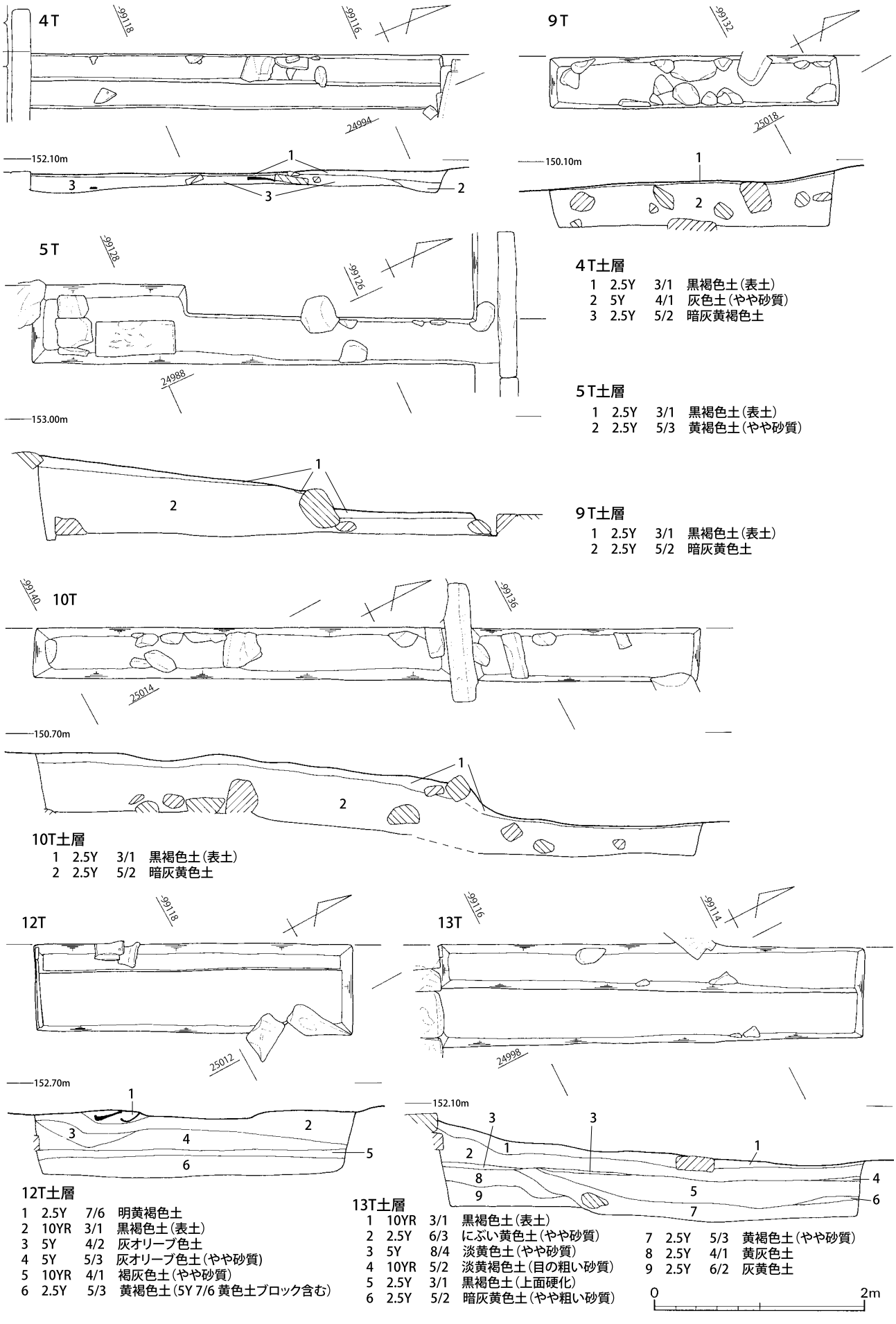


Fig.28　豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅲ（S＝1／50）

る。７Ｔ部分と通してみると両トレンチとも参道に向かって傾斜しており、雨水は参道に向けて流れ込む構造となっている。これは、洪水後の復旧時に参道部分に堆積した土砂のみ除去し、周囲の土砂のすき取りを行わなかった結果と推測される。

８Ｔ内の洪水層には灯篭、玉垣の石材などが大量に含まれており、境内には相当数の石材が埋もれていることを窺わせる。

また、７Ｔ・８Ｔとも玉垣の石材が流入していることについて、本来の玉垣はトレンチ西側に設置されていることから、洪水による土石流は西側から流入し、石材は東方向に流されたものと推測される。

９Ｔ（Fig.25・28）

９Ｔは、随身門東側にあたる最下段に南北に設置したトレンチで、幅約 50cm、長さ約 2.8 ｍである。現状では参道の石敷きは見られなかったため、トレンチは現在通路となっている部分から北側に設定した。

掘り下げを行うと地表下約 40 ～ 50cm で境内造成時の整地面と見られる硬化面が検出された。薄い表土の下は検出面まで洪水層とみられる暗褐色土(第２層)が堆積しており、層内には大小の礫が多く含まれている。礫は加工されたものではなく、いずれも自然石であった。

10 Ｔ（Fig.25・28）

10 Ｔは、９Ｔの南約１ｍの位置に南北方向に設定したトレンチで、幅約 50cm、長さ約 6.3 ｍである。現状では、トレンチの北端から約２ｍの所に段差があり、南側が約 30 ～ 40cm 高く、上段は南側に向かって徐々に高くなっている。

掘り下げを行うと、北側部分では約 30 ～ 35cm で境内造成時の整地面が検出されたが、南側では約 50 ～ 60cm 掘り下げても整地面は検出されなかった。このため、この段差は造成時からのものではなく、本来は水平に造成されていたものと推定される。

表土下はすべて洪水層と考えられる暗灰黄色土（第２層）で占められ、特に南側で厚く堆積している状況が確認された。また、この層内には９Ｔと同様多くの礫が含まれており、ほとんどが自然石であった。

11 Ｔ（Fig.25・29）

11T は、７Ｔの北側に設置したトレンチである。７Ｔの北端で検出した土塀の切れ目の内容確認に加え、土塀北側の排水路の有無を確認するために南北に設定したもので、規模は、幅約 1.4 m、長さ約 3.5 ｍである。

トレンチの幅は土塀の切れ目を確認するために基本より広く設定しており、トレンチ東端部で土塀の基礎石が検出された。これにより７Ｔで確認されていたもう一方の端部との距離が約 1.2 ｍであることが明らかとなった。

掘り下げにより、洪水層と考えられる灰オリーブ色（第５層）土の下層で境内造成時の整地面が確認された。洪水層は土塀の北側でも確認され、その下層（第６～９層上面）が洪水前の地盤と考えられる。

トレンチ東側で深掘りを実施し、堆積状況を見ると洪水前の地盤下には第９・10 層の造成土が確認され、この層は土塀の下にまで及んでいることが判明した。このことにより、この造成土は境内造成時のもので、境内の造成は土塀の北側部分を含めた範囲で行われていたことが明らかとなった。しかし、排水遺構は確認できなかった。

トレンチ北側では上面が平らな石が並んで検出されたが、性格については不明である。

12 Ｔ（Fig.25・28）

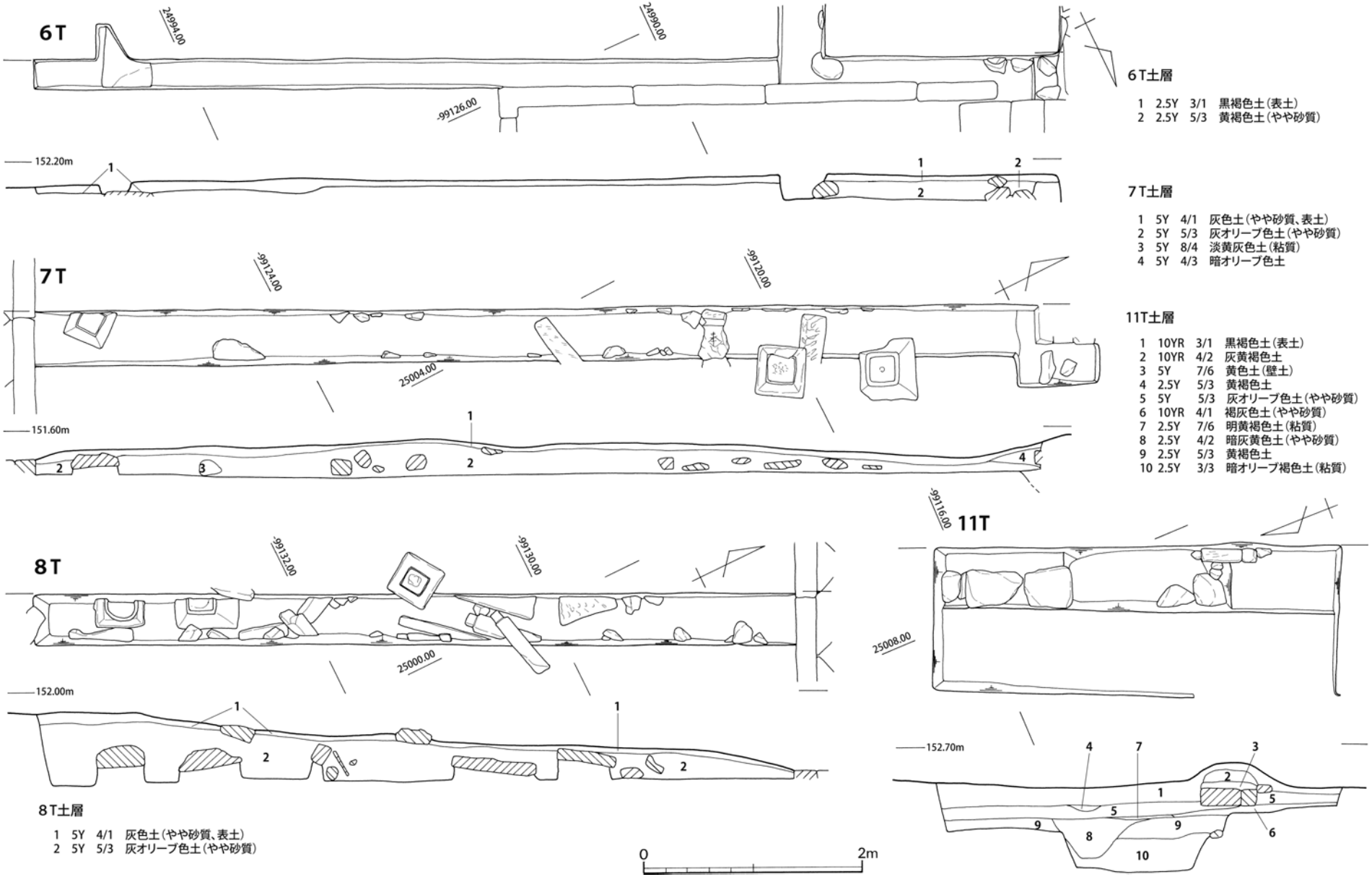
12 Ｔは、11 Ｔの東側約 2.5 ｍの距離に、南北に設定したトレンチで、幅約 90cm、長さ約３ｍである。12 Ｔと同様排水路の確認のために土塀の北側に設けられたもので、トレンチ西側で深掘りも行った。

掘り下げを行うと、表土下には洪水層と考えられる灰オリーブ色土（第４層）が堆積し、その下層で境内造成時の整地面が検出された。トレンチ南端では、この造成土上に土壁の基礎石と考えられる延石の端部が検出された。

深掘り部では、整地層(第５層)の下層で黄褐色土(第６層）の造成土が堆積していることが確認され、11 Ｔと同様であった。

13 Ｔ（Fig.25・28）

13 Ｔは、拝殿北側に残る玉垣の基礎石に直交するよう、基礎石に接して南北方向に設定したトレンチである。規模は幅約１ｍ、長さ約４ｍで、排水路の有無及びＳＤ 01 の流走方向を確認するために深掘りも



6T土層

1 2.5Y 3/1 黒褐色土(表土)
2 2.5Y 5/3 黄褐色土(やや砂質)

7T土層

1 5Y 4/1 灰色土(やや砂質、表土)
2 5Y 5/3 灰オリーブ色土(やや砂質)
3 5Y 8/4 淡黄灰色土(粘質)
4 5Y 4/3 暗オリーブ色土

11T土層

1 10YR 3/1 黒褐色土(表土)
2 10YR 4/2 灰黄褐色土
3 5Y 7/6 黄色土(壁土)
4 2.5Y 5/3 黄褐色土
5 5Y 5/3 灰オリーブ色土(やや砂質)
6 10YR 4/1 褐灰色土(やや砂質)
7 2.5Y 7/6 明黄褐色土(粘質)
8 2.5Y 4/2 暗灰黄色土(やや砂質)
9 2.5Y 5/3 黄褐色土
10 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色土(粘質)

8T土層

1 5Y 4/1 灰色土(やや砂質、表土)
2 5Y 5/3 灰オリーブ色土(やや砂質)

Fig.29 豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図Ⅳ(S=1/50)

実施した。

掘り下げを行うと、表土下に洪水層と考えられる鈍い黄色土（第２層）が堆積しており、その下層で洪水時の地表面と考えられる硬化面を検出した。この面は玉垣南側で検出した境内の造成面と比較して約 40cm 低くなっており、玉垣の内外で約 40cm の段差が有ったことが判明した。

玉垣北側の硬化面は面的に広がっており、排水路もＳＤ 01 もこの位置では確認されなかった。このことからも、ＳＤ 01 は屈曲せずに北方向に直進することが再確認された。

硬化面の下層では第５～第９層を確認したが、第５

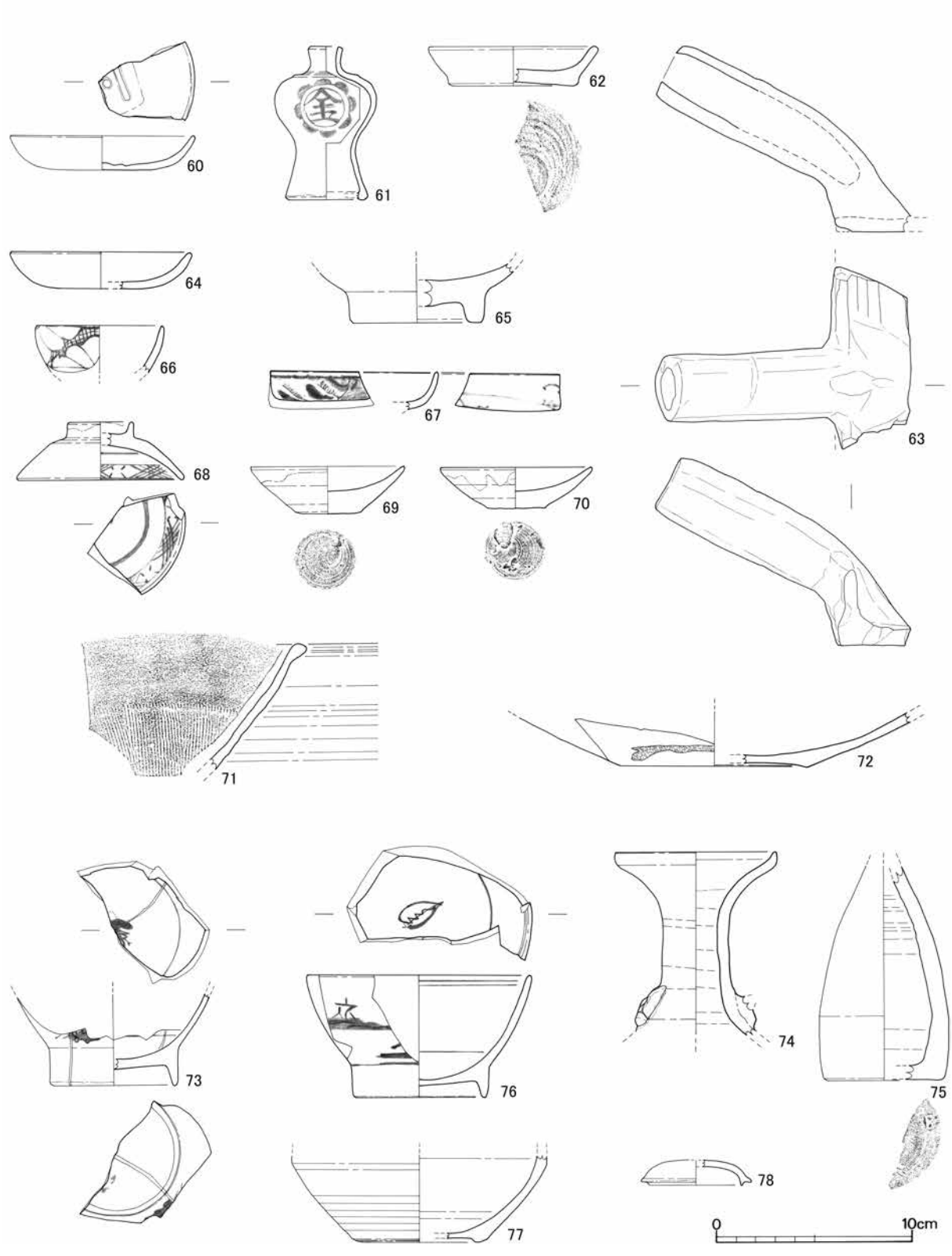


Fig.30　豊栄神社地点出土遺物実測図Ⅰ（Ｓ＝１／３）

層～第７層までと、第８層以下では堆積状況が異なっており、段階的な造成が行われた可能性がある。

14 T（Fig.25・26）

14 Tは、本殿の北側で造成面の有無及びその傾斜を確認するために南北方向に設定したトレンチで、幅約 30cm、長さ 1.8 mである。

掘り下げを行うと、表土下には洪水層と考えられる黄褐色土（第２層）が堆積しており、その下層で硬化面が検出され、本殿造成時の整地面と推定された。この硬化面上には薄く黒褐色土（第４層）が堆積しており、洪水までに堆積した層と考えられる。

トレンチ南側の整地面上では、本殿からの雨滴により出来たと推定される幅約 10cm の溝も検出された。

第３項　出土遺物（Fig.30 ～ 33）

出土した遺物は、ほとんどが洪水層から出土したもので、遺構面に伴うものは出土していない。

その中でも、76 の肥前磁器広東碗は 12 Tの造成土中から出土しており、造成年代を 1780 年以降に求めることができる。

その他の肥前系の磁器では、碗（66・73・76）、皿（67）、蓋（68・78）、瓶（74）がある。若干の年代差はあるものの、概ね 18 世紀以降の年代観で、長安寺であった頃の製品である。66 は丸碗としたが、大きさ等から仏飯器の可能性もある。67 の皿は 18 世紀以降に出現する器形である。73・76 はいずれも広東碗で、73 には焼継の痕跡がみられる。68 は外青磁の蓋で、今回出土した陶磁器の中ではやや古様相を示し、18 世紀中頃と思われる。74 の青磁瓶は花生と思われ、長安寺で使用されていた可能性が高い。

在地系の陶器は、皿（60・69・70）、瓶（77）、すり鉢（71）、鍋（72）、十能（63）がある。60 は石見焼系の皿であるが、見込みに陽刻が見られ、全容は不明ながら毛利氏家紋である「一文字に三ツ星」と思われる。したがって、豊栄神社成立後に特別にしつらえられた可能性が高い。69・70 の皿も石見系陶器で内面は施釉されているが、外底部は露胎で、底面は糸切り痕を残す。お神酒用の皿と考えられ、豊栄神社期のものと考えられる。71 のすり鉢も石見系で、幕末から近代にかけてのものと思われる。77 も石見系陶器で、上部は欠損しているが、内面の釉薬にムラがみられ、小型の壺か瓶と考えられる。72 は底面に煤が付着しており、鍋と考えられる。19 世紀代の資料である。63 は石見系の十能の把手で、来待釉がかかる厚手の製品である。

その他の陶磁器では、備前の徳利（75）や産地不明の徳利（61）がある。61 は表採資料で、お神酒用の徳利である。近年まで使用されていた可能性がある。また、65 は青磁であるが、胎土や釉薬、形態などから中国産の可能性がある。しかし、仮に中国産の青磁であれば、他の遺物とは時期的に大きな隔たりがあり、検討を要する。

79 ～ 89 はいずれも３Tから出土した瓦で、洪水により土石流とともに埋没したものと考えられる。いずれも来待釉のかかった赤瓦で、79 ～ 84 が軒瓦、85 が鳥衾、86 ～ 89 が軒丸瓦である。79 は瓦当に「一」字を入れており、毛利家家紋を簡略化したものと考えられる。80 は完形で、瓦当面に毛利家家紋は無いが、79 の瓦当文様とは同笵と思われる。瓦当は中央飾りが蓮弁と思われる簡略化した５枚の花弁で、左右に唐草文が二転し、子葉が付く。瓦当面左に直径約１cm の穿孔がある。81・82 は家紋の有無は不明であるが、79・80 と同笵と考えられる。83・84 はいずれも中央飾りに簡略化した桐文を配し、左右に唐草文が付く。83 に比べ、84 の方が簡略化が進んでおり、84 が 83 に後出する可能性がある。

85 は鳥衾で、瓦当面に毛利家家紋が入る。86 ～ 89 は軒丸瓦で、86・87 には瓦当面に毛利家家紋がある。88・89 は巴文であるが、周囲に配された文珠の数に違いがある。88 は一部欠損しているものの、文珠の数は９個と推定され、89 は 14 個である。出土した軒丸瓦はいずれも中付で、86 は中付部に線刻による刻み模様が施されている。

90 ～ 95 は現存建物に使用されている瓦で、出土資料ではないが、出土瓦を考察する上で重要と考え参考資料として掲載する。90 は本殿に葺かれている瓦である。瓦当面の文様は５弁の花弁と唐草文で、毛利家の家紋が入る。文様的には 79 の資料と同じであるが、釉薬に黒い釉薬が使用されている。91・92 は拝殿に葺かれている瓦で、92 は 79 と同じである。92 は左桟瓦で、瓦当面の文様も 79・92 とは違っている。

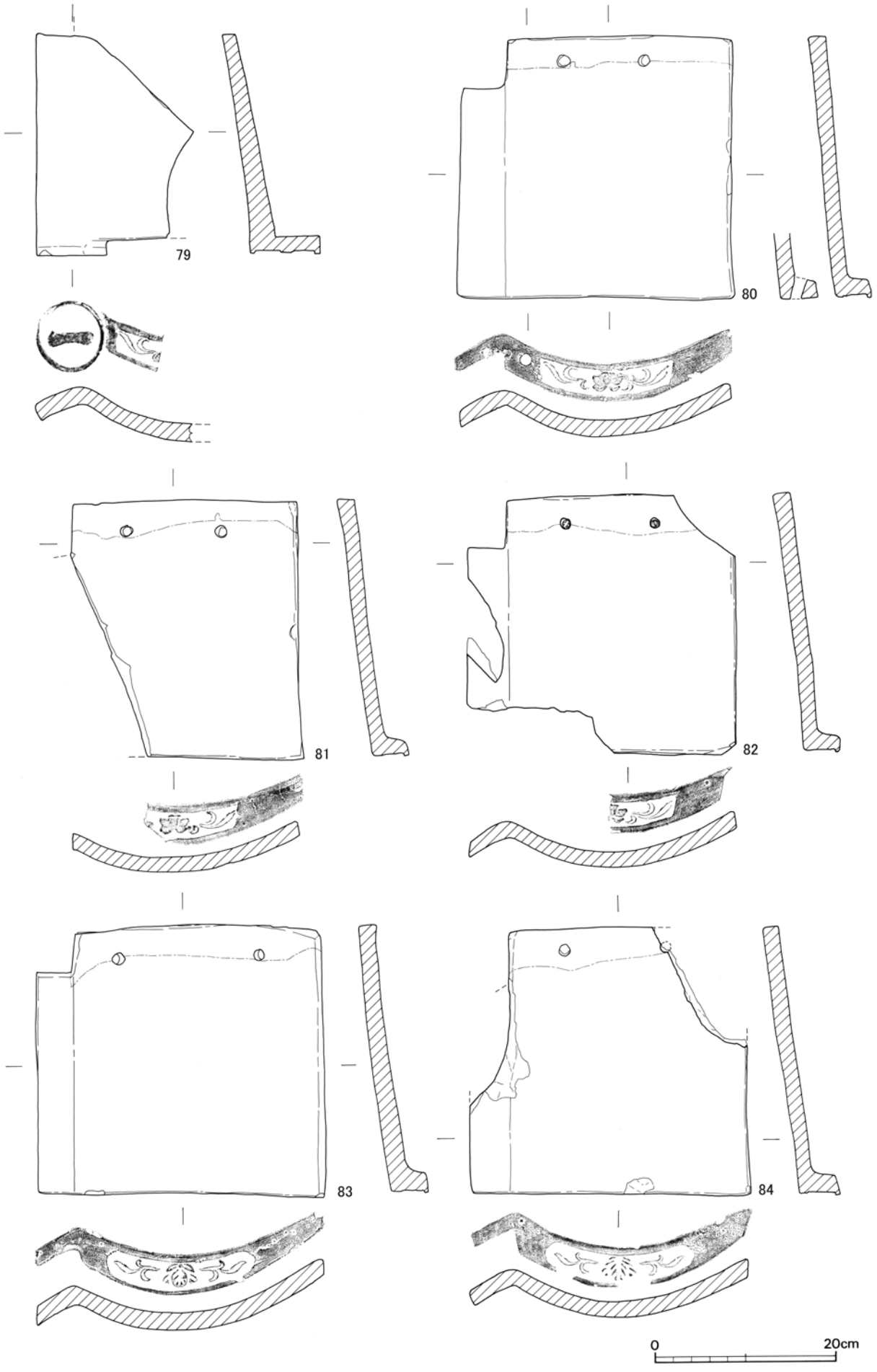


Fig.31　豊栄神社地点出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／6）

93 は随身門に葺かれている瓦である。毛利家の家紋が入るが、本殿や拝殿所用の瓦とは文字や縁の太さが違っている。瓦当面の文様も他とは異なっている。本資料は隅瓦で、瓦当面の欠損部分には毛利家家紋があったと考えられる。94・95 は土塀の所用瓦で、いずれも毛利家家紋は無く、94 は簡略化した花弁に唐草文が付く。随身門から延びる土塀に使われている瓦の大半はこのタイプで、当初の瓦と推定される。

第３節　小結

豊栄神社地点の調査は、当初の計画と比べてかなり大規模なものとなった。

調査の結果、昭和 18 年の水害層は境内地の全面に及んでいることが明らかとなり、境内の南側ほどより厚く堆積していることが判明した。また、水害後の復旧作業については、流入した土砂の大半は除去せず、参道部分のみ除去を行った痕跡が残り、このことにより、現在参道周囲の地盤が参道面より高くなるに至った経緯が明らかとなった。

復旧作業では本殿及び、拝殿周辺は土砂を全て除去しないまま水平に整地した状況も窺え、災害復旧は限定的であった状況も判明した。

流入した土砂内には倒壊した石材がそのままの状態で放置されており、境内の南北に集積された石材については、土砂上に散乱していたものに限って行われたことも推定された。

また、境内南側に設定した５Ｔでは玉垣の基礎石が検出され、境内地の規模及び、構造が明らかとなった。

さらに、１Ｔ～３Ｔでは石組みの溝が検出され、水害後忘れ去られていた大溝の存在が明らかとなったことは、調査の大きな成果である。

こうした成果により、神社の造営当初の境内地の様相、遺構配置なども推定できるようになり、神社復元の貴重な基礎資料が得られた。

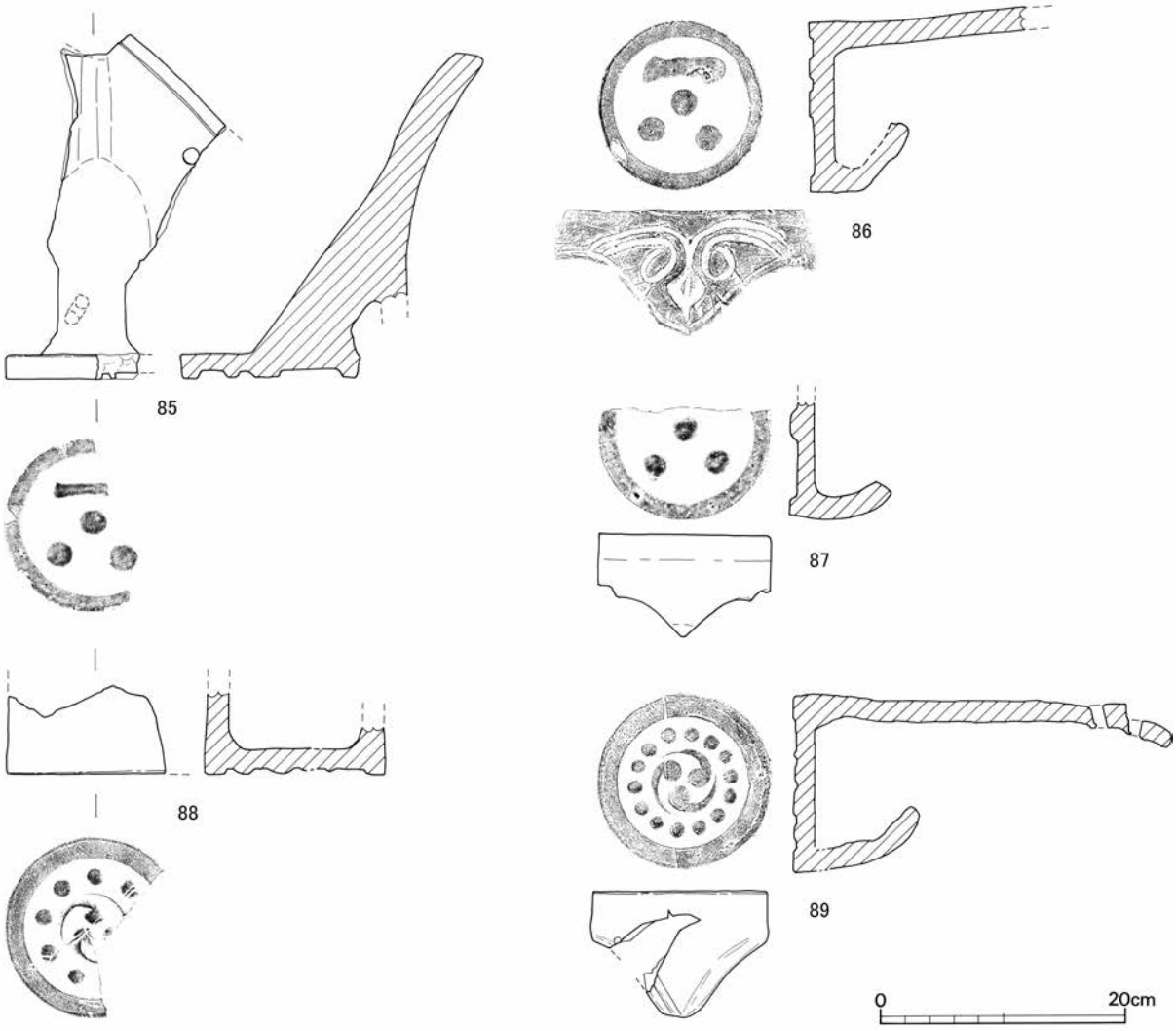


Fig.32　豊栄神社地点出土遺物実測図Ⅲ（Ｓ＝１／６）

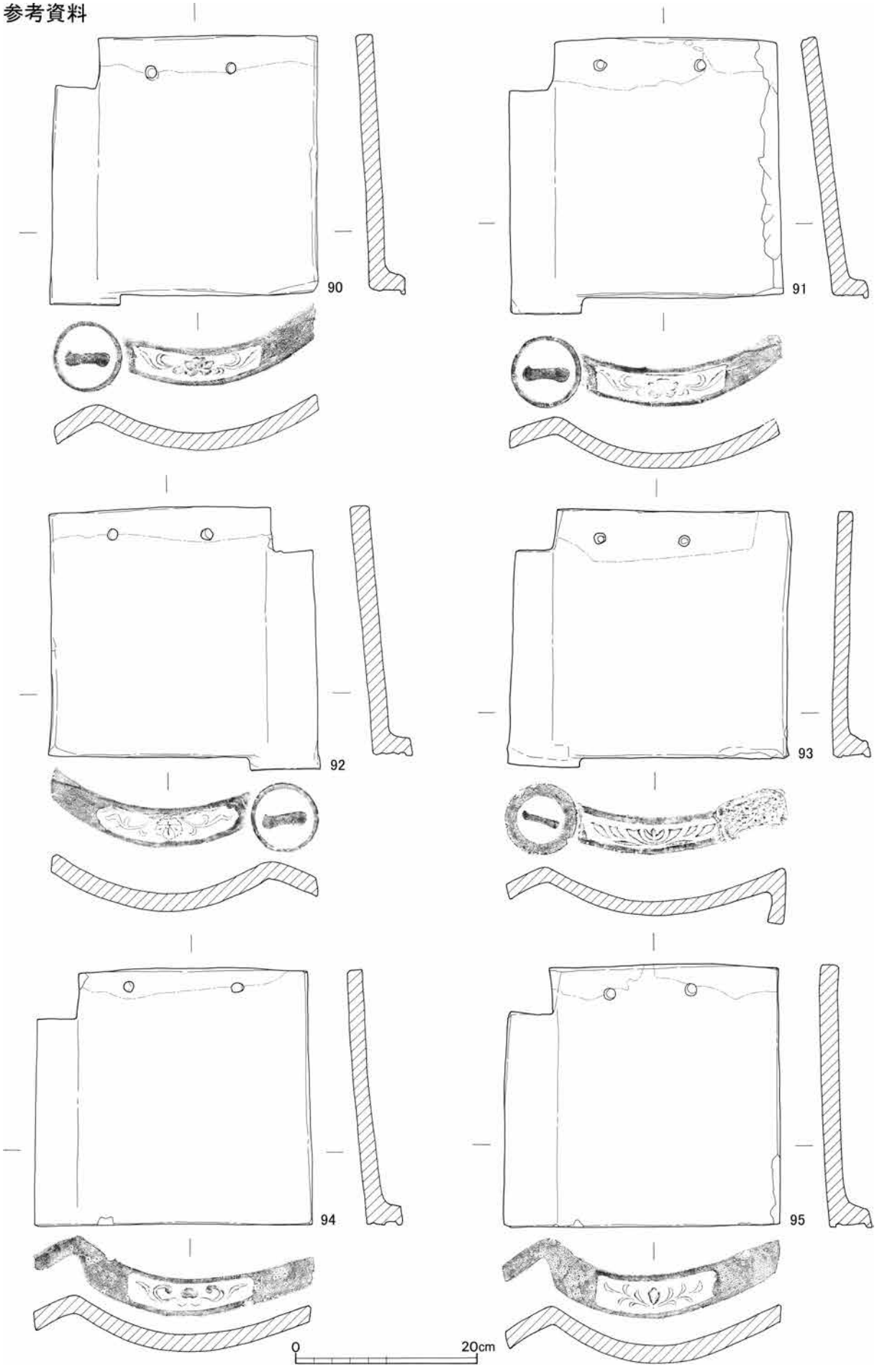


Fig.33　豊栄神社地点採集遺物実測図（S＝1／6）

Tab.5　豊栄神社地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ（cm）			色　調	成形・調整・文様	備 考
				口径	器高	底径			
60	本殿奥溝埋土	石見系陶器	皿	(9.2)	1.8	(4.6)	長石釉	毛利の家紋か	
61	本殿奥溝表採	不明磁器	瓶	1.5	7.8	(3.7)	透明釉		
62	2 T	土師質土器	皿	(8.4)	2.0	(6.0)	にぶい黄橙色		
63	2 T	在地系陶器	十能	現存長 9.3	現存幅 13.0	現存厚 9.5	来待釉		
64	3 T	土師質土器	皿	(9.0)	1.9	(3.9)	浅黄橙色		
65	3 T底面付近	青磁	碗		(3.0)	(6.5)	青磁釉		須佐かも
66	3 T	肥前磁器	仏飯器	(6.3)	(2.4)		透明釉		18c 後半
67	3 T	肥前磁器	皿		(1.9)		透明釉		18c 後半
68	3 T	肥前磁器	蓋	(8.2)	3.0	つまみ径 (3.2)	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	青磁染付	18c 後半
69	3 T	石見系陶器	皿	7.8	2.4	3.0	長石釉		
70	3 T	石見系陶器	皿	7.6	2.1	3.0	長石釉		
71	3 T	石見系陶器	すり鉢		(6.3)		褐釉		
72	3 T上層	在地系陶器	平鍋		(2.8)	(9.5)	サビ釉		
73	7 T	肥前系磁器	碗		(4.6)	(6.2)	透明釉	焼継	
74	8 T	肥前磁器	瓶（花生）	(8.0)	(9.3)		青磁釉		18c
75	8 T	備前	徳利		(10.9)	(5.6)	明赤褐色		
76	12 T 6 層	肥前系磁器	碗		(5.1)	(6.5)	透明釉		
77	9 T 2 層	石見系陶器	壺か瓶蓋		(4.4)	(5.9)	長石釉		1780－1810
78	10 T	肥前磁器	蓋	4.7	(1.3)		透明釉		17c 後半～18c 前半
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ（cm）			重量（g）	色　調	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
79	3 T	瓦	軒瓦	24.5	17.3	10.8	1980	来待釉	
80	3 T	瓦	軒瓦	29.2	31.8	7.0	3490	来待釉	
81	3 T	瓦	軒瓦	28.3	25.7	7.9	2440	来待釉	
82	3 T	瓦	軒瓦	28.5	29.7	7.7	2750	来待釉	
83	3 T	瓦	軒瓦	29.7	31.8	7.7	3970	来待釉	
84	3 T	瓦	軒瓦	29.4	31.1	8.5	2920	来待釉	
85	3 T	瓦	鳥衾	28.1	18.0	24.8	1640	来待釉	
86	3 T	瓦	軒丸瓦	17.7	13.3	15.1	1585	来待釉	
87	3 T	瓦	軒丸瓦	8.3	14.1	9.5	605	来待釉	
88	3 T	瓦	軒丸瓦	7.1	13.0	14.8	785	来待釉	
89	3 T	瓦	軒丸瓦	30.8	14.4	14.5	2740	来待釉	
90	本殿所用	瓦	軒瓦	29.8	29.8	5.2	3820	黒釉	
91	拝殿所用	瓦	軒瓦	30.7	30.1	7.5	3730	来待釉	
92	拝殿所用	瓦	軒瓦	29.2	30.0	6.7	4050	来待釉	
93	随身門所用	瓦	軒隅瓦	28.4	31.4	6.2	3390	来待釉	
94	土塀所用	瓦	軒瓦	28.6	30.9	6.3	3550	来待釉	
95	土塀所用	瓦	軒瓦	29.0	30.6	5.8	3900	来待釉	

第５章　本年度の試掘・立会調査

第１節　平成 27 年度の調査地点

伝統的建造物群保存地区内や世界遺産指定範囲内において、地表面の掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には、随時立会・試掘調査を実施している。本年度は、立会調査を大森伝統的建造物群保存地区内の竹之内家地点、加藤家地点、大森さくら保育園地点の計３か所で行ない、試掘調査を世界遺産指定範囲内の上市恵比須社地点で実施した。調査地点は Fig.15・34・35 のとおりである。

第２節　上市恵比須社地点の試掘調査

調査地は大田市温泉津町西田に所在する。西田地区は大森町から温泉津町まで延びる石見銀山街道温泉津沖泊道のほぼ中央に当たり、湯里川の河岸段丘上の道路に沿ってできた街村で、宿場町として栄えた町である。集落の成立年代は明らかとなっていないが、大内義興が矢滝城山に城塞を築いたとされる享禄元（1528）年頃に軍兵相手の商人が営業を始めたと推定されている（多田・明楽 1996）。近世においては毎

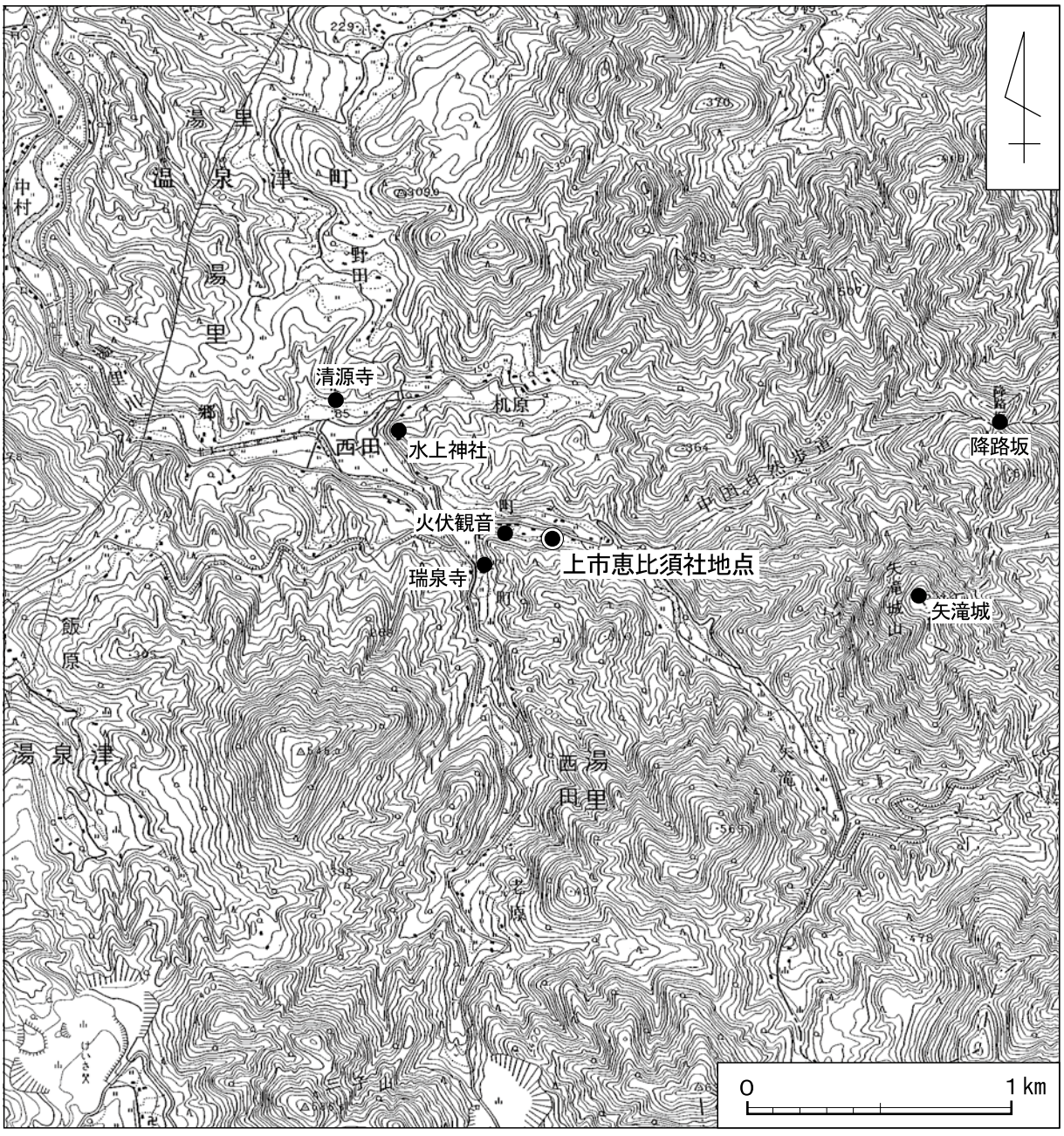


Fig.34　上市恵比須社地点位置図（S ＝ 1 ／ 25,000）

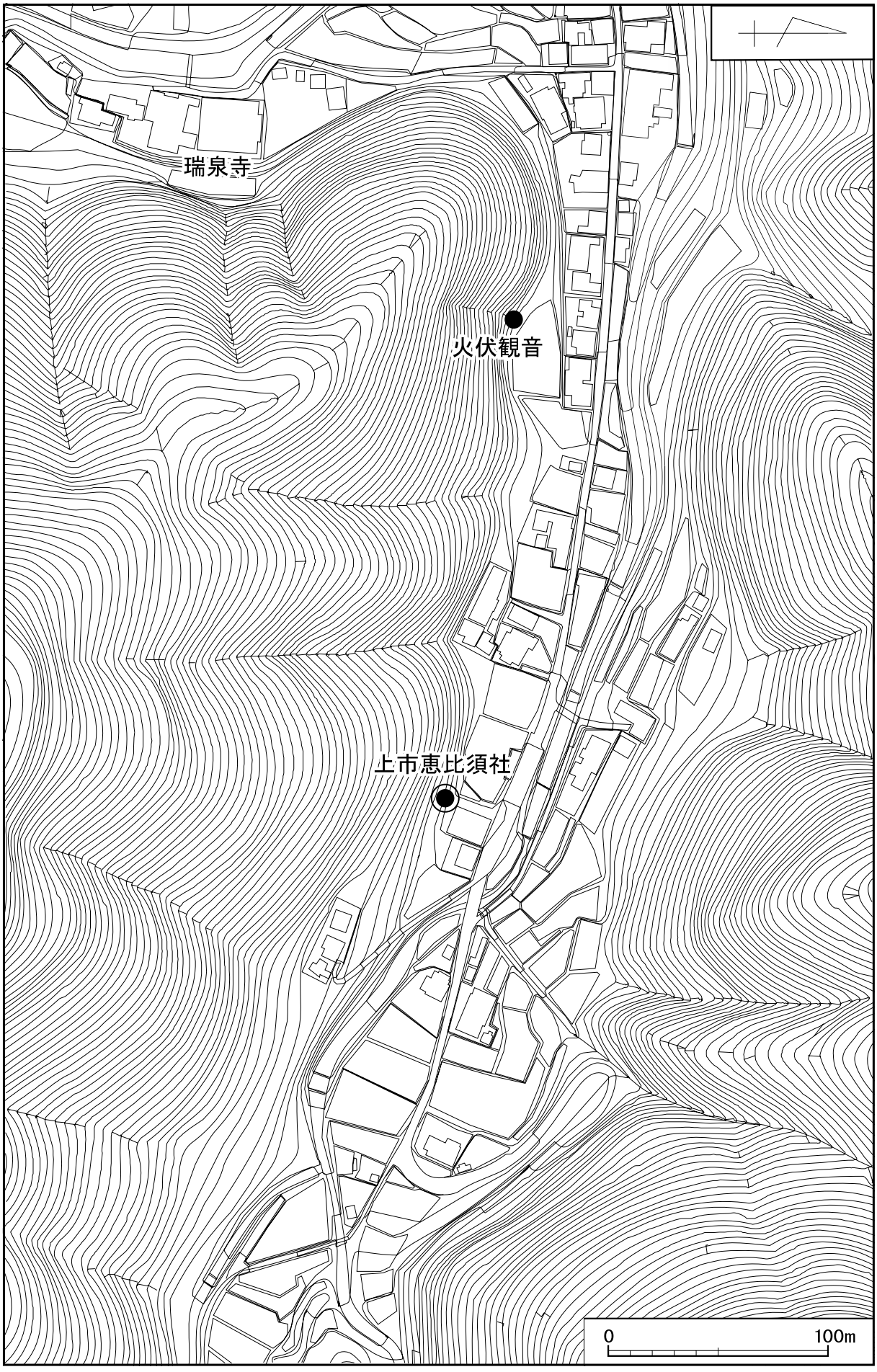


Fig.35　上市恵比須社地点周辺地形図（S＝1／2,500）

年７月と 12 月に定期市が開かれていたといわれ、現在も残る「上市」「中市」の地名に当時の繁盛の名残りが見られる。

上市恵比須社は現在の県道 201 号線沿いで、西田の集落の東端部で降路坂に近い場所に位置する。岩盤の上に建てられた社とされ、地域の人々の信仰を集める神社である。上市恵比須社の社建替に当たって基礎部分を掘り下げる必要が発生したため、それに先立って平成 28（2016）年１月８日に試掘調査を実施した。

試掘調査では、社が立っていた周辺を整備し、一部を掘下げて岩盤を露出させた。その結果、地表面上では東西の端部に礫を並べて土止めとしていることが明らかとなった。また、東西方向に設定した断面では、岩盤が南に向かって傾斜しており、その隙間に礫や砂質土を詰めて平坦面としていることが確認できた。調査の結果、上市恵比須社が建てられているのは、岩盤ではなく巨大な転石であることが判明した。なお、遺物は出土しなかった。

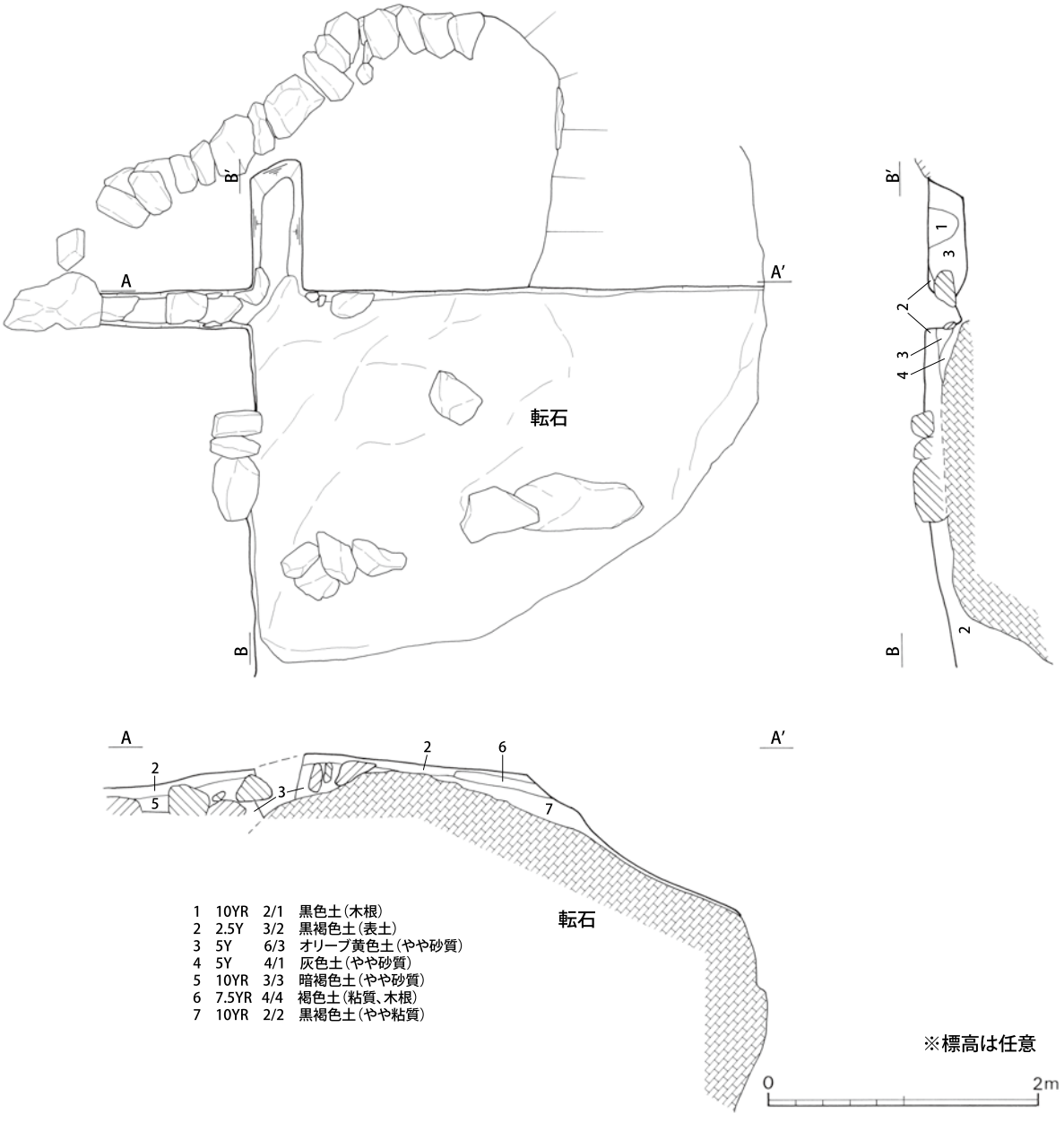


Fig.36　上市恵比須社地点平面図・断面図（S＝１／40）

第６章　総括

第１節　昆布山谷地区

第１項　第５地点

第５地点は昨年度より引き続いての調査となった。今年度は昨年度の発掘調査で検出されていたＳＸ02の東側にトレンチを設定して調査を実施した。発掘調査により、ＳＸ02の最下部と北端部を除いてほぼ全体の様相が明らかとなった。ＳＸ02に加工された遺構にも時期差があり、南端部の階段状遺構③はＳＸ02の利用開始時期から加工されているが、階段状遺構①は第１遺構面が形成された18世紀後半以降に加工されたとみられる。また、昨年度の調査によって堆積状況が把握できていたこともあり、各整地面を平面的に調査できた。第２面では明確な遺構は検出されなかったが、礎石の可能性のある礫が１点検出されており、調査範囲を広げた際の成果が期待される。第３遺構面では一部にユリカスの廃棄が認められた。第１面では製錬活動に関わる遺構・遺物は見つかっていないため、造成の前後では土地の利用方法が変化している可能性がある。

トレンチの下層で検出されたＳＸ17～19は、その検出状況や埋土からの出土遺物より、炉跡である可能性が高い。第３遺構面の時期には、ＳＸ17～19が検出されたほかに何度も整地を行なった痕跡が見られるなど、活発な利用が想定される。しかし、本年度は調査範囲が限られているため評価を保留し、来年度調査面積を広げた上で遺構の様相などを明らかとしていきたい。

第２項　第６・７地点

第６・７地点は本年度新たに設定した調査地点である。本年度は遺構確認のための測量調査を実施した。調査によって岩盤加工遺構と平坦面が検出された。第７地点で検出されたＳＸ22はＳＸ21の一部を切り込んで加工されているなど、時期差があることも確認できた。また、ＳＸ21とＳＸ22は現在の山道からやや離れた場所に位置しているが、道の位置が変わっているのかどうか今後検討する必要がある。

第６・７地点のちょうど中間で検出されたＳＸ23は壁面や隅を他の遺構では見られないほど丁寧に整形していることや、奥壁に意図を持って文字もしくは記号を掘り込んでいることなど、これまで本谷地区や昆布山谷地区で検出されてきた岩盤加工遺構には見られない特徴を持っている。検出例のない遺構であるため、現状では評価を保留し、類例を待ちたい。

第２節　宗岡家地点

平成26年度に引き続き発掘調査を実施した。平成27年度は宗岡家の敷地内でも南側で、主屋と離れに面した庭を第Ⅴ区として発掘調査を実施した。第Ⅴ区では宗岡家の庭に関連する遺構は検出されなかったが、調査区内に設定したサブトレンチ①によって主屋基礎の構築状況が明らかとなったほか、下層確認トレンチでは土地の利用方法や成因、地割の変遷などが窺われる遺構が検出された。

下層確認トレンチでは多くの硬化面や造成の痕跡が確認され、宗岡家地点の南部は江戸時代初期から幕末に至るまでに活発に利用されていたことを示す資料が得られた。ただし、下層確認トレンチを設定した範囲は元々山本家の敷地であるため、それらの利用痕跡は宗岡家や阿部家とは無関係である。また、地表面より約1.1ｍ下位では敷地境とみられるＳＷ02が検出された。ＳＷ02は検出された前後の堆積層に含まれる遺物から、江戸時代初期の遺構とみられる。ＳＷ02の検出位置は宗岡家住宅が建つより前にこの敷地を所有していた福本家と山本家の敷地境とも異なっていることから、江戸時代初期から幕末に至るまでに地割が変わっている可能性が高い。また、下層確認トレンチの最下部では硬化面と木片の含まれる層が交互に堆積している部分もあり、道として利用されていたことも想定される。

サブトレンチ①は第Ⅴｂ区西部に幅30cm程度で南北方向に設定した。サブトレンチ①では、主屋から2.4ｍまでの北半部とそれよりも南の南半部では堆積状況が大きく異なることが確認された。北半部においては分厚い堆積層が確認され、その一部を掘り込んで

主屋の基礎を置き、周囲を礫交じりの埋土で固めていた。南半部では下層確認トレンチと同様に複数の硬化面が検出され、整地や床面の張替など地表面の活発な利用が想定される状態であった。

平成 26 年度の調査では、宗岡家住宅の主屋と土蔵が建てられた際に造成が行われたことが確認されていたが、サブトレンチ①北半部で確認された主屋付近の造成土も宗岡家住宅が建てられた際のものとみられる。サブトレンチ①南半部や下層確認トレンチではそのような造成の痕跡は確認できなかったことから、宗岡家住宅建築時の造成は主屋と土蔵付近までしかなされていなかった可能性が高い。先にも触れたように、宗岡家の敷地は山本内蔵太の敷地の一部と福本乙兵衛の敷地を合わせて現在の鍵型になっている。宗岡家住宅の元々の所有者である阿部半蔵が福本家より土地を質入れされて主屋や土蔵を立てた際には、山本家の敷地はまだ購入していなかったため、造成がされなかった可能性が考えられる。

平成 27 年度の発掘調査により、宗岡家地点の東西方向における土層の堆積状態が窺える状態となった。平成 18（2006）年度の発掘調査では敷地内の西部に設定したトレンチにより、宗岡家の庭に関連する遺構が検出されていたほか、江戸時代初期の堆積層から遺構・遺物が見つかっていた。平成 26 年度の発掘調査では敷地内の東部に下層確認トレンチを設定し、宗岡家住宅の建てられる際に造成が行われており、それ以前は河川による自然堆積によって地形が形成されていることが明らかとなっていた。

今年度の発掘調査では敷地内南部に設定した下層確認トレンチと、Ｖｂ区に設定したサブトレンチ①により、宗岡家の主屋付近と、敷地内南部で利用状況が異なることが確認できた。特に、下層確認トレンチにおいては地表面の整地や張替などの活発な利用が想定できる状態であった。一方で、出土遺物としては江戸時代初期頃と幕末頃のものが中心で、江戸時代中期頃のものはほとんど出土しなかった。このことは平成 18 年や平成 26 年の調査においても同様であった。以上のことから、敷地内の利用頻度には時期差があり、江戸時代初期頃や幕末頃には活発に利用されていたが、江戸時代中期頃は比較的安定していたことと、敷地の東側は元々川原に近い場所であったが、宗岡家住宅を建てる際に造成されて宅地を拡げていたことの２点が想定される。

第３節　豊栄神社地点

豊栄神社地点では、トレンチ調査にも関わらず、多くの成果が得られた。ここでは項目ごとに調査成果を整理し、若干の考察を加えたい。

①洪水の実態

豊栄神社は昭和 18（1943）年の水害で大きな被害を受け、その後本格的な復旧が行われないまま現在に至っていることは本文中で触れたが、その実態も推定できるようになった。

洪水層は南側においてより厚く堆積していることが判明し、７Ｔ、８Ｔでは灯篭と共に玉垣の石材も多数埋没していることも明らかとなった。また、現存する建造物では、土塀や玉垣は北東側の一部が残存し、灯篭も境内の北東側のものが残っている。このことから、洪水の土石流は南西方向から押し寄せ、南西側の土塀と玉垣、灯篭を押し流し、ＳＤ 01 をも一気に埋没させたと推測される。ＳＤ 01 内に転落している巨石を見ると、土石流の威力がいかに大きかったが推測できるが、土塀にぶつかったことにより流速が弱まり、主要建物の流失には至らなかった可能性が考えられる。

また、９Ｔや 10 Ｔでは加工された石材がほとんど検出されなかったことから、流失した石材は大半が随身門の西側までで留まっている可能性が高い。

②境内の様相

現在ほとんどが流失している玉垣については、拝殿の段を取り囲むように拝殿裏まで存在していたことが明らかとなった。

本殿と拝殿間の構造については、石垣前に幅約 1.3 ｍの石組みの大溝が存在し、この溝により両者が完全に遮断されていることも判明した。溝の西側には底から約２ｍの石垣が築かれ、石垣上には土塀が築かれている。

この土塀は本殿の周囲を取り囲み、本殿の段は周辺からは容易に進入できない隔絶された空間であったことも明らかとなった。

拝殿裏側には、本殿に向かう幅約２ｍの石段が存

在するが、最下段のみ約 1.8 mと狭くなっており、この部分に本殿と拝殿間通路となる橋が架けられていたものと推測される。

拝殿の北側には玉垣が巡ることが判明したが、その北側には約 40cm の段差があり、拝殿側が一段高くなっている構造も明らかとなった。

また、随身門から延びる土塀については北側に約 1.2 mの切れ目が存在することも明らかとなった。この部分の構造については、北側に社家の居宅が存在することから、両者を行き来する通用口的な施設が存在していたことが推定される。

現在の地盤は、拝殿周囲の石敷きとほぼ同じ高さであるが､洪水前の地盤はこれらより 10cm 程度は低く、石敷きの方が一段高い構造となっていたことも明らかとなった。

随身門から前側の状況については､遠景ではあるが、明治から大正の頃と思われる古写真が残っている。洪水前の状況を知る貴重な資料で、これを見ると随身門から前の参道には石畳が無く、南側部分も高くなっていないことが判り、 9 ・10 Ｔの調査成果と一致する。拝殿から奥についてはほとんど写っていないが、現在は失われている随身門から南に延びる土塀なども確認することができる。

③石垣

調査で検出したＳＤ 01 は緻密に石を組み合わせた石組みの溝であったが、同様の石垣は本殿裏や、随身門前の石垣でも確認できる。

石材はいずれも白色凝灰岩で、同一の石工によって構築されたものと推定される。石積みの方法等は本文中で述べた通り多角形の切石を組み合わせるが、基本的には成層積み（布積み）の範疇に入ると考えられる。見た目は亀甲積みを意識している可能性もある。

この石積みの特徴をまとめると、①石材を多角形に加工し、各石材が複数面で組み合うよう成層積みの工法で積み上げる。②各石材は緻密に接合され、表面加工は鑿で行われ、鑿痕を残すが、石材の周囲数 cm は幅広の鑿で丁寧に仕上げられる。

このような特徴に似た石垣は、大森町内では大森代官所、熊谷家住宅、旧井戸神社、藤田組火薬庫跡など、随所で散見される。これらの石垣は年代が判明しており、古い順に、文化 12（1815）年の大森代官所門長屋石垣、嘉永 3 （1850）年の熊谷家住宅護岸石垣、慶応 2 年～明治 3 (1866 ～ 1870) 年の豊栄神社石垣、明治 12 (1879) 年の旧井戸神社石垣､明治 20 (1887) 年の藤田組火薬庫跡の外壁石積みの順となる。

これらの石垣はいずれも白色凝灰岩を使用して積ま

豊栄神社古写真（明治から大正頃）

れており、研究が進めば、技術的な系譜をたどれる可能性がある。

この中で、豊栄神社石垣に最も似ているのは旧井戸神社石垣である。構築年代が近いことが理由として挙げられるが、同一の石工によるものと考えられる。

城上神社、羅漢寺など他にも類似性のある石垣はまだ存在しており、こうした石垣の基礎資料を蓄積することによって、当地域の石垣や、石造物の様相を解明する有効な手段となろう。

④豊栄神社所用瓦

調査によって、洪水時に流失したと考えられる瓦が出土している。中には、毛利家家紋が入るものも見られ、豊栄神社で用いられていた瓦と推定できる。

建物も慶応２（1866）年から明治３（1870）年までの間に建てられている事が判明しており、瓦についてもこのとき製作されたと考えられ、年代が特定できる数少ない事例になる。また、建物が現存しており、その所用瓦と比較検討することも可能である。

79 は拝殿の所用瓦と同笵で、本来は拝殿に葺かれていたと思われる。この文様構成の瓦が豊栄神社の主流の瓦と推定され、本殿でも釉薬は異なるものの同笵の瓦が使用されている。家紋の入っていない瓦は、土塀に使われていたと考えられ、わずかに現存する本殿廻りの土塀に同様の瓦が使われている。

随身門には、瓦当文様の異なる瓦が使用されており、建築された年代が、本殿･拝殿に数年遅れることから、瓦の発注先を変更したか、同じ業者でも意図的瓦当文様を変更したことが考えられる。

随身門に取り付く土塀には、94 の瓦が最も多く使われており、83・84・95 は修繕などで後世に補われた可能性が高い。また、この３種には家紋も入っておらず、大森町内において他の建物でも使用が確認されていることからも首肯されよう。

⑤造成から建物の建築

今回の調査で、拝殿はＳＤ 01 に後出することが明らかとなった。

長安寺には、本殿・拝殿とも慶応３（1867）年４月の棟札が残り、どちらも慶応３年に建立されたことがわかっている。

当初、石列を検出した段階では拝殿の下層に位置することから、前代の遺構の可能性も考慮したが、石列がＳＤ 01 と同一遺構と判断されるに至り、ＳＤ 01

大森代官所門長屋石垣

熊谷家住宅護岸石垣

旧井戸神社石垣

藤田組火薬庫跡

が石垣と一体となっており、豊栄神社境内を構成する遺構であることが明らかであるため、両者は極めて近い時間差であったと判断された。

すなわち、社殿建築にあったっては、造成を行い整地されたことが調査結果から明らかとなったが、まず造成工事の一環として、本殿・拝殿周辺の石垣、溝の整備が建築に先立って行われ、境内地の整備の後、本殿と拝殿の建築に取り掛かったとものと推定されるのである。

長州軍が大森を占拠したのが慶応２（1866）年７月であることから、占拠の直後から取り掛かったとしても、慶応３年４月までの短期間で境内地の造成から社殿の建築まで行ったことになる。

当時の長安寺の境内、建物の配置等は明らかとなっていないが、本堂は嘉永２（1849）年に焼失しており、この時期本堂再建を模索していることから、社殿は本堂とは別の位置に建築されたことが推測される。

随身門は明治元（1868）年に建築されており、主要な建物は毛利元就に「豊栄」の神号が授与される以前であることがわかる。

第４節　まとめ

本年度は昆布山谷地区第５・６・７地点、宗岡家地点、豊栄神社地点の３か所の発掘調査を実施した。昆布山谷地区においては第５・６・７地点のそれぞれで岩盤加工遺構が検出され、昆布山谷における鉱業活動の様相を探る重要な資料が得られた。また、第５地点においては昨年度の調査成果を元に一部を深く掘り下げて調査することによって、土地の利用開始時期や地形の形成に関わる情報を得られた。第６・７地で検出された岩盤加工遺構には、これまでの調査で検出されたものにはない特徴がみられ、来年度に計画している調査での成果が期待される。

宗岡家地点においては、当初期待されていた庭に関連する遺構は検出されなかったが、サブトレンチ①と下層確認トレンチによって、主屋基礎を据える際の掘り込みや、江戸時代初期から幕末に至るまでの土地区割の変遷に関わる遺構などが検出されるなどの成果が得られた。平成 18（2006）年と平成 26（2014）年に実施した調査によって敷地の東部と西部における土層堆積状態が明らかとなっており、本年度の調査で敷地内南部に設定した下層確認トレンチによって、敷地の東西方向の堆積状態が窺える状態となった。ただし、サブトレンチ①の南北断面によって、主屋近辺と主屋から南にやや離れた箇所では堆積状態が異なっていることが確認されたため、来年度の調査においてもトレンチによる下層確認を引き続き行う必要がある。

豊栄神社地点においては、本殿と拝殿を画す大溝や、玉垣の基礎石などの検出により、洪水前の境内地の様子がかなり詳細な部分まで復元可能となった。

また、各トレンチでは洪水層が検出され、災害後の復旧作業で堆積した土砂の除去がほとんど実施されないまま、本殿と拝殿周辺の整地が行われたこと、参道部分のみ土砂が除去されたことなどが明らかとなった。

また、全トレンチで災害前の地表面が確認されたことで、境内地整備の基礎資料も得ることができた。ただ、洪水層内には灯篭や玉垣の石材などが多数残されていることも判明し、整備に当たって、今後の対応が新たな問題として提示される結果となった。

平成 22（2010）年度の石見銀山調査活用委員会の場において、調査面積を必要最小限として遺構の損壊を控えてきたそれまでの調査方法に対して、調査の目的を明確にした上で、その手段としての発掘調査方法について「さらに広く、深く」掘ることで目的に沿った成果が期待されることが指摘されていた。平成 26 年度と平成 27 年度は「上層で検出された遺構への影響を最小限とした上で深く掘り下げる」ための調査方法を検討し、調査を実施した。具体的な方法としては、まず調査面積を広く設定して遺構の広がりを確認し、その成果を元にトレンチを設定して深く掘り下げることとした。トレンチは、調査範囲内で遺構が検出されなかった部分や、深く掘り下げることで遺構の様相をより明らかとすることが見込まれる部分に設定することとした。その成果はこれまで報告したとおりであるが、昆布山谷地区第５地点においては 17 世紀前半には利用が始まり、幕末・近代にいたるまでに整地や造成によって地形や景観を変えながら断続的に利用されていたことが明らかとなった。宗岡家地点においては主屋と土蔵を建てた際に造成が行われたことが判明したほか、江戸時代初期から幕末にかけて造成や整地が

何度も行われ、時期によっては宅地境が変わることもあったことが明らかとなった。いずれも石見銀山における往時の生活の様相や土地利用の在り方、景観の変遷を考える上で重要な成果といえる。

これまでの調査では石見銀山の開発が始まったとされる16世紀初頭頃の遺構検出には至っていないが、その足がかりは得られたとみてよいであろう。平成28年度以降の調査でも調査状況を見極めながら保存に留意しつつ、「さらに広く、深く」掘る調査方法を採用する方向は継続し、目的に沿った成果が得られるよう調査の進展を図りたい。

引用・参考文献

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第1冊【遺跡の概要】

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第2冊【発掘調査・科学調査編】

島根県教育委員会 2004『石見銀山街道　鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』

島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ

中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

中田健一・新川　隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会・大田市教育委員会

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000 ～ 2004『石見銀山遺跡発掘調査概要』10 ～ 14

大田市教育委員会 2006 ～ 2015『石見銀山遺跡発掘調査概要』15 ～ 23

新川　隆 2013『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史　別編　窯業2　中世・近世　瀬戸系』

江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 1994『古伊万里の文様　初期肥前磁器を中心に』理工学社

小野正敏「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　1982

尾村　勝 2014「石見銀山遺跡昆布山谷地区の土地利用の変遷－文献史料と分布調査成果からみる－」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4　島根県教育委員会・大田市教育委員会

古泉弘 1987『江戸の考古学』考古学ライブラリー48　ニュー・サイエンス社

嶋谷和彦 1994「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭−出土銭の調査と分類』兵庫県埋蔵銭調査会

多田房明・明楽文教 1996「第二章　道の確定と現状　一、温泉津町」『歴史の道調査報告書　銀山街道』島根県歴史の道調査報告書第三集　島根県教育委員会

西尾克己 2013「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について（1）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』3　島根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己 2014「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について（2）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4　島根県教育委員会・大田市教育委員会

西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽　日本のこころ63　平凡社

藤澤良祐 1993「瀬戸美濃大窯の編年」『瀬戸市史　陶磁史編　四』瀬戸市史編纂委員会

守岡正司・新川　隆 2011「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』Ⅰ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

目次謙一 2002「石見銀山遺跡の出土無文銭について」『石見銀山 - 石見銀山関係論集』島根県教育委員会

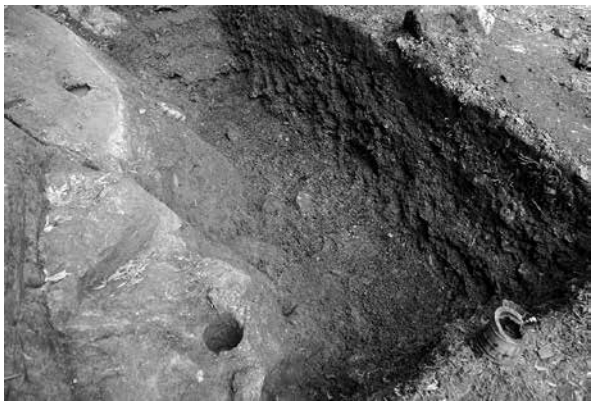
矢野健太郎 2014「豊栄神社の成立をめぐって」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4　島根県教育委員会・大田市教育委員会

図　　版

昆布山谷地区第５地点　調査前全景（東より）

同　ＳＸ 02 全景（東より）

ＰＬ．２

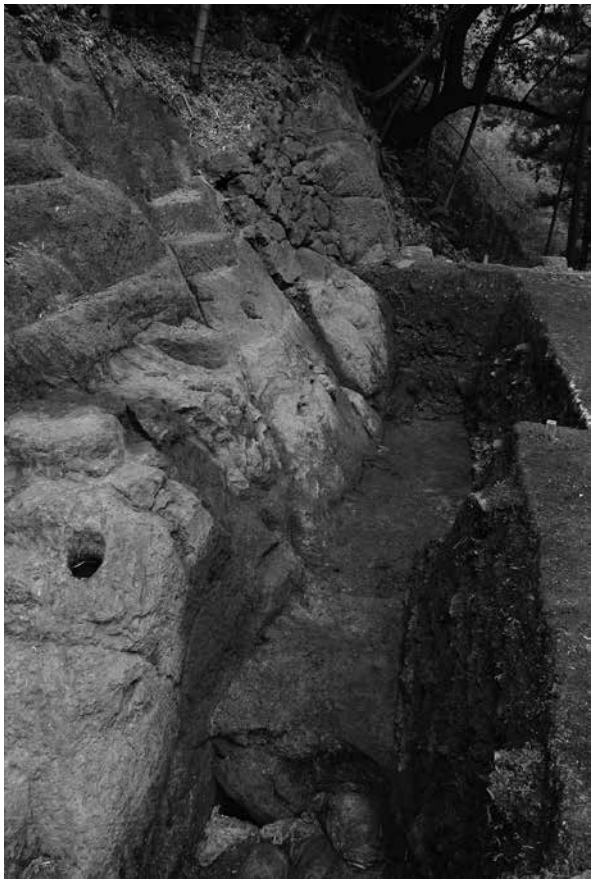


昆布山谷地区第５地点　第２面検出状況（南西より）

同　第３面検出状況（南西より）

同　第２・３面検出状況（西より）

同　第３面検出状況（西より）



同　第３面検出状況（南西より）

同　第３遺構面下面検出状況（南西より）

昆布山谷地区第５地点　ＳＤ 02-②検出状況（北西より）

同　ＳＤ 02-②蓋石検出状況（北西より）

同　ＳＤ 02-②ベルト上面（北東より）

同　ＳＤ 02-②ベルト断面（北西より）

ＰＬ．４

昆布山谷地区第５地点　ＳＸ 18・19 検出状況（北東より）

同　ＳＸ 17 半截断面（南西より）

同　ＳＸ 18 半截断面（南西より）

同　ＳＸ 19 検出状況（南西より）

同　ＳＸ 19 半截断面（南西より）

昆布山谷地区第５地点　東壁断面（南より）

同　東壁断面北半（南より）

同　北壁断面（南東より）

同　東壁断面硬化面（西より）

同　東壁断面ユリカス堆積部分（北西より）

ＰＬ．６

昆布山谷地区第６地点　ＳＸ 20 全景（北東より）

同　ＳＸ 20 階段状遺構（南東より）

昆布山谷地区第７地点　ＳＸ 21・22 全景（南東より）

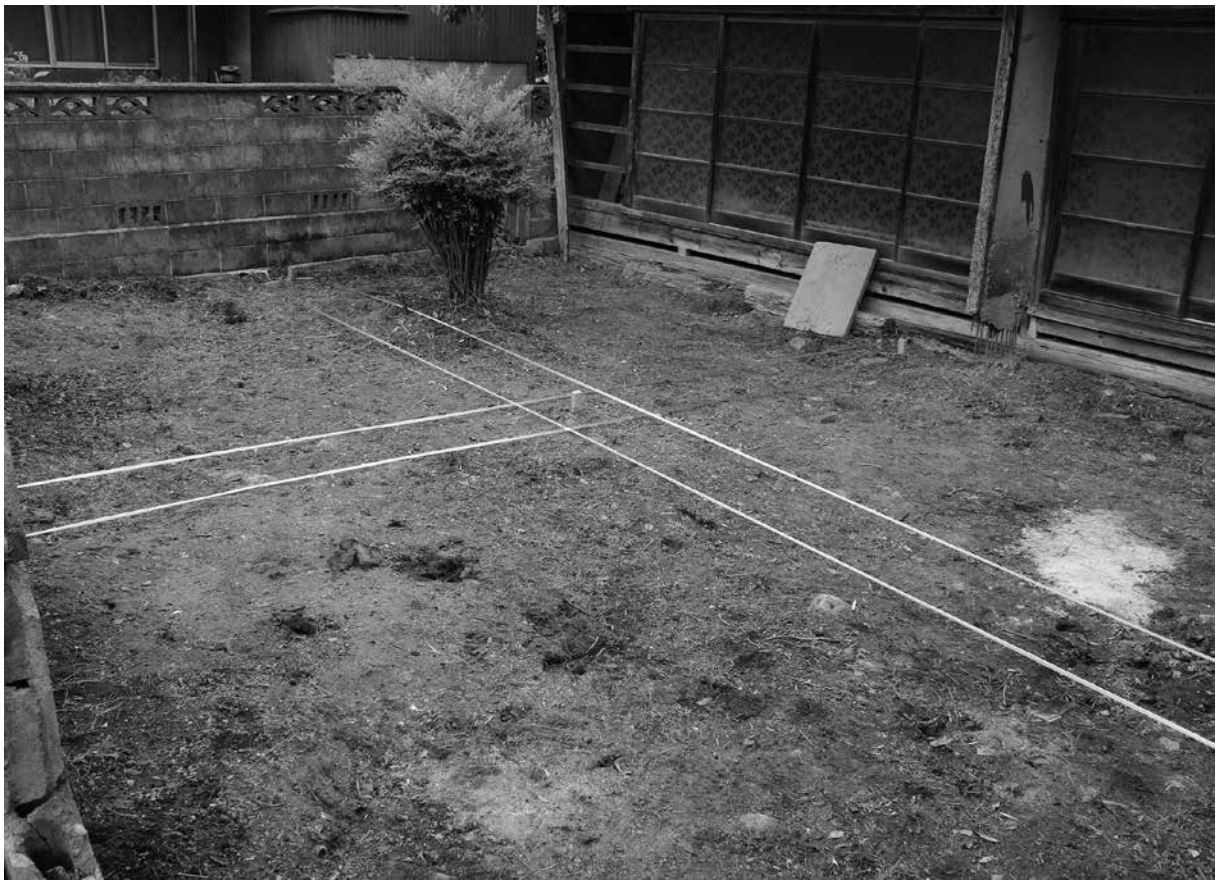
同　ＳＸ 22・23 全景（北東より）

同　ＳＸ 22 全景（北東より）

同　ＳＸ 23 外観（南東より）

同　ＳＸ 23 内部（東より）

ＰＬ．８



宗岡家地点第Ⅴ区　調査区設定状況（南東より）

同　完掘状況（南東より）

宗岡家地点第Ⅴ区　ＳＷ 01 全景（北東より）

同　ＳＷ 01 東部（北より）

同　ＳＷ 01 中央部（北より）

同　ＳＷ 01 西部（北より）

同　東西断面（南東より）

同　東西断面東半（南東より）

同　南北断面南半（東より）

同　南北断面北半（東より）

ＰＬ．10

宗岡家地点第Ⅴ区　下層確認トレンチ完掘状況（北東より）

同　ＳＷ 02 完掘状況（東より）

同　下層確認トレンチ北壁断面（南より）

同　下層確認トレンチ西壁断面（東より）

同　下層確認トレンチ東壁断面（西より）

宗岡家地点第Ⅴ区　ＳＷ 02 構築面検出状況（西より）

同　ＳＷ 02 上面砂層検出状況（北西より）

同　ＳＷ 02 上面砂層検出状況（大写し、北より）

同　サブトレンチ①完掘状況（南東より）

同　サブトレンチ①北壁断面（南東より）

同　サブトレンチ①北部西壁断面（東より）

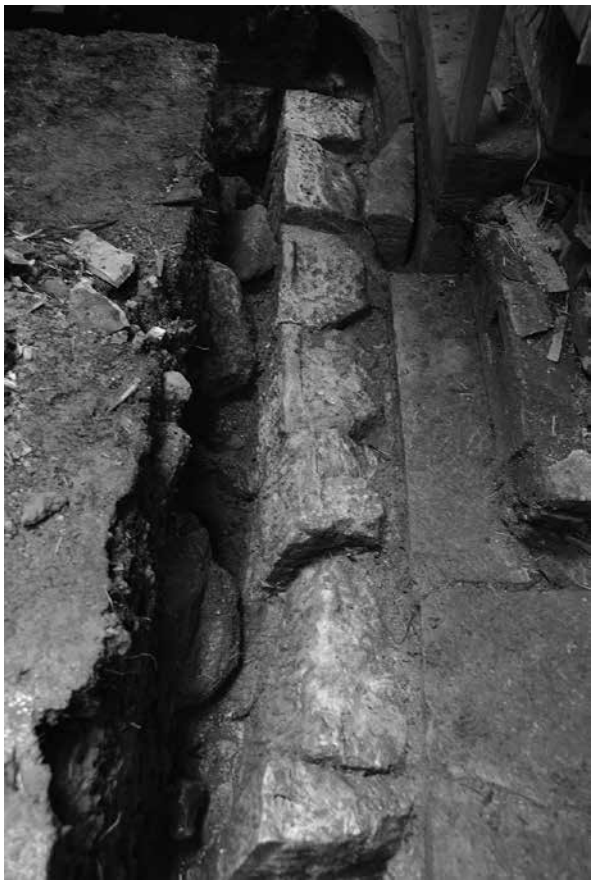
同　サブトレンチ①北部東壁断面（南西より）

ＰＬ．12

豊栄神社地点　本殿・拝殿（東より）

同　境内地内調査前状況（北より）

豊栄神社地点１トレンチ　ＳＤ 01 完掘状況（北より）



同　ＳＤ 01 南半完掘状況（南より）

同　ＳＤ 01 中央部完掘状況（南東より）

同　北部西壁断面（東より）

同　中央部南壁断面（北東より）

ＰＬ．14

豊栄神社地点２トレンチ　ＳＤ 01 完掘状況（北西より）

同　ＳＤ 01 西壁（南東より）

同　ＳＤ 01 東壁（北西より）

同　北壁断面（南西より）

同　南壁断面（北東より）

豊栄神社地点３トレンチ　完掘状況（南西より）

同　ＳＤ 01 完掘状況（北西より）

ＰＬ．16

豊栄神社地点３トレンチ　ＳＤ 01 完掘状況（南西より）

同　ＳＤ 01 丸太材検出状況（南西より）

同　ＳＤ 01 胴木②北端部（東より）

同　南壁断面（北東より）

同　ＳＤ 01 東壁（北西より）

同　ＳＤ 01 西壁（南東より）

同　ＳＤ 01 西壁胴木①（南東より）

同　ＳＤ 01 東壁胴木②（北西より）

豊栄神社地点３トレンチ　完掘状況（北東より）

同　東半部完掘状況（東より）

同　硬化面検出状況（東より）

同　石列検出状況（南より）

同　硬化面検出状況（北西より）

ＰＬ．18

豊栄神社地点４トレンチ　完掘状況（北西より）

同　西壁断面（東より）

豊栄神社地点５トレンチ　西壁断面（南東より）

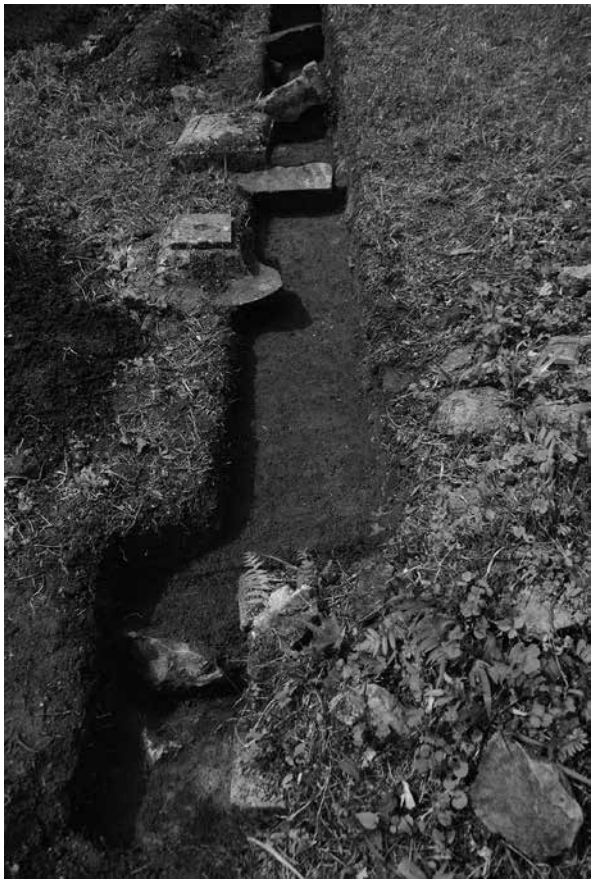
同　完掘状況（南西より）

同　玉垣基礎検出状況（南東より）

同　灯篭基礎（北西より）

豊栄神社地点６トレンチ　完掘状況（北西より）

豊栄神社地点７トレンチ　完掘状況（南西より）



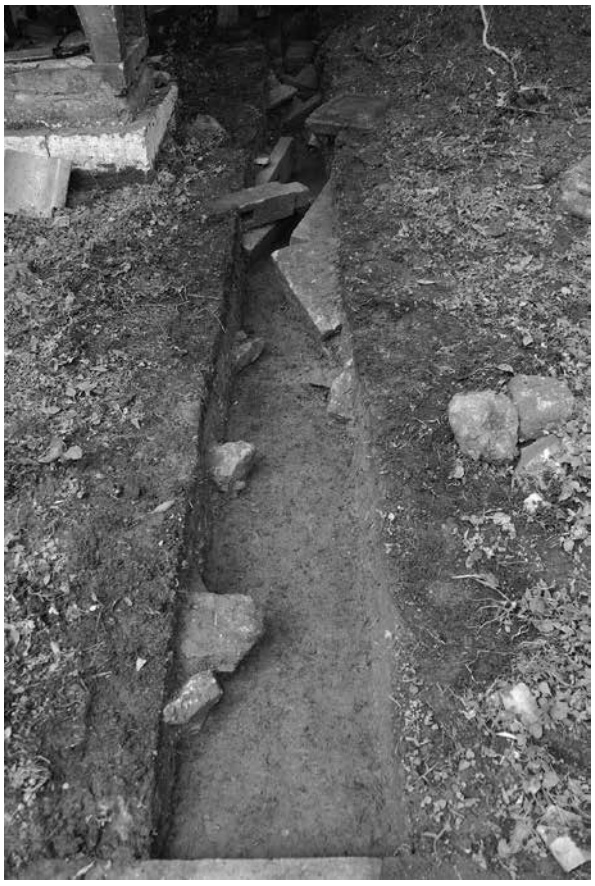
同　完掘状況（北東より）

同　西壁断面（南東より）

同　北端部完掘状況（東より）

ＰＬ．20

豊栄神社地点８トレンチ　完掘状況（南西より）



同　完掘状況（北東より）

同　北半部西壁断面（東より）

同　玉垣出土状況（北西より）

同　南半部西壁断面（南より）

同　石造物出土状況（南東より）

豊栄神社地点８トレンチ　作業風景（北より）

豊栄神社地点９トレンチ　西壁断面（南より）

豊栄神社地点 10 トレンチ　完掘状況（北東より）

豊栄神社地点９トレンチ　完掘状況（南西より）

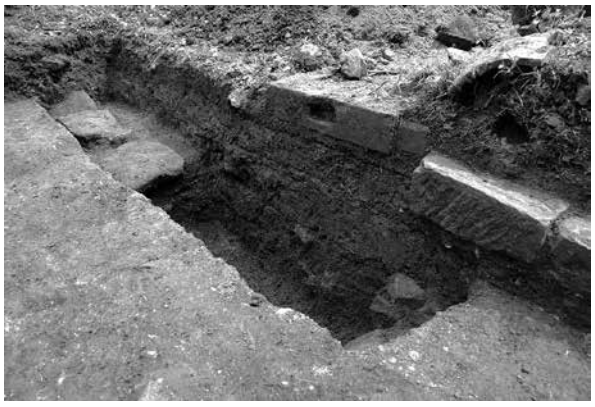
同　北半西壁断面（北東より）

同　南半西壁断面（北西より）

ＰＬ．22

豊栄神社地点 11 トレンチ　完掘状況（南西より）

同　東壁断面（北西より）



同　東壁断面（西より）

豊栄神社地点 12 トレンチ　完掘状況（南西より）

同　西壁断面（南東より）

同　南端部完掘状況（北東より）

豊栄神社地点 13 トレンチ　完掘状況（南西より）

同　西壁断面（南東より）

同　西壁断面（北東より）

豊栄神社地点 14 トレンチ　完掘状況（南西より）

同　西壁断面（南東より）

同　北端部完掘状況（南西より）

ＰＬ．24

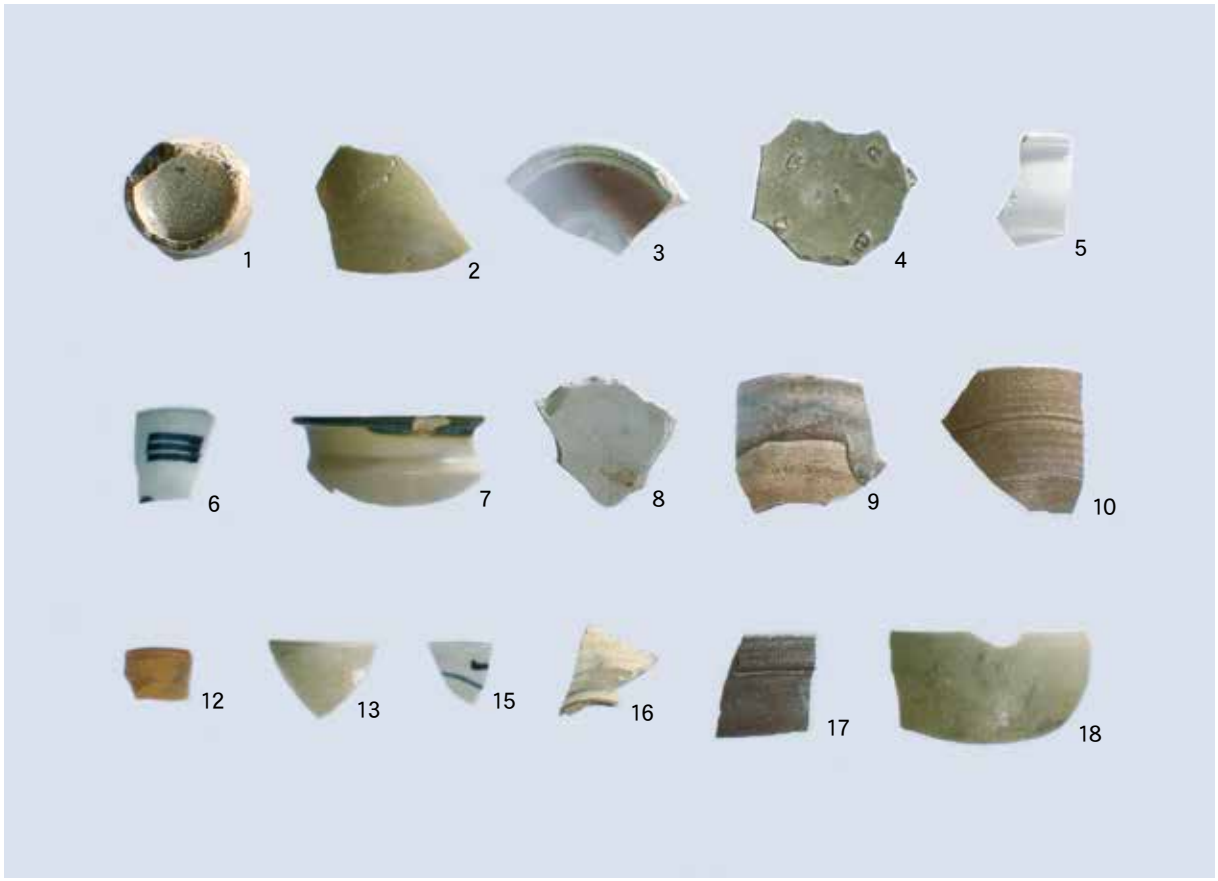
上市恵比須社地点　全景（東より）

同　完掘状況（南より）

同　土層断面（南東より）

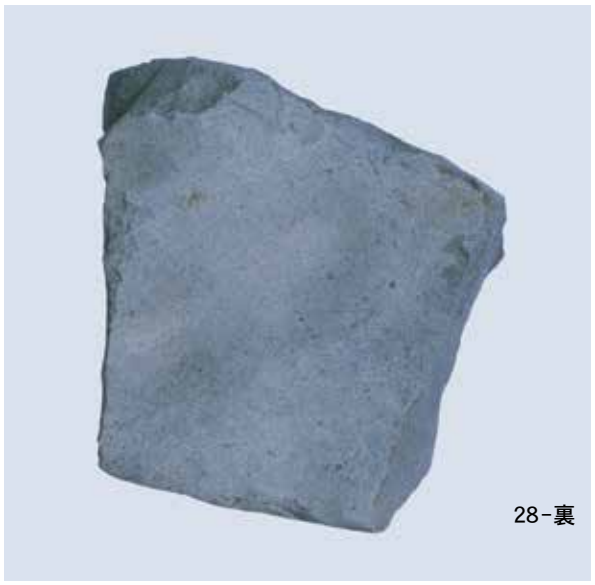
同　南部石列（北東より）

同　作業風景（南より）



昆布山谷地区出土遺物Ⅰ

PL. 26



昆布山谷地区出土遺物Ⅱ

宗岡家地点出土遺物Ⅰ

PL. 27

宗岡家地点出土遺物Ⅱ

豊栄神社地点出土遺物Ⅰ

ＰＬ．28

61

70

63

73

76

豊栄神社地点出土遺物Ⅱ

79

82

80

83

81

84

同　出土瓦

PL. 29

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

豊栄神社地点出土・採集瓦

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いわみぎんざん
書 名	石見銀山　Iwami-Ginzan Silver Mine Site
ふ り が な	いわみぎんざんいせきはっくつちょうさがいよう
副 書 名	石見銀山遺跡発掘調査概要 24
シリーズ名・巻次	昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点
編 者 名	山手貴生・新川　隆・尾村　勝
編 集 機 関	島根県大田市教育委員会
所 在 地	〒 694-0064　島根県大田市大田町大田口 1,111 番地
発 行 年 月 日	2016 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査年月日
		市町村	遺跡番号			
石見銀山（いわみぎんざん）	島根県大田市大森町（しまねけんおおだしおおもりちょう）	32205	A232 ～ 319	35° 5’ 30”	132° 26’ 30”	2015 年 5 月 ～ 2016 年 1 月

調 査 面 積	126 ㎡
調 査 原 因	国庫補助事業による学術調査

所収遺跡名	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石見銀山	鉱山遺跡 町屋跡 寺社跡	戦国時代 江戸時代 明治時代	土坑 石列 炉跡 溝跡 石積	陶磁器 金属製品 石製品	国指定史跡 銀生産遺跡 （1969 年 4 月 14 日） （2002 年 3 月 19 日、 2005 年 3 月 2 日、 2005 年 3 月 14 日、 2008 年 3 月 28 日 追加指定）

石　見　銀　山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要 24

●

－昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点－

２０１６年３月

島根県大田市教育委員会

島根県大田市大田町大田口 1,111 番地

印刷・製本　急行印刷